
永月物語

氷雪うさぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永月物語

【Nコード】

N0268N

【作者名】

氷雪つとむ

【あらすじ】

目が覚めればそこは幻想郷だった。

自分がまだ異世界に来たことさえも知らない御巫晴輝の幻想入りは始まる。

一話 「未知の世界」 (前書き)

知る人ぞ知る、東方projectの二次創作ジャンル、幻想入り。
また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

一話 「未知の世界」

俺はなぜこんなところにいるのだろうか。

目を開けて最初に漏らした言葉はそれだった。

「どこだ……ここは？」

目の前に広がる竹の林。

俺の知る限り、こんな景色を見れるのは古都として有名な県の辺りしかなかった。

だが、そこと俺のいるここは違う場所みたいだ。

それを決定的にしたのは空に浮かぶ月だった。

「月が……」

二つあったのだ。

大きな三日月が一つ。そして、その隣に小さな満月が一つ。

「……………」

俺がいくら世間で言う一般人とかいうものから離れている所にいる人間（前に妹にそう言われてしまったんだが）だからといって、所詮はただの人間。

そりゃ驚きもするし、恐怖って感情だって持っている。

しかし、俺はこの状況に驚くことも、怯えることもしていなかった。それもそのはずだった。

「俺は……死ねなかつたのか？」

月を見上げ、俺は震える声で憚ることなく、宛てる先のない言葉を言い放った。

「なんでだよ……なんで、なんだよ……なんで死なせてくれないんだよっ！！」

雲のない星空。

俺は久しぶり だと思いが、泣いた。

それこそ泣いている子が黙ってしまうほど、大きな声で。

俺は自分の命を、自ら絶とうとしていた。
完遂できなかった自分の行為に対して、俺は今までで一番大きな声
で怨み言を叫んだ。

あれからどれくらい経ったのかわからない。

そもそも、考えてもいなかった。

俺はただ泣いて、悔やんで、そして

この、自分の知らない世界から帰りたくない。

そう思っている自分がいた。

「ここなら誰も……」

俺のことを疎み、蔑むものはいない。

それだけが、俺がこの世界　いつ、どこから、どうやってきたか
もわからない世界において、通常の思考をできるだけの神経を繋ぎ
止めていたものなのかもしれない。

しかし、人間というものはつくづく不思議な生き物だと思う。

自分がこの世界にいたいと思っっていることや、腕につけた傷やそ
の痛みがなくなっていることについて、俺は一度も不思議だと感じ
ることがなかったのだ。

自分でもよくわからないのだが、むしろそれが必然であると思っ
ていた。

しかし、物事を考えられる神経を持ち合わせていることは必ずしもい
いものとは限らない。

「あ……」

その場に立ち尽くしてから五分。

この世界に迷い込み、死ねなかったことを悔やみ叫び続けるという、
暴走していた俺の心が平常を取り戻しつつあった。

だが、そうなると今度は恐怖が俺の心を蝕みだしていたのだ。

「と、とりあえず。誰か、人を……」

こうなってしまうと人間というものは滑稽なもので、俺は無意識の
うちに体を震わせ、辺りの物音一つにビクビクしながら竹林の中を

歩き続けていた。

草むらが動いたたびに俺の身はビクリと反応する。

そこにありもしないものを認識し、より悪いほうへと妄想という名の想像が働いていく。

そのせいだろうか。俺の進む先の方から声がした　　ような気がした。

「声……ということとは、人がいる……のか？」

しかし辺りには誰もいない。ついに幻聴まで聞こえてきたか。

それでも、俺の気持ちは軽いものに変わっていた。この恐怖を拭い去ってくれる人がいるという希望に。

（幻聴でなければ）その主がどういう人かも知らないのに。

俺は立ち止まり耳を澄ませる。

声は確かに聞こえた。それも少しずつ近づいてくる。

「　　！！　　やっぱり誰がいるんだ」

俺は心底ほつとしていた。

誰でもいい。とにかく人に会いたかった。

この十九年間、今まで慣れていたはずの孤独だったが、俺は初めて人恋しさというものを感じていたのかもしれない。

改めて自分の性格を冷静に分析している間にも声は近づき、やがて耳を澄まさなくてもその声は聞こえる距離にあった。

「こらあっ！　ちよっと、てあっ！　待ちなさいよっ！　！」

「待てと言われて待つやつはいないよー」

声の質からして、どうやら女の子が女の子を追っているらしい。そして、その近づく方向からして、どうやらこっちに向かってきているみたいだ。

相手が誰であれ、とにかく人と話せることに俺は安堵し、声のする方へと足を向けた。

「な　　」

だが、冷静さを取り戻していたはずの俺の顔は、いつのまにか鳩が豆鉄砲を食ったような顔になっていた。

やってきたのはやはり少女である。

和調ではあるが、ピンクのワンピースにセミロングの黒髪。

ここまではなんでもない。普通の少女だ。

「んだあいつ……?」

俺に不意打ちをかけたのは少女の頭にあった”耳”だった。それも白の。

見るからにうさぎのものである、その”耳”を揺らしながら少女は俺めがけて走ってきた。

そして少女は、

俺に話しかけることなく、また俺のことを見ることもなく、

ただ横を通り過ぎていった。

「……え?」

慌てて振り返ったときは既に遅く、うさ耳の少女は既に小さくなりつつあった。

「ちよつと、あのっ?」

無駄とはわかっていているが少女に声を投げてみたが、やはり返事は返ってこない。

「まったく、なんだった」

去り行く少女にため息をはき、視線を元向いていた方へ戻した。

しかし、俺の視界に映ったのは元の竹林ではなく。舞い上がるスカ

ートに、日焼けしたことのないような真っ白な足

「ぶはっ!?!」

それはほんの一瞬だった。俺の意識は糸のようにプツリと途切れ、繋ぎなおされたときには俺の視界は竹林から夜空へと変わっていたのだ。

そして、次に俺が認識したのは頭の前と後ろ、その両側からじりじりと伝わる鈍痛だった。

何が起こったか皆目わからない。ただ、何かにぶつかった、もしくは殴られたことだけはなんとかわかった。それは頭の痛みが証明している。

そして、それが原因だろう。俺の意識は少しずつだが薄れだしていった。

「!?」

誰かが、何かを喋っている。それだけはなんとか理解できた。

消えゆく意識のなか、俺は最後に見たもの。スカートの下隠れていた女性の下着の”色”を呟いていたのだろう。

ぼんやりと見える少女の顔にわずかな赤の色が付け加えられている。そこで俺の思考は途切れた。

一話 「未知の世界」 (後書き)

初めての方、初めまして。そうでない方、ヤッフー。氷雪うさぎです・x・

今回は当サイトに登録した記念に幻想入り動画で製作中の永月物語の原作を転載することにしました。

毎週末に一話ずつupしていこうと思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

Website: <http://hyousetuusaagi.yukiresho.com/>

二話 「永き時を生きるものたちの拠り場、永遠亭」(前書き)

知る人ぞ知る、東方projectの二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

今回はコミケの都合で早めのupです。

二話 「永き時を生きるものたちの拠り場、永遠亭」

目に映ったのは見慣れた景色。いわゆる学生服というものを着た少女少女たちが談笑している。中には遠くから俺を見ては小声で話しているやつもいた。

そうか。ここはあの忌々しい教室か……。

あの頃のクラスメイトたちの話題はいつも俺に対しての悪言だった。まあ、仕方ないといえば仕方ないよな。

留年。

ただそれだけで、周り俺は隔絶された。

はじめこそあたたく接してくれたみんなに俺は心を許していたが、いつの日からか、彼らの目は変わっていた。いや、仮面を外したというのが正しいのかもしれない。

進学校だったこともあり、この生徒たちはみな勉強というものに対して、負の感情を抱きやすかったのだろう。今思えば、みんなは留年した俺をただ哀れんでいただけだった。

同じものを勉強するにしても、初めて学ぶみんなと、過去に一度学んでいる俺。

その差はやがてテストというもので示され、みんなの目が哀れみから嫉妬のものに変わった。

そのことに心をすり減らし、誰もいないところで何度も泣いてた日が二、三週間ほど続いたが、それも梅雨の季節になるとどうでもよくなっていた。

どうも、その辺りのことに関して心が麻痺してしまい、気にさえならなくなっていたのだ。

(ああ……なんてこと思い出すんだ俺は……)

俺はそんなどうでもいい この腐った日常から離れたかった。

それが“死”という形でも。そう決意して俺は……。

「うっ……」

わずかながら意識の戻った俺の目に入ったのは見慣れない天井だった。

ぼんやりとしていた意識のなか、身体を起こして辺りを見渡す。

床は畳で、部屋を仕切っているのは襖。しかも、それとは別に帳とばしまであった。

まるで平安時代でもやってきたみたいだな。

どうやら、そんな部屋で俺は眠っていたみたいだ。

「ここは……？ つ！？」

意識が明瞭になっていくにつれ、頭を悩ます鈍痛がはっきりと伝わってくる。

「どうやら気がついたみたいね」

そんな矢先、俺に対してだろう。女性の声がかげられた。

聞き覚えのない声だったが、俺は声のするほうへ首だけを向けてみる。

「ここは“永遠亭”よ」

そこにいたのは俺と同じくらい高身で、妙齡の美女だった。

「永遠……てい？」

聞きなれない言葉に、知っている言葉を探してみる。

しかし、結局理解することはできず、俺は首をかしげた。

「そう。永き時を生きるものたちの抛り場よ」

「あなたは……？」

俺の目の前にいる女性。

彼女は上下とも赤と青の、市松模様といったらよいのか、そんな服を着ている。

「私は八意永琳やいこのえいりん。この永遠亭の住人よ」

「やごころ……えーりん？」

わからないことだらけの彼女の話に、俺は置いてけぼりをくらっていた。

しかし、彼女はそんな俺にかまうことなく話を進めていく。

「あなた、近くの竹林で倒れていたのよ」

「そうですか。おかげで助かり　っ!？」

彼女に謝辞を述べ、俺は深々と頭を下げてただけだった。

鈍い痛みだったはずの頭痛をかき消す、顔に走った強烈な痛み。

「な、いた……ああああ」

俺はその場にうずくまって、痛みを漏らしていた。

「ちょうど骨がくつつく頃だと思っから、安静にしてなさい」

骨がくつつく!?　　いったいどういうことだよ?　　というか、ここ

はどこだよ!?

聞きたいことが山ほどあるが、あいにく今、俺の口はそんなことを聞けるほどの余裕は持ち合わせていなかった。

「う、うう……あああああっ!!」

痛い。痛い!　　痛い!!　　痛いつ!!

彼女の言葉なんて耳には入らず、俺はただ痛みを悶え呻いた。

これじゃあ安静にするというより、せざるを得ない。

「仕方がないわね。試作段階だけど、この薬を飲ませようかしら」

試作段階!?　　おい、今試作段階って言ったか!?

文句を言おうにも、俺の口は言うことを聞かず、ただ言葉にならない声で思いをわめいている。

「大丈夫よ。効果はあるはずだから」

そうして、俺は永琳さん曰く、『試作段階』の薬を飲まされた。

その後、俺の意識が再び切れたことは言うまでもない。

あれから、どれほどの時が経ったか俺にはわからない。

ただ、目を覚ましたときには顔の痛みはもうなくなっていた。

(顔は……もう痛くないか)

自分の顔をぺたぺたと触り、その具合を確かめてみる。

喋ることもできないほどの痛みが、まるで嘘だったようにきれいさっぱり消えていた。

視界も明瞭で、天井の木目さえもしつかり見える。

「いつたいなんだったんだ……？」

体が元の調子に戻ったためか、思考する余裕さえも生まれていた。

「まさか……夢？」

最初はあるの美女、永琳さんとのやりとりをそうとも考えた。

だが、彼女とのやりとりが嘘でないと、夢でないと、あの時感じた顔の痛みが訴えている。

「じゃあ……まさか、本当に？」

布団から起き上がり、部屋の中を見渡してみる。

天井の木目、部屋と部屋を仕切る襖。室内にある帳。

そのすべてが、夢だと思っている光景と同じというほど似通っていた。

「と、いうことは……」

夢じゃない、ということか。

もし、彼女の存在永琳さんが本当なら、ここは永遠亭というところらしい。

「とにかく、今は一つでも多くの情報がほしいな」

腰を上げ、部屋を出るために襖へ向かって足を進める。

わずかな好奇心こそ持っているが、俺を突き動かしていたのはただ情報がほしい、このわけのわからない状況から脱出したいという気持ちからだった。

そして、目の前の襖を開け　　ようとしたとき、

「あ……」

俺が襖を開ける前に襖が開けられ、そこには小さな女の子が立っていた。

年にして十四、五だろうか。

小さなフリルのついたピンクのブラウスに、竹を主とした和風な刺繍が施されている赤のロングスカート。

そしてスカートの膝よりも長い、墨を流したような黒髪が特徴的なその子が俺をじっと見ていた。

「お……」

女の“子”と思い、はや三秒。その考えはすぐさま改められた。

俺を見る彼女の目、手持ち無沙汰な手が見せる仕草。

そのどれをとつても、少女には持ち得ない艶かしさとも言える特別なものを持っていた。

「……………」

少女は俺を見るだけで何も答えない。

こうして、俺は彼女の姿に言葉をかける機会を逸してしまった。

二話 「永き時を生きるものたちの拠り場、永遠亭」(後書き)

初めての方、初めまして。そうでない方、ヤッフー。氷雪うさぎです・x・

そんなこんなで第2話です。今回もお楽しみくだされば幸いです。余談ですが、来年はこんな感じのAVG作れたらいいな。

毎週末に一話ずつupしていることと思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

Website: <http://hyouseituuusagi.yukiresho.com/>

三話 「理外の世界、理外の住人たち」(前書き)

知る人ぞ知る、東方 project の二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

三話 「理外の世界、理外の住人たち」

「……………」

「……………」

目の前にいる少女と俺。

お互いに声をかけることもなく、時間は変わらずに流れていく。

「あ、あの……………」

「……………」

俺はいたたまらなくなつて、少女に声をかけていた。

だが、少女は首をかしげて俺を見ているだけで、返事もしなければその場から動くこともなかった。

「その、永琳さんから聞いている……………よね？」

「……………」

だが、彼女は何も答えない。

「ここって、永遠亭……………だよな？」

それでも、この少女から少しでも情報を得ようと、俺は言葉を続けていく。

「……………」

しかし、彼女は視線を他へ移すこともなく、依然として何も答えてくれない。

その沈黙はやがて俺にまでやってきて、口の動きが止まってしまった。

そうして再び無言で見つめあう俺と目の前の少女。こつも続くと気恥ずかしくなつてしまふ。

そんな俺とは対照的で、彼女は飽きもせず俺を見ていた。いったい何なんだ？ そんなに俺が珍しいのか？

だが、不思議なことに俺はこの場に残り、立ち続けている。それこそ、この場を離れようと思えば離れられるのに。

しかし、俺はそうしなかった。

いつまでも続きそうな、居心地の良くも悪くもない、なんともいえない静寂。

しかし、それを破ったのは彼女のほうだった。

「ふーん……こいつがえーりんの言ってた、御巫晴輝か……」

それだけ言っただけ、少女は俺の頭から足の先にいたるまで、それこそじろじろと、まるで物珍しいものを見るように、俺を見ていた。

ちよつと待て。どうして永琳さんは俺の名前を知ってるんだ？

俺はまだ自己紹介なんかしてないぞ。

「おい、俺は」

「えーりんは天才だから、なんでも知ってるんだよ」

「……………」

おいおい。彼女は天才だから、俺の名前なんて聞かなくてもわかるっていうのかよ。

「みんな待つてるから、とりあえず広間にいこっか」

少女はそれだけ言っただけで俺に背を向けた。

「ちよつと待てよ。えつと……………」

「わたしは、輝夜^{かへ}、蓬萊山輝夜^{ほうらいのいみかんかへ}ね。んと、呼ぶときは輝夜でいいわ」

彼女は振り返り、それだけ言っただけで再び体を反転させる。

「おい、ちよつと……………」

俺の呼びかけに応える様子もなく、輝夜と名乗った少女は俺の声に振り返ることなく歩いていく。

その場にいても仕方ないということもあり、俺もその後に行くことにした。

目の前にいる少女、蓬萊山輝夜。

迷い込んでしまったこの世界のことや、そして今いるこの永遠亭という旅館(?)のことなど、先に考えるべきことが山ほどあるのもかかわらず、俺の頭は彼女のことについてぱいになりつつあった。

別に小さい子が好きとかいう嗜好とかはない　はずなんだが。
しかし、目が合ったときのあの色めいた仕草にドキツとしたのは事
実である。

単に彼女が魅力的なだけなのか、それとも俺にそういう好みが……？
(いったい、彼女はなんなんだ……？)

という、実に俗な考えのせいで俺は他のことをまったく考えること
ができなかった。いや、単に考えることを放棄していただけなのか
もしれない。

俺は心のどこかで感じていたのだろう。どれだけ知恵を絞って考え
ても、俺の求める答えが見つかることはない。

人間、誰しも自分のなかにある常識という名の価値観に物事という
ものを置いて認識をする。

もちろん、俺もその例外ではない。

だからこそだ。この異世界において、俺の持つこの常識は役に立た
ない。いや、むしろあるほうが邪魔なんじゃないか？

「晴輝―何してるの？　ここよ」

何十人で行っているような脳内会議の思考に割って入ってくる輝
夜の声。

「……え？」

俺はどうやら立ち止まっていたらしく、輝夜はずっと先の部屋の前
で襖に手をかけて俺が来るのを待っていた。

「ああ、ごめん。今行くよ」

「さ、どうぞ」

そして、俺は輝夜に促され、部屋　というより広間に通された。

「もう大丈夫そうね」

入って最初に声をかけてくれたのはこの永遠亭で最初に出会った永
琳さんだった。

もちろん、あのことが夢でなければだが。

「ええ、まあ……」

あのことが信じられないということもあり、俺の返事もどこか曖昧

なものにならざるをえなかった。

「でもよかったわ。もし、治らなかつたらどうしようかと思っていたのよ」

そう言つて、永琳さんは安堵の笑みを俺に向けていた。

彼女の動作にもその心模様は伝わっていて、ほっと胸を撫で下ろしているのがわかる。

おいおい、マジで試作段階の薬だったのかよ。そう思うと、彼女の笑みが俺の怪我が治ったことに対してではなく、薬の実験が成功したことに対しての笑みに見えてしまうな。

「ま、まあ。師匠の作る薬は完璧ですから大丈夫ですよ」
きつと、俺は『顔に書いてある』とでもいえる顔をしていたのだろう。

永琳さんの向かい側、ちょうど俺の斜向いに正座している少女が苦い笑みを俺に向けてくれていた。

見たところ年は十七、八くらいだろう。不思議なことに、この場において一番俺の理解できそうな感じの子だった。

……ついさっきまで。

「うさ……みみ？」

なんなんだこの子。なんだつてうさみみなんてつけてるんだ？ 永琳さんもなにも言わないし、何かの罰ゲームなのか？

時折揺れるそれを気にしてはいけないと、何度も自分に言い聞かせるが、俺の目は彼女の頭上にある二つの”耳”をはつきりと捉えていた。

「ああ、これのことですか？」

「れーせんは月のうさぎだからねえ」

俺の視線はれーせんと呼ばれた少女の頭上から、彼女の隣に座る、まだ幼さの残る声の主に移された。

ピンクのワンピース……だろうか、その少女は俺の隣にいる輝夜よりも幼く見える。それと頭には、れーせんさんとはわずかに形が違うも、うさみみがべたりと髪の上に寝ていた。

「月のうさぎ？」

「そう。月のうさぎだよ」

「……………はあ？」

この異世界について一つでも多くのことを理解しようと、フル回転させていた俺の思考回路は早くも、熱暴走オーバーヒートしてしまったようだ。

うさみみ？ 月のうさぎ？ 彼女たちの言うことが何一つとして理解できなかった。いったいなんなんだ、ここは。

「とにかく、一つずつ説明していきましようか」

俺は永琳さんに促されるまま、広間に腰を下ろし、彼女の話聞くことにした。

「まずは自己紹介からしたほうがよさそうね」

何一つ理解できていない俺のことを察してか、永琳さんは話を進めていく。

俺は冷め切っていない頭をなんとか働かせて頷いた。

「それじゃあ、改めて。私、八意永琳やじろみえいりんよ。この永遠亭で、姫様のお世話をしているわ」

腰辺りまであるだろう、長い銀髪を一本の三つ編みにしている妙齡の女性が 俺がこの永遠亭というところで最初に出会った永琳さんが自己紹介を始める。

それに続くようにして、

「それじゃあ、わたしももう一回、蓬萊山輝夜ほうらいざんかげやよ」

俺の向かい、永琳さんの隣に座る少女 輝夜が、

「わたしが、因幡いなばてゐね」

ピンクのワンピースを着たうさみみの少女が、

「レイセンです」

そしてブレザーにスカートという、頭の耳さえなければどこかの私立学園にでもいそうな少女がそれぞれ自己紹介してくれた。

「れーせんだよ？」

「あら、ウドンゲよ？」

「違うわよ。イナバよね？」

その後、てみちゃん、永琳さん、そして輝夜によって彼女の呼び名が付け足される。

三者三様に呼び方が違うあたり、この人はきつといじられキャラなんだろうな。

その後、レイセンさんが反論しても聞き入れてもらえなかったのは言っまでもない。

こうして、広間にいる自己紹介も終わり、俺は次の話に向けて頭を休めることにした。

「……」

「……？」

その場にいる全員が俺をじっと見たまま、口を開こうとしない。

なんだ？ 俺、なにかしたのか？

「晴輝、自己紹介」

四人の視線を一身に受け、うるたえている俺に輝夜が助け舟を出してくれた。

「ああ、そういえば。すっかり忘れてた。えーつと……、御巫晴輝みかなぎ はるきです」

俺はとりあえず自分の名前だけを答えてみんなの返事を待った。

もっ少し自己紹介らしいことを言うべきだったか……？

「で、竹林で何かにぶつかって気を失ったみたいで、気がついたらここに運ばれました」

「あはは……」

「うさうさ」

「……？」

俺の自己紹介の途中、明らかに動揺しているレイセンさん。そして、不敵な笑みを浮かべて彼女を見ているてみちゃん。いったいどうしたんだ？

「あの子たちが、あなたをここに運んだ理由よ」

頭に『？』マークでも浮かばせている俺に永琳さんが彼女たちの所作の補足をしてくれた。

「えーっとですね……」

……。

……。

「つまり、そのこのため……ちゃんをレイセンさんが追いかけていたと。で、その通り道に偶然俺がいて……」

「ぶつかったということですよ。すみません……」

「いや、それはいいんだけど」

涙目で頭を下げるレイセンさんを制する言葉を出しながらも、俺の考えは他にあった。

普通、人にぶつかったただけであんなに吹き飛ばされるものなのか？ 永琳さんの話が本当なら骨が折れてたか、砕けてたんだぞ。

と、俺の持つ常識が当たり前の疑問を持ち、口を開こうとしたときだった。

「まったく。反省しないとダメだよ、れーせん」

「そもそもあんたが原因でしょっ！……」

「ちゃんと名前を書かないから食べられるんだよー」

「おまんじゅうに名前なんか普通書かないわよっ！ って、待ちな

さい」

てみちゃんの言葉にレイセンさんが感情のままに腰を上げ、そのまま二人のやりとりは追いかけてここにまで発展してしまい、二人は途中の話も気にせず、部屋を飛び出していつてしまった。

……完全に機を逸してしまったようだな。

このことには、

「ま、まあ。あの二人にはちゃんとっておきますから」

「はあ……。まあ、いいですよ？」

永琳さんもやれやれといった様子で、苦笑まじりにため息をついていた。

「さ。うるさいのもいなくなっただし……永琳」

「そうですね、姫様」

輝夜から放たれた一言で、永琳さんの緩んだ顔にわずかな緊張が走る。

永琳さんの隣に腰を下ろしている少女、蓬莱山輝夜。

声の質こそ同じものだが、そこから受ける印象はまったくの別人のものだった。

それだけではなく、彼女の持っていた柔らかで穏やかな雰囲気も静かな、しかし決して心が落ち着くことのないものに変わっていた。あえて言葉にするなら、それなりに年を経た貴族のような、上流階級の間人だけが持つ独特の存在感。

俺がもつとも嫌いな雰囲気、空気だ。

それをこんな若い少女が持っているなんて正直、驚きだった。

永琳さんが彼女を姫様と呼んでいるあたり、本当にどこかの姫様なんだろうな。

「それじゃあ、あなたがここにやってきたお話をしましょうか」

永琳さんの言葉が俺を思考の世界から現実へと引き戻す。

「あ、ああ……」

俺は居すまいを正し、彼女の話に耳を傾ける心の用意をする。

しかし、不思議なものだ。

常の俺ならば、相手が誰だろうと避けてきたはずの雰囲気。

それが輝夜に限って、そう思わなかったのだ。

さらに、もう一つ。

この人たちの前だと、思わず正座している自分だ。

そう思ったのも、実際に姿勢を整えて正座している自分がいたからだ。

「まず、ここがどこかはもうわかったかしら？」

「永遠亭……ですか？」

「そう。私たちはこの世界を“幻想郷”と呼んでいるわ。そして、

ここはそのなかにある永遠亭というところよ」

「晴輝は運がよかったわ。もし、紅魔館にでも飛ばされていたら……」

「…」

「どう、なつてたんだ……？」

「さあ？ まあ、玩具にされるならまだいいほうかもしれないわね」
俺が輝夜に視線を合わせると、彼女は俺の不安を煽るような微笑みを見せた。

そんなに恐ろしいところなのか？ 紅魔館というところは。

「……とにかく、話を続けますね」

俺たちの脱線しつつあった話を永琳さんが元の路線へと戻す。

「元々、この世界に人が迷い込むことはないのだけれど、この世界の“波長”と言ったほうがいいのかしら。とにかくそれとその人の持つ波長が重なったときに……」

「……こちらに来てしまう。ということですか？」

「ええ。あなた、元の世界で何かあったの？」

「……」

永琳さんが俺をまっすぐに見ている。

その目は相手を責めるものでも、また何かを追及しようとしているものでもないことだけはわかる。

けど、俺は何も答えられなかった。

せつかく助けてもらったのに、自分で命を捨てるような真似をしてこの幻想郷に飛ばされてしまったなんて、到底言えるものじゃない。

それに、口にしてしまえば、実に愚かしいことをしたんだと実感してしまいそうで、言いたくもなかった。

「……そう。話したくないのなら、私たちも無理には聞かないわ」
彼女の諦めのよさに正直、俺はホツとした。

「まあ、永琳が帰る方法を調べている間はここにいるといいわ。この世界はあなたたちの世界とは何もかもが違うから」

「違う……って、文化とかが？」

「まあ、すぐにわかるわ。ちょうど、今夜はあいつがきそうだし」
それだけ言うと、輝夜はまた妖しげに笑っていた。

「あいつ？ あいつって、いったい」

それを聞こうと思ったが、

「こらーっ！！ 待ちなさいっ！！」

「待てと言われて待つバカなんかいるわけないじゃない。ねーせんつて、バカなの？」

「てゐっ！！」

人目を憚ることのないような大きな声が耳に届く。

「……………」

「……………部屋、教えてもらっていいですか？」

「……………またも、追いかけてくしている二人によって、俺はその機を逸してしまった。」

俺は短い間ではあるが世話になる客間で大の字で横になっている。

輝夜たちの提案を受け、元の世界へ帰る方法が見つかるまでの間、俺はこの永遠亭で過ごすことにした。

「しっかし……………」

俺、どうなるんだろうな……………。

そんなことも思ったが、俺は考えることができなかった。

事が急展開過ぎてこれ以上難しいことを考えれば頭が爆発してしまいそうだった、ということもある。

だがそれだけでもない。

「彼女、いったいなんだっただんどうな……………」

俺の思考でなんとか使い物になる部分の大半は、永遠亭に住む彼女へと向けられていたからである。

……………蓬萊山輝夜。

詳しくは何も聞いていないが、謎の多い子だな。

「ふう……………」

何度となく寝返りをうつしても、このもや、霧もぎがかかったような思いがどうにかなることはなかった。

そうして寝返りを繰り返すこと一時間。

俺は輝夜の言った、俺の世界とこの世界との“違い”を知ることになった。

三話 「理外の世界、理外の住人たち」(後書き)

初めての方、初めまして。そうでない方、ヤッフィー。氷雪うさぎです・x・

コミケ明けのせいで少し間が空いた感じがしますが第3話です。今回もお楽しみくだされば幸いです。

なんかちよつと長いです・x・

毎週末に一話ずつupしていることと思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

てゐがうさぎさ とか言うのはわざとです。実は言わないですよね？・x・ウサウサ

Website: <http://hyouseituusagi.yukigesho.com/>

四話 「弾幕と炎の翼を持つ少女」(前書き)

知る人ぞ知る、東方projectの二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

四話 「弾幕と炎の翼を持つ少女」

「輝夜！ 出てきなさいっ！」

その声はやけに馬鹿でかく、そして通りの良い声だった。

声からして、その主が女であることだけはわかったが。

「誰だよ……こんな時間に……」

俺にとってはそんなことより、安眠を妨害されたことに関しての怒りのほうが前に出ていた。

寝そべった身体を起こし、廊下側の襖に手をかける。

時計なんてものは持ってなかったが（持っていたとしてもアテにはならないだろうけど）、それでも体の感覚でまだ夜中であることはわかった。

体内時計が便利だと思ったのはこのとき初めてだったかもしれない。

俺はこんなはた迷惑な時間に叫ぶ声の主が知りたいという好奇心と、その主に一言文句を言いたいという気持ちだが、俺の体を突き動かしていた。

しかし、俺はまだなめていたのかもしれない。この幻想郷という世界を。

『世界が違う』と言われても、この地球上のどこかだと俺は思っていたし、信じていた。

つまり、どこかの漫画みたいに空中で謎の光弾を飛ばしあったり、目に見えない速さで殴りあったりするみたいな非現実的なことはあり得ないと思っていた。

「な……」

襖を開けて、見えるのは外の庭に面している廊下。

庭の純和風の景色が俺の目に飛び込むと同時に、非現実的なものも一緒に映っていた。

白髪の少女が宙に浮いている。

それも、背中からあり得ないものを出して。

「炎……か!？」

見ているだけでその熱波に体を焼かれてしまいそうなほど赤々と燃えるもの。それは紛れもなく炎の羽、いや翼だった。

人が炎を出す? というか、宙に浮いているし……。

あり得ない。いや、少なくとも俺の知っている常識では起こり得ないはず。

それを目の前の少女は平然とやってのけている。

「もう、せつかくいいところだったのに……」

どうやら、彼女の声は他の人にも届いていたらしく、続々と輝夜、永琳さん、レイセンさん、てみちゃんが俺と同じ廊下に出てきては宙にいる少女を見上げていた。

「やっと出てきたわね輝夜。今日こそ殺してやるわ」

おいおい、えらく物騒なこと言う子だな。

ここはまず止めに入るべきなのだろうが、俺は目の前で燃え上がる炎を纏った少女に対して臆しているのか、声を出したくても出せないでいた。

体さえ言うことを聞かず、その場に立っているのでやっとだったのだ。

というか、最初に出てきたはずの俺だが、今ではすっかり部外者扱いになっていた。

「もう。今からみんなでボス戦だっというのに……」

ボス戦? 彼女、ゲームでもしてたのか……。

そんな俺の視線の先にいる輝夜はため息をつくと、その体を夜空へと舞わした。

おい、ちよつと……。あんたんまで空を飛ぶのかよ。

「そう。ならちよつとよかったわ。あんたの邪魔もできたみたいだし」

少女はご満悦といった様子で輝夜を笑っている。

対して輝夜は、

「別に大した問題じゃないわよ。あんたなんか一分でもっこもこにしてあげるわ」

同じように笑っていた。彼女もなにやってんだか。第一、もっこもこってなんだよ、日本語なのか、それ。

そうして笑いあっていた二人だが、互いに睨み合うと、二人はなんの疎通もなく同時にはるか上空へと飛び上がった。いった。

「まったく、妹紅もこうのやつ。毎度のこととはいえ……」

二人が夜空に翔けたのと入れ違いにやってきた理知的な女性。

頭の上にある帽子なのおしろが印象的で、胸のあたりにあるリボンがまた整然とした彼女の容姿に女性らしさを付け加え、よりよく引き立たせている。

背は俺よりも高く、そのたたずまいもあつてか、相対的に自分が幼く感じてしまう。

「あら。あなたも来ていたのね。確か……かみしらさかみしらさわ上白沢慧音けいねさん、だったかしら」

いつの間にか隣に来ていた永琳さんが永遠亭を囲む塀の上からという、入り口ならぬところから入ってきた慧音さんを出迎えていた。「今晚も邪魔をしてしまうな」

彼女の物言いははつきりとしたもので、胸にあるリボン以外からは可愛さや可憐さといったものが一切無い。

その代わり、どこか凜とした感じがあり、いうなれば『大人の女性』の魅力とも言うべきか、そんなものがあつた。

「いいのよ。あの二人のことは今に始まったことじゃないのだし」
永琳さんはそういつて、屋敷の中へと戻っていつてしまった。つて、茶飯事だからって放置するのっか!?

いつの間にかレイセンさんとてあちゃんもいなくなっており、廊下には俺と慧音さんだけになっていた。

「……………」
彼女はただ、空にいる二人を見上げている。

そこには輝夜と、（出てきた名前を考えると）妹紅、でいいのかな。とにかくその少女が空の上で対面していた。

「そういえば、お前が御巫晴輝か」

「え？」

突然かけられた声に心臓が跳ね上がる。

振り向くと、そこにはこちらを見ている慧音さんの姿があった。

「え、ええ。でも、どうして俺の名前を？」

「ぶんぶんまるしんぶん文々。新聞にあれだけ大きく載っていれば誰でも知っているさ」

「ぶんぶんまるしんぶん？」

「ここにはそういう新聞があるのか？」

「それに、彼女から色々聞かせてもらったからな」

「彼女？」

「八意永琳だ。気がついたらこの幻想郷にいたらしいじゃないか」

「ええ、まあ……」

「この世界を見て、驚かなかったか？」

「かなり驚きましたよ。人が空を飛ぶし、火は出すし、最初は化物とか妖怪かと思いましたし」

「化物、か……確かにそうだな」

俺のそんな言葉に彼女は静かに笑っていた。

「って、まさか。本当にそういうもの……なのか？」

「あの、もしかして」

「ああ、すまない。でも、答えはその目で見たほうがいいだろ」

そう言って、慧音さんは視線を再び空へと戻した。

彼女に促されて、二人のいる空へ目を向ける。

二人は何かを話しているようだが、この距離では何を言っているのかまったくわからない。

しばらくして、ひとしきり話が済んだらしく、二人の距離はゆるりと広がった。

「彼女たちはいったい、何をしてるんですか？」

「まあ、見ていればわかるさ」

やはり慧音さんは答えてくれない。

そうして、俺が視線を外したほんの一瞬。

そう、一瞬のことだった。

再び見た夜空は俺の知る星空ではなかった。

「なん、だ……これ」

空に散りばめられた光弾たち。

それらはまるで意思を持っているかのように、統率された動きのもと、両者に襲い掛かっていく。

標的にされている彼女たちはそれらを難なくかわしては次の光弾を放っていた。

「見ての通り、弾幕だ」

慧音さん、これだけの弾の壁を弾幕ということくらいは見ればわかります。っていうか、弾幕ってレベルですか？ しかも、こんなのを楽々と避けてるあいつらは何者ですかっ！？

「これが、この世界の常識だ。お前もこの世界に身を置くのなら、覚えたほうがいい」

んなこといわれても、無理ですって。頭で理解しても、素直にそれを受け入れることができるほど、俺は柔軟じゃないです。どっかの誰かが提唱した進化論で例えるなら、俺は間違いなく変化する環境に対応できず、淘汰うたされる側のやつだろうし。

「それこそ、俺はどっかの漫画みたいに「はっ！！」とか言ったくらいで何か出せるわけでもないし、空だって飛べやしませんし。」

俺は普通の人間なんですよ。平々凡々、いたって普通のね。

「つける、おい！」

そりゃ、郷に入っては郷に従えとか言うけど

「おい、御巫晴輝っ！！」

「!?!」

いつの間にか遠くにいた慧音さんの声で、視線が空から離れる。

そこには慧音さんの発していた「危ない」という言葉を体現する光弾ごと、弾幕がこちらに向かって飛んできていた。

俺との距離はそこまでいうほど近くはない。避けようと思えば避けられる距離だ。

「ちょー」

だが、それはあくまで遊びで使うような球が飛んでくる速さでの話だ。

今、目の前にあるそれは速度が段違いに速かった。

避けることも、身を守ることにも間に合わない。

俺はただ呆然と、自分に迫り来るそれを見ていることしかできなかった。

「御巫っ！」

「っ！ー！」

そして『その時』。俺は反射的に目を閉じていた。

「輝っ！ー！」

誰かが俺を呼んだことはわかった。

だが、その声は弾が何かにぶつかった衝撃音にかき消されてしまい、それが誰のものであるかはわからない。

「……？」

いったい、なにが起こったんだ？

……体に痛みはない。ということは、俺は無事……なのか。

恐る恐る目を開けてみると、そこには、

「大丈夫、晴輝？」

上はピンク、下は赤。腰より長い黒髪をなびかせた少女。

「輝……夜？」

そう、彼女の姿があった。

「ちよつと、妹紅！ どこ狙ってるのよ、このへたっぴー！」

見たところ彼女にも外傷はなく、手には見たことのない木の枝を持っている、その枝についている様々な色をした玉のようなものが、あたたかな光をほのかに帯びていた。

「ちょっと、聞いているの？」

「……………」
空にいる妹紅と呼ばれた彼女は輝夜を、そして俺を見ていた……
ような気がした。

「……………」

「……………」

もしかして俺、邪魔だったのか？

「妹紅…………？」

「……………ふん。もう帰るわ。そんな人間をかばって戦うあなたなんか、面白くもなんでもないし」

それだけ言つて、彼女は帰ってしまった。

「お、おい。妹紅」

それに続くように、慧音さんも慌てて永遠亭から去ってしまい……
…つて、帰りも塀の上からですか。

「いったいなんだったんだ……………」

「危ないところだったねー」

何が起こったのかよくわからない俺をよそに、輝夜は初めて出会ったときと同じ、幼げな顔で笑っていた。

「さっきのはいったい……………」

「さっきの？ ああ、弾幕のこと？」

彼女はその言葉を当たり前のように使う。

……………『弾幕』。

今まで、弾幕といえば銃弾の壁みたいなイメージで、俺の知る限り日常で使われるような言葉はない。

だが、彼女のいうそれと俺の知るそれとは大きく意味が違うことを、改めて再認識させられた。

結局、それから輝夜に弾幕についてあれこれと教えてもらったが、やはり俺の理解の範疇を超えるもので、部屋の布団に入るときにはそのほとんどを忘れていた。

四話 「弾幕と炎の翼を持つ少女」(後書き)

初めての方、初めまして。そうでない方、おはようむ。氷雪つさぎです・x・

第4話にございます。ついに永夜メンバー(リグルとみすちーは…
…;)が勢ぞろいしました。ここからいったいどうなっていくのでしょうか「x」ニヤニヤ

お気に入り登録ありがとうございます！

執筆の大きな励みになります・x・

毎週末に一話ずつupしていることと思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

SSは基本upしないと思いますので、よければ下記のサイトで閲覧になってください。

Website: <http://hyousetuusagi.yuki-gesho.com/>

五話「自分の居場所」(前書き)

知る人ぞ知る、東方 project の二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

五話「自分の居場所」

翌朝。

俺はいつもより早く目が覚めた、ような気がする。

というのも、日がまだ朝日と呼べるものの高さに位置していたのと、俺の意識がまだ眠気に支配されていたからだ。

「ふわああああ……」

半身を起こし、間抜けな声で欠伸を一つ。しかし、それでもまだ眠い。

「……寝るか」

俺は二度寝という、健やか、かつ心地よい眠りにつくべく体を倒して目を閉じた。

……。

「おつきろー」

「ぐはっ!？」

快活な少女の声とともに、何かが俺の腹の上にのしかかってきた。とんでもない痛みが俺の腹に襲い掛かり、目を開かせる。

「くすくすっ」

のしかかった主は因幡てゐ。他ならぬ彼女だった。

「い……っ……」

俺はそのまま飛び起き たかったが、寝ていたところに飛び乗られたのだ。当然動くこともできず、言葉にならない声で呻くしかできなかった。

「やっとおきたね」

「て……ゐ……」

かるうじて出せた声で上にまたがる少女に視線をもっていく。

「うんっせ」

うさぎの真似……なのだろうか。まあ、この際そんなことはどうでもいいや。それより、このしてやったりという笑顔が腹立たしい以外のなにものでもなかった。

「……で、何？」

少しの間を置いて、ようやく喋ることのできるまでに回復した身体を起こし、とんでもない来客に改めて視線を合わせる。くそつ、ホントに痛かったじゃないか。

「朝ごはんができたから呼びにきただけなんだけど」

「……………」

おい。もしかして、それだけのためにやったのか。

「部屋まではわたしが案内してあげるからね」

「あ、ああ。とりあえず、着替えるからちよつと待っていてくれる？」

「？」

「……………」

着替えを手にする俺の目の前で、彼女は首をかしげている。

おい。なぜそこで首をかしげるんだ。それとも俺、何か変なこと言ったか？

「いや、だから。着替えるから……その、ね？」

「??？」

俺の言ってることの意味がわからないのか、彼女は依然として不思議そうな顔をしていた。

「ほら。君がいると、俺が着替えられないっていうか……………」

「ふーん、そうなんだ。それじゃあ、外で待つてるよ」

ようやく俺の言ったことを理解してくれたのか、彼女は部屋から出ていってくれた。

「さて、俺も着替えよう……………」

俺はとりあえず着ているものを脱ぎ、恐らく永琳さんが誰かが置いておいてくれたのだらう、洋服とはまた別のいわゆる甚兵衛羽織じんべえはおりを手に取った。

「しかし、あんまりのんびりもしていられないだらうな…………」。外に

いるのが彼女だし」

因幡てゐ。レイセンさんに追いかけられていたことといい、さっきのことといい。

俺の勘に間違いがなければ
パンツ。

俺の前方。ちょうど、彼女のいる廊下側の襖が開け放たれた。

「うさうさ」

「……………おい」

こいつ。やっぱりやりやがったか。

まあ、予想通りといえはそうなのだろうが。

まったく、（主に悪い意味での）期待を裏切らないやつだ。

ややあつて、てゐちゃんに連れてこられた一室の前。彼女はここが居間だと言っているが、先の一件が嘘の可能性を大に示唆していた。

だが、ここに来て二日目の俺にそれを判断するすべがないのもまた、事実だった。

「静かに入ってね」

彼女はそう言って、俺の半歩後ろに下がっていた。

俺はそのことになんら疑問を感じず、言われたとおりに襖を静かに開ける。

「……………」

今になってだが、俺は彼女の行為に対して何一つの不審を抱かなかった自分を恥じたくなかった。

因幡てゐ。まさかここまでやるか……………？

木製の洋服ダンスに、ふづくえ文机が一台。

整理整頓の行き届いている、無駄なものが一切ない部屋。

そんな部屋の真ん中に敷かれている布団からはうさ耳が顔を出している。

「おい、こいつて」

「それ」

「なっ!？」

俺が振り返ったときには既に遅く、俺はてみちゃんに突き飛ばされていた。

「それじゃ、ごゆっくり」

そうして、彼女はそのまま襖を閉めてしてどこかへ行ってしまった。

「……てて。ったく、あの悪戯うさぎ。いったい朝からなんなんだよ」

遠ざかる足跡。

「何を、やっているんでしょうか……?」

そして、入れ替わるように別の声が俺の後ろから聞こえる。

「……」

恐る恐る振り返ると、そこには顔を真っ赤にしたレイセンさんの姿があった。

ああ、起きてしまったんですね……。しかし、なんてベタなことを。

なんて、そんなことを悠長に考える間は与えられていなかった。

「え? あ、いや……これは」

「問答無用ですっ!」

永遠亭で迎えた最初の朝。

俺の頬に、昇った朝日のように真っ赤なもみじの跡ができたことは言っまでもなかった。

あれから、なんとかレイセンさんをなだめた俺は、彼女に連れられてようやく昨日の広間にやってくる事ができた。

「……」

隣の彼女は俺の案内を終えると、そのまま脇を素通りして広間に入っていく。

「あいつ……」

そこにはやはり、あの悪戯うさぎも当たり前といわんばかりに座っていた。

「まったく……何がしたいんだ、あいつは……。」

「俺への悪ふざけ（にしては度を過ぎていている気がするが）がうまくいったためか、彼女はご機嫌な様子だ。」

「……………」

一方、レイセンさんは不機嫌（当然だけど）なようで、さっきから目も合わせてくれない。

「あら、おはよう」

座布団の前に置かれている人数分の、平安時代にでも出てきそうな小さな食卓。

そこに箸やらお椀やらを置いている永琳さんが俺たちに気づくと、笑顔で迎えてくれた。

「おはようございます師匠」

そう言って、レイセンさんはさっきまでの不機嫌が嘘のように明るい声で挨拶を交わすと、そのまま自分の席に座ってしまった。

そんなものを見てしまうと、俺に対する温度差というものを改めて感じてしまう。

「おはよう……」

朝の一件のせいか、俺の挨拶はどこかきこちなかった。仕方ないといえば、仕方がないが。

既に座っているレイセンさん、そしてご機嫌のてみちゃん、さらには俺の頬にある赤々としたもみじ。

「……もうじき朝食ができるから、あなたも座って待ってなさい」

「あ、はい……」

それらを一瞥して、彼女は小さなため息をついていた。

「えーりん、できたわよー。あ、みんなもう起きたのね」

昨日と同じ、入り口に一番近い座布団に俺は座ると、今度は輝夜が広間にやってきた。

「おはようございます姫様」

「おはよー」

レイセンさん、そしててみちゃんの挨拶に続き、俺も言葉を返そうと思ったのだが、

「ああ、おは……」

俺の口はそこで止まってしまった。

広間の奥から出てきた輝夜。

その姿は昨日のものとはわずかに違っていた。服の上に一枚、エプロンをつけた輝夜がそこにいたのだ。

「どうしたの晴輝？ 人をそんなにじつと見ちゃってさ」

「あ、いや……」

「もしかして姫様に見とれてたのかな？」

「なっ!？」

俺は口を開けたまま固まってしまい、てみちゃんと輝夜はそんな俺を見てニヤついていた。そんなにじつと見ていたのだろうか。

「あ、いや……」

俺は返答に困った。可愛いといえば、確かに可愛い。それは認めるが……。

「お姫様が料理って、なんだか意外だなーって……」

「まあ、ここにいると料理くらいしかすることがないからね」

そう言っつて、笑みをこぼしている輝夜に向かって、

「それは姫様の生活が単に二　もがもが」

レイセンさんに口を押さえられているてみちゃんの姿を俺は見逃さなかった。

その後、永琳さんと俺で輝夜の作った朝食をそれぞれの食机しょつきに置き、幻想郷最初の食事の時間を迎えることになった。

食机には見たこともない種類の焼き魚に卵焼き、そして麦飯むぎいねやら五穀米とかではなく、ただの白米とお味噌汁という、朝食自体は俺のいた世界のものとなんら違いはないようだ。

「実はあれからね」

「まったく、彼女はいつも突然にやってきますから」

彼女たちの会話に混ざることなく、一人、黙って食を進めていく。わざわざ食机を使っているあたり、もっと静かに食べるものと思っ
っていたが、そういうことはないらしい。

そしてこの席だ。

部屋の左右に分かれて座っている彼女たち。左にレイセンさん、
てぬちゃん。右には輝夜に永琳さんといった具合だ。

俺の席は少し後方の、ちょうど彼女たちの間にある。その図式は
まるで、男尊女卑の風潮があった時代の食風景を描いたようだった。
上座や下座なんてものを気にしないとしてもだ。これは明らかに
気まずすぎる。

そんななか、食事も半ばの輝夜が俺の席へとやってきた。

「幻想郷での朝ごはんはどう？」

「え？ ああ。おいしいよ」

それはお世辞でも、ましてや嘘でもない。率直な意見だった。

「そう？ ならいいけど。でも、どうしたの？ さっきからずっと
ダンマリじゃない」

「あ、ああ……」

昨日からあれだけのことがあったんだ。そりゃダンマリにもなる
さ。それに今朝もあんなことがあったんだし。

「いや、昨日来ての今日だしさ。ちよつと、ね」

なんてことは言えず、俺は曖昧な答えを返す。

「そんなこと気にしてたの？ 別に遠慮することないのに」

だが、諸々の俺が抱えている心配事を彼女は“そんなこと”で片
付けてしまった。

「いや、そんなことって……」

「だって、わたしたちがいるじゃない。ほら」
彼女に促されるがまま、俺は視線を向ける。

「なんで……？」

そこには永琳さん、てみちゃん、そしてさつきまで不機嫌だったはずのレイセンさんの笑顔があった。

なんでだよ。なんで……？

「ね？ だから気になんかしくていいのよ」
「……………」

俺は彼女の顔を見ることができなかった。

まっすぐな、透き通った瞳が見せる笑顔が。

俺は複雑な思いを胸に卵焼きを口に運んでみる。

その味は俺の心模様とは違って、素直に美味しいと言えるものだった。

だからこそ、俺は思ってしまう。

(本当に、俺はここにいていいのだろうか……？)

ここに自分の居場所なんてないのではないかという疑問を抱えて、俺は朝食を無理矢理胃の中に押し込んだ。

五話「自分の居場所」(後書き)

初めての方、初めまして。そうでない方、おはようむ。氷雪つさぎです・x・

第5話にございます。この辺からゲームなら選択肢とか出てきて輝夜ルートまっしぐらなんでしょうね・x・イエーイ

お気に入り登録ありがとうございます！

執筆の大きな励みになります・x・

毎週末に一話ずつupしていこうと思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

SSは基本upしないと思いますので、よければ下記のサイトで閲覧になってください。

Website: <http://hyousetuusaagi.yukiagesho.com/>

いつも読んでくださる方のためにもまだまだ頑張りますよ！ ムッ
ホホイッ！

六話「蓬莱山輝夜」(前書き)

知る人ぞ知る、東方projectの二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

六話「蓬萊山輝夜」

朝食後、

「……………」

部屋で何をするわけでもなく、襖の一点をただぼーっと見ていた。

「晴輝、入るよ?」

明るく、活気のある声とともに入ってきた少女、蓬萊山輝夜。

出会ってまだ二日目というのに、その声に警戒や心理的な垣根はなく、邪気のない笑顔を見るあたり、オープンな性格を思わせた。

「ああ、輝夜か。どうしたの?」

「どうって、別にないけど……………」

それだけ言っただけで、彼女は頬をかきながら苦い笑みを浮かべていた。

「……………」

急に静まりかえってしまう部屋。風も鳥の声も、何もかもが黙している。

自分の発した言葉を引っ込めることができるのなら是非そうしたいものだと、今心の底からそう思った。

「そうね……………強いていうと、遊び相手がないから誘いに来ただけなんだけど……………。もしかして、忘れちゃった?」

意外、というよりどこか残念そうな顔をして、彼女は俺を見ていた。

「そういえば、なにか約束した気もするが」

「あ、ああ……………。ちゃんと覚えてるよ」

慌てて記憶の引き出しを引っ張り出していく。……………思い出した、

あのことが。

それは朝食の後の話だ。

「……………ですから、今日はダメです」

「えー」

永琳さん相手に、ふてくされている輝夜。

どうやら、永琳さんが遊んでくれないことに拗ねているようだ。

「すみませんが、今日はお一人で遊んでください」

「わかつたわよ、もう……」

永琳さんが応じないことに諦めたのか、輝夜は次なる遊び相手へと視線を移す。

「それじゃあ」

「「!？」」

しかし、そのことに気づいたうさぎたちの二人は、

「わ、私は用事がありますので……」

「わたしも、うさぎたちのところにいかないとー」

食机を両手に、慌ててキッチンへと行ってしまった。

おいおい、そんなに嫌なものなのかよ……。

そして、

「じゃあ……。晴輝はいいでしょ？ 別に用事とかもないんだし」

やはり、というべきか。その対象は俺にも回ってきた。

「俺は……」

あの三人を見る限り、あまり良い感じはしないのだが……。仕方ない、遊ぶか。これもお世話になっている恩返しだと思えばいいんだ。

「うん、別に構わないよ」

「本当？」

目を輝かせて俺を見上げる輝夜。

みんな、そんなに遊んでくれないのか？

「俺でよければ。まあ、遊びの内容にもよるけど……」

「それじゃあ、後で呼びに行くね？」

そうして、広間を出ていく輝夜は終始ご機嫌だった。

ここまで言んでもらえるのなら、受けたかいがあったな。

「うん。それじゃあ、また後でね」

広間を出た彼女を見送り、俺も広間を後にした。

そうして今に至るわけだ。

「それで、いったい何を？」

「それはわたしの部屋でね」

変わらぬ笑顔を見せる輝夜。俺は連れられるまま、彼女の部屋へと向かう。

輝夜の部屋そのものは他の部屋と違いはなく、襖なども同じものである。

「さ、どうぞ」

彼女に促されて部屋に入った……が、輝夜の部屋に俺は驚きを隠せずにいた。

なんなんだ、この部屋は。

「え、ちよ……」

そこには、テレビやDVDレコーダー。さらにはパソコンやゲーム機にいたるまでである。とてもではないが永遠亭の持つ、“古風”というイメージに該当するような部屋ではなかった。

だが、部屋の雰囲気とミスマッチなものたちの存在に、俺はどこか安堵のようなものを感じていたのだ。

「どうしたの？」

「いや、なんでこんなものがあるのかなって」

「ああ、それ全部にとりから買ったのよ」

にとり？ ああ、あの店のことか。幻想郷にもあるんだな。こんなところ

なんて、かなりズレた思考で彼女の言葉を脳内変換し、適当な意味を補足しておく。しかし、あそこで電化製品なんか売ってたかな？ というより、幻想郷にあの店があるわけないだろ。

しかし、代わりに『にとり』という言葉の意味を説明できる言葉がなかったため、俺はそのまま放置することにした。

「そ、そうなんだ……」

そんな思いをのど奥にでも放り込んで、俺は改めて部屋の中を見

回した。

パソコン、テレビ、DVDレコーダーにゲーム。それにCDかMDかは知らないがシステムコンポまであるじゃないか。

見れば見るほど、元の世界にある自分の部屋そっくりである。

女の子の部屋とは到底思えないな……。

「ちよつと晴輝？ 女の子の部屋をあんまりじろじろ見ないでよ」

あまりにもあからさまだった俺の行為を輝夜は楽しげに窺める。

そんなに見ていたのか、俺。

「ああ、ごめん。なんか似てたから、つい」

「……………ふ〜ん、そうなんだ」

言葉の先を聞く前に彼女は不敵な笑みを浮かべて俺を見ていた。

しかしなんとというか、自分より年の低い（見た目だけは）子に注意されるなんて初めてのことだったな…………。

こうして、俺は彼女の部屋と一緒に遊ぶことになった。

…………。

…………。

輝夜の部屋で“遊び”を始めて数時間。

そうか…………そういうことか。これじゃあみんな逃げたくもなるわけだ。

もう言わなくてもわかるだろうが、それはいわゆるテレビゲームとかいうやつだ。

それも、俺のいた世界で最近発売されたゲームばかりだった。

「晴輝、次はこれねー」

「まだやるのかよ…………」

「もっちろん。一日中よ」

マジですか。もう、かれこれ（時計がないので気持的に）四時間近く休憩なしだと思っただけ…………。

普通、一日中ゲームをするというだけでもかなり疲れるというのに、恐らく永琳さんたちは俗に言う3D酔いにもなるのだろう。

道理で避けようとするわけだ。

それに加えて、

「ねえ、そろそろやめない？」

なんていう俺の言葉に、輝夜は耳を貸さず、

「やらないならわたしだけやっちゃおうよー？」

一人で次のゲームをプレイしだしたのだ。

まったく、なんてやつだ……。

……。

……。

しかし、さすがの輝夜も空腹には勝てなかったのだろう。結局、彼女がゲームをやめたのはお昼前になってからだだった。

てみちゃんに呼ばれ、昼食作りにキッチンへ向かった俺と輝夜。

「晴輝君、ちよつといいかしら？」

「あ、はい」

俺はその従事にあたっていたところ、突然永琳さんに呼び出されたのだ。

先に行く永琳さんに続き、そのまま廊下へと出る。

「いったいどうしたんですか？」

「姫様のことでちよつと……」

彼女は半ば呆れの形で言葉を切ると、話を進めた。

「あなたも気づいたと思うけど、あの方は二……いえ、生活が少し……」

察しろ、ということなのだろう。彼女はキッチンにて昼食を作っている輝夜に視線を向けてため息を吐いた。

確かに、輝夜を見ているとあの『かぐや姫』とは似ても似つかないと感じてしまうが。

「まあ、言いたいことはわかりますけど……。具体的に俺は何をすればいいんですか？」

「とりあえず、姫様を外に連れ出してくれないかしら？ あの方、家でげーむやばそこんばかりされて、外には滅多に出ないから」

「さすがにそれは体に良くないですよね……。いくら死なないといつても」

思わず、俺もため息を吐いてしまった。きつと、さっきやった『耐久ゲーム』のせいで、疲れていたのだろう。

これは永琳さんから聞いた話だが、輝夜は不老不死。つまりは死なない体らしい。老いることもなければ、外的損傷などで死ぬこともないということだ。

「確かに、私としてもどうにかしたいのだけど。姫様本人が、ね」
永琳さんの見せる、力のない笑みが少し不憫に思えてしまう。

「ですよ、やっぱり……。お姫様なら、もう少し他の人の鑑になるような生活をしないとダメですね」

思わず出た、俺の言葉に永琳さんは、

「ええ、そうね……」

小さく頷いた。

「……………」

気のせいだろうか。それまで呆れていた彼女の表情に、わずかながら他の感情が混ざっていたような気がした。

昼食も終わり、俺は永琳さんに頼まれたこともあり（実際はあのゲーム地獄から開放されたくて）、輝夜と一緒に竹林の中を気ままに散策していた。

当初、俺の誘いを頑なに断っていた輝夜だったが、永琳さんの（輝夜曰く悪魔じみた）笑顔に渋々ではあるが、了承したという経緯はあるが。

「それで、どこに行くの？」

そうして永遠亭を出発してからまだ五分と経っていない。しかし、輝夜はもう何十分も歩き続けたかのような顔で気だるそうにしていた。

「どこって……。それを俺に聞く？」

当然、俺はこのあたりのことなんて知るはずもない。そのことを

わかって彼女は聞いているのだろうか。

「ああ、そうか。晴輝はこのあたりのことを知らないよね」

「当たり前でしょ……。って、そういえば輝夜は家にいることが多いんだよね？ それならこの辺りのことはわからないんじゃない？……？」

「まあ、大丈夫でしょ」

そういつて、彼女は笑っていた。

いったい、この自信はどこから湧いてくるのだろうか。

しかし、彼女のそんな笑みを見ると、本当に自信があるようにも思えてしまう。

(俺も輝夜のように……)

いや、今さら昔のことを悔やんでも仕方がない。

俺は笑顔を見せる彼女に合わせて、静かな笑みをこぼした。

歩きだして数分。俺も、そして輝夜も口を開かずに、ただ歩き続けている。

単に話題がなかったということもあるが、俺は彼女とこの静かなひと時を共有したかっただけなのかもしれない。

遠くから聞こえる鳥の囀りなえず。風に揺れ、ざわめく竹葉の音。

それらと見事に溶けあつた俺たちの沈黙。

今まで、俺の知る“黙る”という行為や、そこから生まれるものはどれも良い印象のない、むしろ悪い印象のものばかりである。

だが、彼女と今共有しているそれは、そんな思いを微塵も感じさせない、それどころか自分から進んで言葉を控えたくなくなるようなものだった。

輝夜も話しかけてこないあたり、俺と同じ気持ちなのだろうか。

「……ねえ、晴輝」

そんな矢先、輝夜からこの沈黙を破ってきた。

黙っているのも悪いよな。

「……なに？」

「やっぱり……元の世界に帰りたい？」

さつきまでの明るかった表情が嘘だったかのように、彼女から笑顔が消えている。

それはこの世界に来て、ずっと悩んでいたものだった。俺はどう答えるべきか、何を言っただけほしいのか。正直、わからなかった。

俺の持っている常識や世界観なんてものをぶち壊した、この世界から帰りたくないと言えば嘘になる。元の、あの常識的な世界に俺は帰りた。

だがもし、俺がここから帰れたとしても……。

幻想郷

「……………」

「やっぱり、帰りた？」

「いや、ごめん……自分でもよくわからないんだ」

これが正直な答えだった。本当にわからないのだ。

しかし何故だろう。嘘をつくことには慣れていたのに、この世界では……いや、彼女たちにだけは嘘をついてはいけないような気がした。

まあ、見知らぬ世界で嘘をついてもすぐにボロが出るということだろう。

だが、俺はどうもそれだけではないような気がしてならなかった。

その根拠がなんなのかわからないが。

「そっ、か……………」

彼女は小さく呟いて、俺の半歩前に出る。

「でもね……………」

そのまま足を止めて振り返り、

「晴輝がずっと永遠亭にいたいと言ったら、わたしたちは歓迎するからね」

輝夜は満面の笑みを俺に見せてくれた。

そのときの彼女の笑顔は、その容姿とはかけ離れた大人の、長い時間を生きてきた人間が持つ“優しさ”のようなものを持っていた。

六話「蓬莱山輝夜」(後書き)

初めての方、初めまして。そうでない方一週間ぶりです。氷雪うさぎです・x・

今回で第6話。そろそろ物語が動き出した頃でしょうか。

まだまだ続くでしょうが、どうか最後までお付き合いくださいませ・x・；

今回は朝から試験を受けておりました、夕方のupになってしまいました。遅くなって申し訳ないです；

お気に入り登録ありがとうございます！

執筆の大きな励みになります・x・

毎週末に一話ずつupしているように思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

SSは基本upしないと思いますので、よければ下記のサイトで「一覧になってください」。

Website: <http://hyousetuusaagi.yukiagesho.com/>

七話「憂鬱な午後」(前書き)

知る人ぞ知る、東方projectの二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

七話「憂鬱な午後」

どこまでも続く緑に囲まれた、舗装どころか手入れさえされていない自然の道。

一歩一歩の感触が違うのはそのためだろう。俺は久々に感じるそれを楽しんだ。

「……………」

俺とは逆に輝夜は見慣れ、歩き慣れしているためだろう。どこか気だるそうに歩いていた。

それでも、無言でただ歩いていたというわけではなく、俺たちは言葉少なではあったが、談笑を続けて竹林の中を進んだ。

「……………」

どこまで続くかわからないこの散歩（？）。

だが、その散歩もわずか数分で終わりを告げることになった。

「ここ、は…………？」

目の前にあるのは木製の家屋。俺のいた世界ではもう数の少ないであろう木造の一戸建てだ。屋根は茅葺で、他はすべてが木でできているあたり、作られた時代がいつ頃なのかがうかがえる。と、いうより。永遠亭もそうだったが、この世界にはそもそもコンクリートやセメントを使った近代的な建築物がないような気がした。

「ここが妹紅のうちよ」

「も…………？」

「藤原妹紅。昨日、永遠亭に来たやつのことよ」

彼女は昨晚見せた好戦的な笑みを作ると、家のドアを叩いた。それも思い切り。

というか、思い切りというレベルではなかった。

（こいつ、壊す気か！？）

俺は彼女のしていることから、昨夜やってきた二人の少女のどち

らが妹紅かすぐにわかった。

間違いない。昨日、彼女と弾幕を張って戦ってたほうだな。

そして、戸を激しく叩く音で辺りを埋め尽くす頃になってようやく炎を操る少女、妹紅は出てきた。

「誰だ！？ …… って、こんなことをするのはお前しかいないか」

「おはよう、もちちゃん」

「な、なによ。気持ち悪いわね」

甘えるような声で妹紅に挨拶をする輝夜。

俺はその後ろいるため、彼女がどんな顔をしているのかは知らないが、それを見た妹紅は何か『気持ち悪いもの』を見ているような、そんな顔をしていただろう。

「な、なによ輝夜。朝からうちに来るなんて……」

普段の彼女が見せることのないだろう姿に、妹紅は驚きの声を示していた。

「いや、暇だったから遊びに来たわ」

「暇って……。あ」

輝夜の様子に圧倒されていたのか、妹紅が今になってようやく俺の存在に気がついたらしい。

彼女は俺を睨むだけで、特にこれといったことをする様子はない。

「……どうも」

「……」

案の定、俺の声には耳を貸すことはなかった。

……。

……。

なんとというか……。うん。空気が凍ってしまった気がする。

その場にいる誰もが口を閉じてしまったのだ。

「……まあ、いいわ。立ち話もなんだし、入りなさい」

どこかきまりの悪そうではあったが、妹紅は俺たちを迎え入れてくれた。

中は予想通りといえれば予想通りの、昔の家そのものである。

今でも田舎とかに行けば、見ることができるかもしれないけど。

居間の中央を陣取っている炉にはやかんが置かれており、さっきまで火にかけていたのか、その口からは湯気が出ている。

「ここつて、妹紅……さんが、一人で住んでるの？」

妹紅あかねの視線を感じ、俺は慌てて名前の後に敬称をつけた。

「……………そうよ。まあ、慧音はよく遊びに来るけど」

上白沢慧音かみしろあわけいね。 昨晚、俺の隣にいた弁当箱のような帽子（なのだろ

うか……………？）をかぶっていた少女のことだろうか。背は俺より高く、話し方もどこか理知的で可愛いというより、むしろ美しいという言葉のほうが似合いそうな人だったな。

「そう、ですか」

「……………」

妹紅は何も言わず、部屋の奥へと消えていつてしまった。

……………俺、もしかして嫌われてるのか？

昨日の夜もそうだったが、今日の態度を見ても明らかだ。何故かは知らないが、彼女は俺を避けている節がある。俺、なにかしたんだらうか……………？

「はい、お茶」

俺の抱える不安なんてお構いなしに、輝夜は炉にあったやかんの湯で勝手にお茶をいれて飲みだしていた。しかもそれだけではなく、俺の分までいれてくれている。

「あ、ありがとう……………」

飲んで、いいのだろうか……………。

「それで、今日はなにしに来た……………あんた、ほんと遠慮つてものを知らないのね」

妹紅は居間へ戻ってくるなり、俺たちを見て呆れ果てていた。

それが輝夜に対してか、俺に対してか、それとも二人ともに対してかはわからないが。

話は世間話(？)らしきものから始まり、二人はお茶をすすっていた。

俺はというと、そんな話をただ聞いているだけで、その間一言も喋ってなかったりする。

それもそのはずだ。俺は妹紅に睨まれて以降ずっと、彼女の機嫌に一喜一憂していたのだから。

早い話、彼女が怖かったりするわけだ。

あれだけ睨まれれば、誰だって近寄りがたいと思うといえそうなのだが。

とにかく、そんなことがあって俺はずっと彼女の様子をうかがっていたわけなのだ。

そのことを知ってか知らないのか、当の妹紅は輝夜と話し込むばかりで、俺なんか眼中にないといった感じだった。

こんなことが続いて、外はもう日暮れに近づいてきている。

そんな時玄関から声がし、

「妹紅、入るぞ？」

少しして慧音さんが俺たちのもとにやってきた。

何か用事でもあったのだろうか？ それとも、単に遊びにきただけか。

なんて、いささかズレた考えをめぐらせていると、

「いらっしやい、慧音」

「お邪魔してるわよ」

二人は彼女を迎え入れ、妹紅は早速湯のみにお茶をいれていた。

「なんだ御巫。お前も来ていたのか」

「ええ、まあ」

そんな二人から少し離れたところに座っている俺の隣に、彼女はわざわざ腰をかける。

「話に入らないのか？」

「せっかく弾んでますからね。無理に入るのも悪いかと思って」

「そうか。なら、私と話すか？」

そう言つて、彼女は笑顔をこぼした。やっぱり、永琳さんと同じで理知的な人だな。

「慧音さんと？ あ、いや。でも……」

俺はちらりと妹紅と輝夜へ視線をやる。妹紅と慧音さん。二人の仲の良さは永琳さんたちにある程度は聞いていたこともあり、俺は答えに迷っていた。

やっぱり、せつかく来たわけだしな……。

「それとも……私じゃ不満か？」

そんな俺を慧音さんは悪戯っぽく笑っている。小首をかしげた彼女の長い髪が流れる水のように肩から胸にかかっていた。

その姿は、理知的な彼女のイメージと相まって、どこか魅力的なものがある。

「ああ、いや、その……」

「クスツ……冗談だ」

彼女は笑いに耐え切れなかったのか、声を漏らしていた。

「私のことは気にするな。帰るのはいつも夜が更けてからだから」

「はあ……」

彼女の見せた笑顔は、見るものをなだめるような、そんな笑顔だった。

「それで、幻想郷での暮らしはどうだ？ 元いた世界とは勝手が違つて何かと不便していると思うのだが」

「今のところはないですけど……」

俺は幻想郷に来てから起きたことを一つ一つ思い出していく。

……確かに不便はしていない。……不便はな。

「まあ、驚きはしましたけどね。俺の世界じゃ信じられないようなことばかりですから」

というか、驚く程度じゃすまなかった。

「そうか。私もそうじゃないかと思っていたよ」

「少なくとも僕のいた世界じゃ、あり得ないことだらけですよ」

弾幕とか、空を飛んだりとか、うさみみ人間とか。

「まあ、戻る術がわからない今、ここでの生活に早く慣れるといいな」

彼女の言葉に、

「俺もそう思いますよ、まったく……」

俺は心中で反論の言葉を投げた。

(まったく……。こんな生活に慣れてたまるかよ)

心の奥から湧き出たような大きなため息が口からこぼれる。

しかし、この生活に早く慣れないと、心身ともにてるちゃんの悪戯で参ってしまいそうだ。

「なに、じきに慣れるさ。もし、帰れなくなかったとしても、私たちはいつでも歓迎するぞ」

彼女の見せた穏やかな笑顔は嘘偽りのない“本物”の笑顔だった。俺はここなら、みんなに迎えられる。誰からも疎まれない。

そう思うと、胸のうちが喜びの色に染まるような感じがして嬉しかった。

嬉し、かったが……。

「どうして……」

「ん？ どうした？」

「あ、いえ。なんでもないです……」

慧音さんの不思議そうな顔に咄嗟に作り笑いで誤魔化すと、俺は顔をそらした。

どうしてだよ。どうしてここの人たちはみんな……。

俺には彼女たちの考えがわからなかった。

七話「憂鬱な午後」(後書き)

初めての方、初めまして。そうでない方一週間ぶりです。氷雪うさぎです・x・

諸事情により一日早く第7話です。

これからも読んでくださる方々のためにも頑張りたいと思います・x・

毎週末に一話ずつupしていることと思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

SSは基本upしないと思いますので、よければ下記のサイトでご覧になってください。

Website:<http://hyousetuusagi.yukigesho.com/>

八話「湯けむりの向こうには」(前書き)

知る人ぞ知る、東方 project の二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

八話「湯けむりの向いじには」

その後、俺と輝夜は妹紅と慧音さんに見送られて、夕焼けに染まる竹林の中を進んだ。

「晴輝？ どうしたの？」

帰り道の途中、輝夜が歩きながらではあるが言葉をかけてきた。

「ん？ ああ。実は妹紅、さんのことだね。彼女、なんか僕のことを敵視しているような気がしてさ」

俺は他愛もない嘘をつこうとも、正直に思ったことを話そうともせず、話を別の方向へ向かわせることにする。

しかし、思わず出てきたこのことも、俺からすれば結構重要だったりもするのだが、

「へ…………？」

彼女は一瞬、ポカンと間の抜けた顔をして俺を見ていた。

「いや、だから…………彼女のことだよ」

「…………なんだ、そのことが
ようやく俺の言っていることを理解したのか、輝夜はため息に笑みを乗せて笑っている。

そんな笑うことなのか？

「なんだ、って…………彼女、結構怖いんだよ？」

輝夜は知らないのかもしれないけど、妹紅さんの睨みつけるようなあの視線は本当に怖かったんだぞ。

「それは怖いかもね〜。あいつはね、わたしを恨んでるのよ……………ずとね」

さっきまで笑みをこぼしていた輝夜の表情にわずかに翳りがさしていた。

「輝夜を、恨む…………？」

「そ。わたしを殺そうとしていたわ。でも、今は気にせずに遊んで

いるけどね」

彼女は本当に、大したことではないように話している。

輝夜を殺す？　なんでまた。

「なんで」

俺は思わず、その先の言葉を飲み込んでしまった。

沈み行く夕日に照らされた彼女の笑顔。

橙陰とういんにより映されたその顔はあまりにも、儂く思えてしまうものだったからだ。

「……………」

そんな彼女に俺は何も言うことができない。

輝夜が何を思っ、妹紅と接し、何を思っ、俺とこうして彼女の家に行ったのか。

何もかもがわからない。

「さ、早く帰ろ？　晩ごはん作らなきゃ」

そう言っ、輝夜はもとの笑顔を見せてくれた。

「…………… そうだね」

それから永遠亭に着くまで、俺は一言も言葉を出すことはなかった。不思議なことに、輝夜もそれ以来にも言わなくなり、ただ俺の隣を歩いている。

俺のことも、輝夜自身のことも、そして妹紅のことも。

話すことは多々あったのだろうけど、輝夜は口を閉ざしてなにも話そうとはしなかった。

(なんであんなことを……………?)

幻想郷で過ごした午後は、俺の心にわずかばかりの後悔と、疑問を生み出すひと時になったようだ。

その夜。

俺は怒りと、後悔と、ほんのわずかだが、男としての好奇心を胸に床についていた。

髪からは香りのよい花の匂いがし、俺はそれを嗅知かきしりするたびに声

を出さずに悶えている。

意識しないように努めれば努めるほど、その匂いがよりはつきりと俺の鼻腔をくすぐった。

それはほんの一、二時間前の出来事だ

「はるきー、いるー？」

夕食後、部屋で休む俺のもとに悪魔の使者ともいえる、てみちやんが襖を全開にしてやってきたのだ。

「……どうしたの？」

今朝のこともあり、当然俺は警戒していたが彼女はそれを不思議そうな顔で見ている。

「おふろのこと、言うの忘れてたからさ。言いに来たんだよ」

「ああ、そういえば……」

すっかり忘れていた。まあ、無理もないか。

昨日はあんなことがあったわけだし。今朝も、そんなことを考えている余裕なんかなかったからな……。

「それで、みんなは？」

「みんなはもう入ったから、はるきを呼びにきたんだよ」

「そっか。それじゃ、案内してくれる？」

俺は疲れのせいか、てみちちゃんの言うことに何の疑いも持たずに着替えを手に部屋を出た。

……今考えれば、あれほど怪しいものはなかったというのに。

しかし、脱衣所には彼女の言ったことが正しいといわんばかりに何もなかった。

というか、ここに誰かの服があれば俺はすぐに部屋へ戻ったのだが。

「それじゃ、俺はお風呂に入るから……」

「うん。わたしは部屋に帰るからねー」

彼女が見せたこの聞き分けのよさも、怪しむべきだった。

しかし、俺は身体に溜まっていた疲労のこともあり、さして疑う

こともなく服を脱いでいく。

男ということだけはあって、服を脱ぎ終わるのにそう時間はかからない。

俺はタオルを腰に巻き、脱衣所の扉を開けた。

「……………」
声にならない声の一つ。

「……………」
ため息に近い声の一つ。

「あ……………」
驚きを含んだ声の一つ。

「な……………」
そして俺の声。

なんで？　なんで？　なんで？

なんで、まだいるんだよっ！？

その理由が彼女の^{てめちゃん}仕業と気づく前にため息に近い声の主、永琳さんの声が飛んだ。

「いつまでそうしているつもりかしら？」

「あ、いや、その」

思わず、俺は声のする方へ視線を向ける。

湯けむりが漂うなか、ここが露天風呂で、先客が永琳さん、輝夜、レイセンさんであることはすぐにわかった。

そして、彼女たちの誰一人としてバスタオルを持っていないということも。

彼女たちは湯船につかって、みな一様に腕組みをしていた。

ただ、それがただの腕組みではなく、体の一部を隠すために仕方なくしていることは言うまでもない。

「す、すみませんでしたっ！！」

俺は急いで脱衣所へ戻った。

というようなことがあったわけだ。

結局、すべてがてみちゃんの悪戯だとわかるまでそう時間はかからなかったわけだが。

彼女は俺に悪戯を仕掛けるだけではなく、風呂場にいた三人の服を隠すという悪戯も同時にやってのけていた。

そのこともあり、俺のことは故意ではなく事故であるとわかってもらえたのだが。

しかし、事情はどうであれ。俺が三人の裸を一瞬でも見たことには変わりはなく、俺は三人のお説教という、お仕置きを受けてきたばかりだ。

しかし……。

あの一瞬ではあるが、

(実は三人ともスタイルいいんだな……)

俺は声に出せばそれこそ晒し者にされてしまいそうなことを思っていた。

てみちゃんは見た目どおりだろうから、言うまでもないけど。

特に永琳さん。出るところ(とは言っても下半身は俺の妄想ではないが)はしっかりと出ているって感じの体型だったし。

年は聞かなかったけど、きっと二十代くらいなんだろうな。

レイセンさんも永琳さんに劣らない、見るものを惹きつけるような体つきをしていた。

二人に対して、輝夜は体型こそ女性としての未熟さを残してたが、それでも彼女たちとは違う、別の美しさを内包しているようだったな。

「もう少し見てればよかったか」

不意に、俺の口から危なっかしい言葉が漏れ、慌てて口を手で押さえる。

こんなことがもし、本人に聞かれたらと思うと、俺は背筋が凍りついたような気がした。

なぜなら、今回の騒動の犯人であるてみちゃんが

「ごめんなさい、もうしませ〜ん」

「

いまだ永琳さんによる、お仕置きという名の吊り下げ放置を決定されたままだったからだ。

「……………」
寝返りをうち、視線を天井に向ける。

俺は襖越しにその声を聞きながら複雑な思いだった。

てみちゃんのやらかした悪戯に対する当然の怒りと、そのときにもっと彼女たちを見ておけばよかったなという、至極不謹慎なものだ。

（そうだな、もし見るとすれば　　）

…………… やっぱりレイセンさんか。

永琳さんや、輝夜も美人ではあるけど、やっぱり彼女だろうな。

俺とそんな年も離れてなさそうだし、どこかそういう精神的嗜好が俺にもあるのかもしれない。

てみちゃんの仕業といつても、まさかこんなことが起こるなんてな。

（なんか、彼女たちに悪いことをしちゃったな……………）

俺は（無実ではあるが）心中で謝辞を述べると、もう一度寝返りをうつた。

八話「湯けむりの向こうには」(後書き)

初めての方、初めまして。そうでない方一週間ぶりです。氷雪うさぎです・x・

第8話です。

今回は少しアハーンやウフーンなお話でしたね。ん、R-15くらいの設定はしておくべきだろうか(苦笑)

よければご意見くださると幸いです； R-18はつけやすいんですけどね；

毎週末に一話ずつupしていこうと思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

SSは基本upしないと思いますので、よければ下記のサイトで閲覧になってください。

Website: <http://hyousetuusaagi.yukiagesho.com/>

九話「生きるということ、死ぬということ」(前書き)

知る人ぞ知る、東方 project の二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

九話「生きるという」と、死ぬという」と

朝。襖の間から漏れ出す日の光で、俺はようやく目を覚ました。

結局、あれから話すことも恥ずかしいような妄想をしては、それをかき消すように寝返りをうつような、そんなことを繰り返して、俺の意識が眠りの中に溶けたのは太陽が顔を出した頃かもしれない。

そして今、日の位置はまだ低いところにある。ということは、俺はほとんど寝てないようだ。

「眠れなかったな……」

俺はカバみたいにでかでかと口を開けて欠伸をすると、まだ眠いといっている身体を起こしてさつさと着替えることにした。

その途中、俺は昨夜の露天風呂が頭に浮かんだ。

「そつえば……」

あれって温泉、なんだよな。

入ったといつても、昨日はあんなことがあったせいかわ湯加減や湯の肌触りやら、そついったものをしっかりと堪能することもできなかったわけだし。

どうするかな……、朝なら誰もいない だろう。

少なくとも、てめちゃんも寝てるだろうし、誰かが入ってれば、脱いだ服があるだろうし。

……。

「せつかくだし、眠気覚ましに入るか」

俺は着替えを手に、うる覚えの記憶を頼りに浴室へ向かった。

幸い、この永遠亭の広さにもようやく慣れてきたのか、俺は迷うことなく脱衣所まで行くことができたみたいだ。これはてめちゃんもせい、いやおかげと言っべきなのかもしれない。

「えつと……よし、誰もいないみたいだな」

脱衣所に誰もいないこと、そして着替えや脱いだ服がないことを確認して俺は昨夜と同じタオルだけの姿で浴室に入った。

やはり浴室は無人で、湯けむりから香る温泉の匂いと朝の匂いが混ざり、朝でしか味わうことのできない、独特の爽やかな気分がさせてくれる。

「ふう……」

俺はかけ湯を済ませると、湯船につかって体をいつも以上に伸ばす。

もしかしたら、幻想郷にきてから今が一番リラックスできているのかもしれないな。

極楽極楽なんて、使い古された言葉を思わず口にしそうになり、俺は自分に対して失笑していた。まだそんな年でもないのにな。

「ここにいると、本当に実感しないよな……」

俺が幻想郷にやってきたこと。
それはもしかすると俺が望んでいた、ほんの一夜の、うたかた泡沫の夢なのかもしれない。

こんな俺でもあたたかく迎えてくれるこの世界を、そうも思った。
だが、これは紛れもない現実。元いた世界そう、俺は確かに現実から離れて、夢のような世界この世界にやってきたんだ。

ここには俺を蔑むやつも、煩わしい時事も、もちろん親だっていない。

俺は解放されたんだ。鎖のように俺を縛り付けていた、あの世界から。

「……………」

体を湯船に預け、視線を大空へと向ける。

そこに広がるのは、どこまでも続く青天。

こんなに綺麗な空を見たのは久しぶりかもしれない。

単に、見ている俺の心境が違うだけなのかもしれないが。

それでも、空は無限に、何もかもを受け入れるように広大に続い

ている。

「みんな、どうしてるかな……」

目を閉じて、向こうにいる数少ない友人たちのことを思い返す。彼らは心からそう思えるような友達だった。彼らは俺の後ろにいる親やそういうものを見るのではなく“御巫晴輝”という、個人の俺をちゃんと見てくれたと思う。

ほんと、あいつら今なにやってるかな。俺のことを心配して探してるのかな……？

そう思うと無性に帰りたくもなったが、数巡の思考を経るとそれはあっさりとなくなった。

摩訶不思議な世界、幻想郷。

とんでもなく強大な、それこそ化け物みたいな力を使って戦っている(?)人もいるが、それさえ除けば、ここは俺にとって一種の桃源郷でもあった。

打算的な考えを持たない人々。

こんな俺でも、ありのままに受け入れてくれる。

「あ、晴輝？」

俺にとってはそれだけでも十分ここにいたいと思う理由に。

おい、ちよつと待て。今の声……。

「ま、まさか……？」

俺は視線を脱衣所のほうへ向ける。

そこにいたのは輝夜だった。それも、身にまとうものがまったくない、つまり素っ裸の状態で。

「か、輝夜!？」

慌てて彼女に背を向ける。それこそ、音の速さどころか、光の速さをも超えるような速さで。

「……どうしたの？」

どこか間の抜けた彼女の声が聞こえる。なんであんなそんな普通にしてるんだよ。

「いや、その……」

一応（なんて言ったら怒るかもしれないけど）彼女はお姫様らしいし。こんなことを言うのもどうかと思うが、

「俺は男だし、その……」

「ふん、まあいいじゃない」

俺の言わんとしていることをようやく理解した彼女だが、気にする様子はまったくなく、湯船に体を入れた。

「そ、そう……」

俺は依然として彼女に背を向けている。

当然といえば当然だが。男として、これだけは守らねば。

彼女は何度も俺の前に来ようとしたが、もちろん俺はそんなことを許しはしない。

仮に許したとして、そんなところをあの手で悪戯うさぎにでも見られたら、彼女が昨日受けたお仕置き程度ではすまないだろう。

「もー、なんで背中向けるのよ」

「いや、やつぱりまずいでしょ」

俺のもっともらしい意見も、

「別にいいでしょ」

あっさりは無視されてしまう。

結局俺の方が折れ、彼女と向かい合うように入ることになった。

しかし、こうして向かい合うと……。

（まずい。余計に意識してしまう）

普段おろしている長い黒髪はまとめられ、簪かんざしを後挿かきこにしている。

湯船から出ている肩、起伏の少ない胸元。つい、そこに目が行きそうになってしまうが、彼女の視線と何とか残っている理性でそれを無理矢理留めているあたりだ。

「そういえば」

そんな卑猥な考えをしているとは知らずに輝夜から話を切り出してきた。

「な、なにっ？」

俺にとってはとてつもない不意打ちでギョツとしたが、すぐさま

平静を装う。

「んとね、晴輝はどうして元の世界が嫌になったの？」

「……………」

俺は答えに窮してしまった。彼女はそのまま言葉を続ける。

「あのね、晴輝のような人が来るのは別に珍しいことじゃないの。ただ、うちに来たのは晴輝が最初だよ」

……………どうということだ？ 俺は彼女の言葉の意味を理解できずにいた。他にもここへ迷い込む人間がいる。そういうことか？

俺はあえてそのことを口にせず、輝夜の次の言葉を待った。

「ここは、“元いた世界から離れたい”、そう思った人たちが迷い込むところなの。だから、晴輝も心のどこかで元の世界が嫌になっ
てたんだと思うの」

まったくその通りだ。俺はあの世界が嫌になって……………。

「……………」

「もちろん、わたしやえーりんたちもね」

輝夜は最後にそれだけ付け足すと、口を閉ざし、空を見上げた。

……………俺だけじゃ、ないんだな。

輝夜たちもなにか言いたくないようなことがあって、ここにいて……………戻りたいとは思わないの？」

「前にも言っただけど、わたしたちは死ぬことがない。それこそ晴輝の何十倍も生きてきたわ。だからね、昔は時々帰りたいつて思ったこともあったよ……………」

俺のそんな質問に輝夜は視線を俺に向け、わずかな間をおいて答え
てくれた。

「輝夜……………」

彼女の伏せた顔が、

わずかに見えるその表情が曇っていく。

生まれてもうじき二十年を迎える俺にはまだ感じたことのない、
思い出にひたっている、そんな顔だった。

「でもね……………」

そして、顔を上げた彼女は、

誰よりも、何よりも美しく、そして凛々しく見えた。

「今はそうじゃないの。無限に時間が続くなら。いいえ、続くからこそ。わたしたちは“今”を精一杯生きようって」

「今を、精一杯……」

生きる。それは命を自ら投げ出そうとした俺の対極にある言葉だった。

「そう。人は、その命に終わりがあからこそ、今を精一杯生きようとするってわたしは思うの。だからわたしも、限りある命の晴輝たちと同じ、ただの人間だったことを忘れないためにも、永遠に続く時間の中にある『今』という瞬間をちゃんと生きるって決めたの」
「……………」

俺は何も言い返せなかった。自分より幼く見える輝夜に。

俺は世界に疎外された事に絶望し、そして世を離れようとした。

言ってしまうば、それはひどく簡単で、そしてもつとも卑怯な手段だった。

「もちろん、退屈だからっていうのもあるんだけどね」

そう言って、輝夜はおどけた笑みを見せてくれる。

今の俺には決してできない、“生きた”笑顔だった。

「だから、晴輝も。元の世界が嫌なら、ここでもいいから。一生懸命、生きてみようよ」

彼女は何もかもを知っている、そんな顔で俺を諭すような笑顔を見せてくれる。

もちろん、彼女はそんな気持ちなんてないのだろうけど。

「俺も……」

俺は、

「みんなみたいに」

この生涯を終えたいと思う前に、心のどこかで“居場所”のようなものを求めていたのかもしれない。だけど、それから目を背け続けていた。

でも

「生きて”、いけるかな？」

「……もちろん。言ったでしょ？ わたしたちはいつでも歓迎する
って」

輝夜は満面の笑みで微笑みかけてくれた。

「そっか……」

俺はもう一度だけ、頑張ってみようと思う。

……この幻想郷で。

九話「生きるということ」 死ぬということ」（後書き）

初めての方、初めまして。そうでない方一週間ぶりです。氷雪うさぎです・x・
第9話です。

まだまだ続きます。どうか飽きずに最後までお楽しみいただければ幸いです・x・

毎週末に一話ずつupしていると思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

SSは基本upしないと思いますので、よければ下記のサイトで閲覧になってください。

Website：<http://hyouseituu.sagi.yukigesho.com/>

十話「変わった世界」(前書き)

知る人ぞ知る、東方 project の二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

十話「変わった世界」

目を開ければ部屋の天井が見え、外に出れば朝日が顔を見せている。

不思議なことに、俺はその景色をはじめて見たような、そんな錯覚に陥っていた。

人間、同じ景色を見ても、その心境によって見え方が違うと言うが、本当にそうなんだなと、今実感していた。

幻想郷へ来てこれで四日目。ここで朝を迎えるのももう三回目だ。「今日から、ここで……」

輝夜の言った、あの言葉を思い出して、俺は廊下で大きく伸びをする。

背中が痛いのは仕方ないといえば仕方がない。

だが、これもまた生きているって実感できる痛みだと考えると、思った以上に不快なものではなかった。

昨日、あれからすぐに永琳さんがやってきてしまい、俺は当然のごとくお仕置きを受けてしまったわけだ。背中痛みはその名残である。

まあ、そりゃそうだよな。

風呂場にはタオル一枚の俺と全裸の輝夜。

そんなところ、誰が見ても似たようなことしか思われないわけで、永琳さんもその例外ではなかったわけだ。

「おはよう。早いよね」

「おはよう、ございます」

廊下の角から姿を現したのは永琳さんとレイセンさんだった。

「おはようございます。でも、今起きたところなんですけどね」

着替えも済み、髪も梳いた後なのか、二人は流れるような長髪（永琳さんはいつもどおり、三つ編みにしているけど）を見せていた。

一方、俺は起きたばかりを示唆する寝癖満載の髪に寝巻き姿という、絵面的にも随分間抜けな格好である。

「どうやら、そうみたいね」

俺はおどけて笑って見せると、二人もあわせて笑ってくれた。

こんな何気ないやりとりも、少し前の自分ならどう捉えていたのだろうか、俺は胸の内苦笑していた。

「今朝はお風呂に入らないのかしら？」

「え？」

永琳さんが悪戯っぽい笑み俺に向けてくる。

隣のレイセンさんも、どこか表情を硬くして俺を見ていた。

まあ、当然といえば当然だよな。故意でないにしろ、ああいうことになったんだし。

しかも、てみちゃんが言いまわしたらしく、俺のこの恥験は永遠亭の面々をはじめ、妹紅たちにも伝わってしまったらしい。

幻想郷中に伝わってないのがせめてもの救いか。

しかしまあ、それを確認する手立てがないから救われているのかどうかも怪しいものだが。

「だからあれはわざとじゃないですって」

彼女たちの言わんとしていることはわかってる。だからこそ、俺は心中の苦笑いを顔に出して答えるしかなかった。

「……………」

しかし、二人は揃って変わらぬ顔で俺を見ている。

こつも無言で見られていると、なんだか責められている気がするな。

「ほ、本当ですって」

「……………あなたがそういうことをするようじゃないってわかっているわよ。ね、ウドンゲ？」

「ええ、まあ……………」

レイセンさんは困惑しているものの、一応は肯定してくれた。

少なくとも、俺をまだ一介の人間として扱ってくれているようだ。

「まあ、死にたくないなら……わかっているわよね？」

「……………」
そう。

俺はあれからみんなにここで精一杯、生きていたいということ伝えただ。もちろん、帰れる手段が見つかるまでの間ではあるが。

みんなが暖かく迎えてくれたことは言うまでもなく、俺は何よりそのことが嬉しかった。

彼女はそのことを俺に再認識させようとしていたのだろう。

「というか、あれだけのことをされたら誰だってやりませんって」

八意永琳。彼女もまた輝夜たちと同じ、デタラメな能力を持っていたのだ。

あのとき、俺の両頬を掠めるように放たれた矢の雨。その射手が永琳さんだと気づく前に矢はすべて射られきっていたのだ。

適当に数えても、矢の数は数十本を軽く超えていたはず。

そんな数を俺の頬ギリギリに、しかもあの一瞬で射つくすのだから人間業じゃあない。

あの一本が当たっていたらと考えると、今でもぞつとしてしまう。

おそらく、もしも同じ状況が起これば、今度は百発百中しているだろうな。

「師匠は怒るととてつもなく恐ろしいですから……………」

その思いはレイセンさんを見ても明らかだった。

彼女の意見に俺も同感だな。さっきの永琳さんの言葉で俺の脳裏に矢の刺さりまくった、それこそ敵を威嚇するヤマアラシのようなことになっている自分の姿が思い浮かんでしまったからだ。

「……………そろそろ朝食ができると思うから、着替えたら広間にいらっしやい」

「は、はい」

眉のわずかに動いた永琳さんの笑みに俺は体を固まらせると、二人は一足先に広間のほうへと廊下を進んでいった。

多分、レイセンさんも俺と同じ気持ちだろう。動きがどこかぎこ

ちなかった。

いつもと変わらずの美味しい朝食も終わり、俺は部屋で今日一日の予定を考えていた。

輝夜と遊ぶのもいいし、永琳さんとレイセンさんのところにいてもいいし、てみちゃんのところ……まあ、何もしないよりましかなどと思索していたが、結局妹紅の家に行くことにした。

まあ、彼女ともこのままっていうのもなんか嫌だしな。

俺はかすかに残る記憶を頼りに、妹紅の家を目指した。

一度行っただけの道だったが、道中の景色を頼りに彼女の家を指して足を進めていく。

「ん？ あれって……」

その途中のことだった。

竹林の中に一人、人影が見える。足を止め、視線を凝らしてその辺りを見てみた。

そこには炎を操り、かつて永遠亭にやってきた藤原妹紅が座り込んでいたのだ。

元々、彼女に会いに行くところだったんだ。ちょうどよかったな。俺は足の向きを彼女の家から竹林の中へと変えて、竹林の中を進んだ。

「おはよう、妹紅」

「なっ　！？」

俺の声に振り向いた妹紅はギョっとした顔で驚いていた。

「ななな、なによ、いきなり」

慌てながらも、俺への物言いは相変わらずだな。

「なにつて、朝だから。挨拶に決まってるじゃないか」

不思議なことに、昨日まで恐ろしいと感じた彼女の態度をそうとは感じなかった。

むしろ、彼女のそんな対応が少し可愛らしい。そう思った奇妙な自分があるほどだ。

「あ……いや……」

妹紅も、そんな俺の対応に隠せないほどの戸惑いを見せていた

「ま、まあいいわ。それで、今日はどうしたの？」

「いや、なんていうか。遊びに来たっていうか……」

「遊びに？ あたしの家に？」

「あ……もしかしてマズかった？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど……」

妹紅は何度も俺の顔を見ては、視線を外して訝しげな顔をしていった。

「もしかして、あの永琳に変なもので飲まされたの？」

「おいおい。そんなこと本人が聞いたらなんて言うか……」。

「何も飲まされてないけど……、さっきからどうしたの？」

「いや、あんたたっていつもウジウジしてたからさ……。なんていうか、まるで別人よ。っていうか、もしかして本当に別人？」

彼女は目を丸くしてまだ俺を見ている。

「そんなに変わったのか、俺……？」

「いや、別人じゃないけど」

驚く彼女に俺は苦笑いを返す程度のことしかできなかった。

「まあ、そっちのほうがいいわ。前のあんた、なんか暗かったしね。見てて腹が立っただから」

「ははは……」

彼女がそう思っていたってことは、みんなもそう思っていたのかな。

だとすると、今はいい方向に変わった……と思ってもいいんだろうか。

「そういえば、こんなところで何してたの？」

視線を妹紅からはずそうと思ったとき、俺の興味は彼女の足元へ注がれた。

「もしかして、それ？」

「そうよ。これをとっていたのよ」

そういつて、彼女は笑顔で俺に収穫物を見せてくれた。

とはいっても、この竹林。採れるものといえばもちろん、タケノコだ。

「なかなか大きいのが採れたのよ。せっかくだし、あんたも食べる？」

「そうだな……せっかくだし、いただくよ」

今思うと、彼女の笑顔を見たのは初めてだった。

竹林から出て、妹紅の後に続いて彼女の家へと向かう。

こうして彼女といると、なぜか輝夜と一緒にいるような、そんな気になるな。

そりゃ、輝夜に復讐しようとしているくらいだから、どこかで接点があるのだろうけど。

それでも、どこか似ているような気がした。

背も彼女ほどしかないし、体つきもさして大差はない。

唯一違つとすれば、妹紅には輝夜彼女のような幼さがなく、といったところだろうか。

妹紅と輝夜。

彼女たちの間にいつたい、何があつたのだろうか。

俺は突如湧き出した、このわずかな疑問を胸の奥に押し込み、彼女のタケノコ料理がどんなものになるかを考えることにした。

十話「変わった世界」（後書き）

初めての方、初めまして。そうでない方一週間ぶりです。氷雪うさぎです・x・
第10話です。

最近忙殺されっぱなしで申し訳ないっす；
まだまだ続きます。どうか飽きずに最後までお楽しみいただければ幸いです・x・

毎週末に一話ずつupしていることと思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

SSは基本upしないと思いますので、よければ下記のサイトで閲覧になってください。

Website：<http://hyousetuusaagi.yukiagesho.com/>

十一話「輝夜と妹紅」(前書き)

知る人ぞ知る、東方 project の二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

十一話「輝夜と妹紅」

竹林で妹紅に出会ってから数分。

俺たちは彼女の家に到着し、妹紅は早速タケノコを台所へと持っていった。

「俺も何か手伝おうか？」

「いいわよ。あんたはそこで待ってなさい」

「それじゃあ、お茶でもいれておくよ」

「ありがとう。そうしてくれると助かるわ」

厨房は男子禁制。なんてことを昔、妹に言われたことがあったかな。

俺は食欲をそそる香りに期待を膨らませながらも、お茶をいれて彼女を待った。

ややあつて彼女がこの部屋へ戻ってきて、囲炉裏を挟んで俺の向かいに腰を下ろす。

「あの、さっきのタケノコは……？」

変わらず食欲をかきたてる香りがするなか、彼女の手にあるのはさつきまで着ていたエプロンだけだった。

「ああ、あれね。今、灰汁あぐをとってるから」

彼女が言うには、タケノコは灰汁が強すぎるため、皮をむいたタケノコと米糠を冷水の中に入れて、一緒に煮た後に自然に冷めるまで置いておかなければならないらしい。

「それじゃあ、後は待つだけってことか」

「そうよ。ああ、ありがとう」

彼女は俺から湯飲みを受け取ると、程よく温いお茶でそののどを潤した。

「そういえば、まだちゃんと自己紹介してなかったな。御巫晴輝、これからもよろしく」

俺は簡潔に自己紹介を終えると、妹紅に手を差し出した。

最初、彼女はその意図がわからなかったようで、

「……………？ なに、この手は？」

と、首をかしげていたが、その意味をわかってくれたときには、

「ああ、そういうことね。こちらこそ、よろしくね」

迷うことなく、俺の手をとってくれた。

ただ、こうしてわだかまりがなくなっただといえども、何度か出会ったときに見せた、あの氷のような冷たい態度の真意を聞くことはさすがに憚られる。

これは俺の勘なんだが、俺の性格だけが原因だとはなかなか思えないんだよな。

しかし、

(こうして彼女と二人だけになると、どうも会話が続かないな……………)
まったく、どうしたものかな。

輝夜と妹紅。

みんなの話を聞くかぎりでは、この二人はここに来る前から何かしらの関係があったみたいだが。もしかしたら、そのことから彼女たちのことを知る、なにかきっかけにもなるかもしれない。

「そういえばさ、妹紅と輝夜って幻想郷に来る前から知り合いなの？」

のんびりとお茶をすすっていた妹紅は、俺の切り出した話にわずかに眉が動く。

「知り合いといえは知り合いよ」

しかし、返ってきた答えは随分とそっけないものだった。

「そう、なんだ……………」

妹紅はそれ以上何も言おうとせず、俺もそれ以上のことを聞くこともできない。

どうやら、あまり触れていい話題ではなかったようだな。

そして、また静寂が俺たちの間にはやってきてしまった。

俺たちが黙ってからどれくらいの間が経つただろうか。

妹紅の奥にある台所から香ってくるタケノコの匂いもだいぶ薄まっていた。

「……………」

「……………」

俺は話しかける機会を逸してしまったせいか、どうにも話しかけられずにいた。その視線も、さつきから湯飲みと妹紅の間を行ったり来たりしている。

それに対して、彼女は何事もなかったかのように、お茶をすすつては開けられた襖を額縁にした庭の景色を眺めてはため息をついていた。

動きたくても動けない、凍ってしまった時。

「おーい、妹紅？ 入るぞ？」

そのときだった。静かな、通りのよい声が囲炉裏のあるこの間に聞こえたのは。

この止まってしまった時を溶かしてくれる救世主ともいえる人がやってきた証拠だった。

しかし、彼女は玄関のほうに目を向けるだけで、慧音さんを出迎える気配はない。

「あの、行かなくていいの？」

「え？ ああ、うん」

なにか考え事でもしていたのだろうか。普段の歯切れよさが感じられない。

「妹紅？ いないのか？」

そうしている間に、慧音さんが俺たちのいるに居間にやってきた。つて、なんだ。いるじゃないか

「お、おはよう慧音」

「おはよう。なにかあったのか？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど……………」

「おはようございます、慧音さん」

妹紅に続いて俺も朝の言葉を慧音さんに送る。

「ん……？ 御巫、か。おはよう」

彼女も妹紅と同じで、わずかな戸惑いをその顔に表してから、もとの涼しげな笑みを見せてくれた。

……やっぱり、なにか変わったのかな？

とは言っても、自分からそんなことを聞くのも変な気がして、そのことについては考えないことにした。

「毎朝ここに来てるんですか？」

「いや、今日はたまたまさ。そういえば、あのお姫様と一緒にじゃないのか？」

「ええ。今日は一人ですよ」

「ここまでの道を一回で覚えたのか。人間にしてはなかなかできるじゃないか」

と、慧音さんは感心していたが、実際はそうではない。

「実は、永遠亭を出てすぐに妹紅に会いましたから」

「なんだ、そうだったのか」

「あたしがいなかったら、今頃迷ってたかもしれないわね」

慧音さんも、妹紅もわずかに笑みをこぼし、俺もそれに続いて笑った。

「そういえば、この香りは……？」

「ああ、タケノコよ。今朝採れたやつ。そろそろ出来上がる頃かしら」

妹紅は軽くたたんでおいたエプロンを手に、再び台所のほうへと姿を消し、そして彼女が戻ってきたときには、見ているだけで唾液が出てきそうなタケノコ料理たちと一緒にだった。

出された料理は、どれもその見た目に反しない味で、俺たちの箸は話以上に進んだ。

それでも妹紅の作ったタケノコ料理は多くて、少し早めではあるが俺たちの昼食になってくれた。

「おいしかったですね」

「ああ。やはり妹紅の料理は絶品だな」

「おそまつさま。でも、輝夜も料理くらいできるでしょ?」

囲炉裏を挟んで座る俺と慧音さんが彼女の料理に満足の声を上げていると、片づけを終えた話の張本人が台所から戻ってくる。

妹紅は慧音さんの隣に腰を下ろし、使ったエプロンを今度はきれいにたたんでいた。

「まあ、そうだけど。でも、妹紅の料理もおいしかったよ」

「そ、そう……。それはよかったわ」

彼女はわずかに頬を紅くし、囲炉裏を見つめている。

それは輝夜の前では決して見ることでできない、彼女の意外な一面だった。

「ところで御巫」

そんな妹紅を微笑んで見ていた慧音さんが、俺に視線を移す。

「今日はどうしたんだ? わざわざ一人で来るなんて何かあったのか?」

「あ、いえ。これと言って特には。しいて言うところ……。仲直り。ですかね」

「「仲直り?」」

その言葉に慧音さんだけではなく、妹紅も首をかしげていた。

「ほら。俺って、なんか妹紅に避けられてたみたいだったからさ。

これからお世話にもなるだろうし、なんとかかしたいって思って」

「な、なによ。それはあんたがいけないんですよ」

「でも、いくらなんでもあれは酷くなかったか?」

俺の言わんとしていることをようやく理解した妹紅は慌てて自己弁護に回る。

言われることが凶星ということもあって、俺はそれほど強く言えないでいた。

「ふふ……。どうやら、永琳から聞いたとおりだな」

「え?」

「先日、お前が永遠亭の連中に言った言葉の話さ」

「まったく。聞いてるこつちまで恥ずかしかつたわよ。まさか、輝夜のお風呂を覗きに入つたうえに、あんなことを言うなんて……」

「……………」

二人の視線がなぜか痛い。つて、ちよつと待てっ！！

「俺は覗いてませんっ！ あれは彼女が後から入つてき」

弁解する俺を二人はニヤニヤと、声にならない笑みを見せている。

……やられた。見事にからかわれたな。

「まったく……………」

二人の悪戯に、俺はそつぽを向くことで反抗の意思を表した。

長かつた妹紅の家での時間も、沈みつつある夕日にあわせて終わろうとしていた。

「それじゃ、俺はこれで」

「ん？ そうか。それじゃあ、帰りは私が送ろう」

「慧音？ でも……………」

「大丈夫、すぐに戻ってくるから心配するな」

なにか、俺の知らないものを心配している妹紅に、慧音さんは変わらぬ笑顔で彼女に微笑みかけている。

「それじゃあ、行こうか」

「あ、はい」

どこか、不安を抱えた妹紅に見送られ、俺と慧音さんは竹林の中に入つていった。

彼女の家を出て、俺たちは言葉を交わすことなく永遠亭に向かう。さつきから一言も言葉を発しない慧音さんに、俺は話を切り出せずにいた。

「……………どうした御巫？」

そんな俺の雰囲気を感じてくれたのか、彼女の視線がわずかに俺へ向けられる。

「その……………」

しかし、俺の口からは言葉が出なかった。

妹紅と輝夜の関係。慧音さんにこのことを聞くべきかどうか、俺は悩んでいた。

もちろん、本人から聞けばいいのだろうが……。輝夜も、そして妹紅も。二人に聞いても、多くは語ってくれなかった。

二人の間にいったい何があつて、今のように戦うような関係になったのか、気にならないといえば嘘になる。

だが、それを彼女から聞いて、果たしていいのだろうか。

「……妹紅のことか？」

「……………」

慧音さんの問いに俺は黙り込んでしまい、認めてしまった。

こうなつてはもうなるようになってしまえ。

「実は……………」

結局、俺は二人のことを聞くことにした。

「……なるほど。妹紅はまだ話してなかったか？」

「彼女に聞いても、何も答えてくれなかったんで」

「輝夜には聞かなかつたのか？」

「彼女はただ、『殺しあう仲』とだけ……………」

「……………これは昔のことだが……………」

慧音さんは少しの沈黙を置いて、静かな口調で語りだしてくれた。

「妹紅のいた、こことは違う世界での話だ」

そして彼女は俺の知っている『かぐや姫』の話続ける。

だが、俺が今聞いているこの話は月の姫であるかぐや姫こと、輝夜が月へ帰ってからも続いていた。

「妹紅は、皆の前で恥をかかされた父のことで輝夜を目の敵にしていた。そして、輝夜が残した不老不死の薬、“蓬萊の薬”を……………」

そこで慧音さんは言葉を終えた。

「これが、私が知っている二人の話だ」

「そんなことが……。でも、それで殺しあうのって……………」

「まあ、二人とも死なないんだから、あり得ないことだな。な、別

に私たちが心配することでもないだろ？」

「確かにそうですね……。って、妹紅も死なない!？」

突然の暴露に俺はぎょっとしていたが、彼女は変わらず、言葉を続けていく。

「ああ、そうだが。だから、あの二人はああやって殺しあうような弾幕の中でこそ“生”を感じるそうだ」

横目にかがった彼女の顔はどこか遠くを見つめていて、寂しげな笑みだった。

「……………」

俺はそんな彼女にかける言葉が見当たらず、口を閉ざすしかなかった。

「まあ、今はそれだけでもないと思うが……………」

「え?」

一歩前を進んでいた彼女が、振り返って俺の顔を見る。彼女の見せた笑みは温かさこそないが、それでも心の落ち着くようななにかがあった。

「それって、どういう」

「さ、着いたぞ。それじゃ、私はここで」

彼女は俺の質問に答えることはなく、竹林の中にその姿を消してしまった。

「ふう……………」

一日の疲れを落とし、俺は敷いた布団の上に寝転がって天井を見つめていた。

湯上りのためだろう。体はわずかに火照っていたが、開けられた障子から吹き込む風がほどよく冷ましてくれていた。

「まさか二人とも不死身だったなんて……………」

輝夜が不死身……………というか、不老不死というのは聞いていたが。

まさか妹紅までそうだったなんて。まあ、二人が知り合いでお互いに年を取ってないんだから、言われるまで気づかなかったのが不思議

議なくらいだ。

ただ、俺の心は別のところに向いていた。

「父、か……」

妹紅が輝夜と敵対する原因でもある、彼女の父親。名前こそ聞いてないが、『かぐや姫』の話から考えるとどこかの貴族というは容易に考えつく。

「……やめた。余計なことを考えるのはやめておこう」

俺は明かりを落とすと、瞳を閉じた。

十一話「輝夜と妹紅」（後書き）

初めての方、初めまして。そうでない方一週間ぶりです。氷雪うさぎです・x・

第11話です。

いつの間にか評価までいただいております・x・いやぁ、本当に嬉しいっす。

毎週末に一話ずつupしていると思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

SSは基本upしないと思いますので、よければ下記のサイトでご覧になってください。

Website：<http://hyousetuusagi.yukigesho.com/>

最近は諸事のため更新ができてませんが、また片付きましたら色々書いていきたいと思えます・、

十二話「保ちたい関係」(前書き)

知る人ぞ知る、東方 project の二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

十二話「保ちたい関係」

「なんでこんなことに……」

俺は晴天の空の下、永遠亭の浴場のど真ん中に立っていた。

右手にはデッキブラシ。左手にはバケツ。そして首にタオルがかかっている。

どこからどう見ても、風呂掃除をする格好だ。

だが……。

「この広さを俺一人って……」

ここには俺以外誰もいない。

「あの悪戯うさぎのせいとはいえ……。はあ……」

俺はさつきまでの理不尽事態と、これから自分のする途方もない作業のため息をつくとき、眼前に広がる露天風呂を見た。

すべては少し前に起きたことが始まりだ。

それは朝食後に起こった。

「ちよつと、それはまずいって……」

俺の制止を聞かずに、てみちゃんは壁と襖の間に何かを仕込んでいる。

学校とかでも見たことがある、アレだろう。

「もし、永琳さんがこれにかかったら」

「こんなものに引つかかるドジは鈴仙くらいだよ」

彼女が襖から離れると、その仕掛けが明らかにになった。

わずかに開けられた襖。そのまま目を上にやると、壁との隙間に白い粉の入っている小さな袋が挟まれている。それが何かは俺もわからないが、かぶれば間違いなく真っ白になることだけはわかる。

「いや、でも」

「いいから。はるきは何も見てないって言えば」

ばふ。

俺と彼女との話し声のなかに聞こえた音。それは紛れもなくあの袋が落ちた音だった。

「あ……………」

……………おい。俺は知らないからな。

「やった」

襖に背を見せている彼女は満面の笑みを俺に見せている。

対して俺は、目の前の事態、いや惨状ともいつていい。それに対するの恐怖という感情を顔に表した。

「はるき？　なんでそんな怖い顔してるの？　あんな単純な仕掛け

に引つかかるドジは鈴仙くら……………」

畏にかかった者を馬鹿にしているような、あくどい笑みを浮かべながら、てみちゃんは視線を襖へと変える。

だが、振り返った彼女も俺同様にその顔を青ざめることになった。

「……………」

そこにいたのはレイセンさんじゃなかった。

月の民の頭脳とも言われていた永琳さん。彼女が全身粉まみれにして立っていたのだ。

「あ、あの……………」

「……………」

何をどう弁解すればいいかわからない俺を、彼女はただ笑って見ている。

「ちよつとてみちゃ……………」

しかし、さつきまで彼女のいた隣には誰もいなかった。

畜生……………。あのうさぎ、また逃げたな。

いつの間に……………。という関心よりも、それによって俺が被るだろう事に対するの怒りが先にこみ上げてきた。

「……………これはあなたが？」

俺はただ首を横に振った。

「そう……………」

言い訳をしては、余分な言葉を発してはいけない。俺の本能もいえる何かがそう訴えていた。ここでなにを言っても彼女には無駄であると。

一見、穏やかな笑みを浮かべている永琳さんだが、その視線が痛い。

空気が恐ろしく張り詰めてしまつて息が詰まりそうだ。

まるで、蛇に睨まれた蛙とでも言うべきか。俺は指一本動かすことなく、彼女が言う次の言葉を待った。

「それじゃあこれは誰が？」

「……………ごめんなさい」

彼女の目が言っている。お前じゃないのか、と。

俺はただ、謝るしかできなかった。

あんな顔をしている永琳さんに誰が違うと言えるだろうか。いや、言つても相手にされないのが関の山である。

その後、永琳さんはすぐに浴場へ向かい、俺はその後で無実の罪（仕掛けをはずさなかったことは悪いけど）による風呂掃除の刑に処せられたわけだ。

「ま、言われたからにはやるか……………」

経緯は別として、俺は風呂掃除という“仕事”をすることが嬉しかった。

今まで俺は永遠亭にやってきた“客人”という扱いで、ただ日々を送っていたからだ。

「……………」

彼女たちはきつと、俺がどうしてこの世界にやってきたのを知っていたのだろうか。

それが過去の経験からなのか、単なる想像なのかはわからないが。だから、彼女たち（一名、違うものもいたが）が俺に優しくかったという、そんなマイナス思考に陥る自分が時折情けなく思った。

「初めて、彼女たちから“言われた”仕事だからな」

デッキブラシを手に取り、床の掃除から始める。

床を擦る音があたりを包んでいき、掃除の始まりを告げた。

「ずいぶん楽しそうだね」

ひよいと、風呂場の塀から顔を出したのは、あの場から逃げ出した悪戯うさぎ、因幡てゐだ。

「誰かさんのせいで風呂掃除をさせられることになったからね」

「そのわりには嬉しそうだけど？」

皮肉をこめて笑顔で言い返すも、彼女には敵わなかった。

てゐちゃんのニヤけた笑みは俺の考えてることなんてお見通し、ということなんだろうな。

「ま、わたしもそれが狙いで　ふえ？」

突如、得意げに自分の仕掛けた悪戯を褒めようとしていた彼女の姿が塀の下に引っ込んだ。

「ふふ……」

「げ、永琳さま……」

「てゐ？ 私の言いたいこと、わかるわよね？」

「……………」

「て、ゐ？」

姿こそ見えないが、彼女たちの声だけはこの無音の風呂場には聞こえた。

それからわずかな沈黙を置いてから、

「い……………やああああ……………」

てゐちゃんの叫び声がこだまする。

「……………掃除しよ」

俺は落としそうになっていたデッキブラシを持ち直し、掃除を再開した。

「ふう……………こんなものでいいか」

てゐちゃんの悲愴な叫び声から二時間。腹の具合からして、だいたいお昼時くらいに掃除が終わり、俺は綺麗になった風呂場を一望

していた。自分のこなした仕事の達成感を体の汗臭さや疲労感とも感じてみる。こういうのも、悪くはないもんだな。

「しっかし、本当に広いな……」

屋敷の大きさといい、風呂場の大きさといい。元々は多くの人がここに住んでいたのだろう。

「次はお湯を張らないとな」

俺は掃除用具を片付けると、空っぽの浴槽に源泉を入れるべく、岩の後ろにあるバルブを回した。バルブを開けてやると、湯けむりを立ちのぼらせながら温泉が流れ込み、空っぽだった浴槽を一日の疲れをとってくれる魔法の水で満たしていく。

「さて、これでいいかな」

湯が浴槽いっぱいになったのを確認してから開け放したバルブの具合を調節する。

永琳さんが言うには、ここのお風呂は浴槽のお湯を抜きながら源泉から引いた温泉を入れるという形でお湯を循環させているらしい。そのため、バルブを締め切ってしまうと朝には浴槽が空っぽになっていることもあるそうだ。

「……よし、これくらいか」

永琳さんに言われたとおりの具合にバルブを開けておき、腕で額の汗を拭う。

彼女には気をつけるよう言われたこの作業だったが、バルブのあった岩にちゃんと注意書きもあったため、これといった問題もなく無事に終わることができた。

「汗だくだな……。うわっ、汗くさっ」

体に張り付いた服を脱ぎ、この前の一件もあるわけだし、脱衣所に誰もいないことを確認する。脱衣所の入り口には俺が作った掃除中の札がかけてあるし、前回みたいに輝夜が入ってくることもないだろう。

「よし……誰もいないな」

手早く服を脱ぐと、俺は浴場に戻った。

頭から湯をかぶって適度に汗を流してから湯船につかり、一番風呂を堪能する。

「はあ……極楽、極楽」

そのまま浴槽にもたれかかり、両腕をいっぱいに広げて伸びをしていると、無意識のうちにお決まりの言葉を呟いていた。

浴槽いっぱいにはられた温泉から立ちのぼる湯けむり。入るものの気持ち心地よいものにさせる香りに、朝から掃除に従事していた俺の疲労感。

これだけの材料が揃っていて、このセリフが出てこないはずがない。

「やっぱり汗をかいた後のお風呂はいいな……」

極楽とは言ったものの、この気持ちよさは本当に極楽にでもいるような気分だ。

どれほどの時間をこうして過ごしていたかわからないほど、俺は湯船につかっていた。

「さて。そろそろ戻らないとな……」

本当はまだまだ入っていたいが、この永遠亭には朝風呂使う人が俺以外に一人だけいる。

彼女のことだから、俺が戻るのを待てずにここへ来てしまつかもしれない。

そうなるか……。

「これ以上、永琳さんやレイセンさんに誤解されるようなことをしたら……」

それを考えるけどぞつとしてしまう。

「……あがるう」

俺は後ろ髪をひかれるような思いで湯船からあがると、脱衣所へ足を向けた。

しかし、

「誤解、か……」

輝夜は長い時を、それこそ俺とは比べ物にならないほどの時間を

生き続けている。

だが、その容姿は俺より幼く、見ていて愛らしいと思えるような時だっただけであった。

さらに、時折見せるあの大人びた、なまめ艶かしい言動にドキっとすることだっただけである。

「やっぱり、どこか意識してるのか……?」

俺が、輝夜を? まさかな……。

ふと思いついた疑問を振り払うように首を振ると、俺は脱衣所の扉を開けた。

「「あ……」」

俺と同じタイミングで脱衣所へ入ってきた少女。

白くて、てみちゃんより長いうさみみの持ち主、レイセンさんだった。

「「う、ごめんっ」」

当然のことだったが、俺は後ろを向き、とにかく謝る。というか、誤らせてくれ。

「えと、その……」

しかし、彼女は答えに困ってしまったようで、言葉に詰まっていた。

「あの、とりあえず着替えたほうが……」

「あ、ああ。そうだね」

彼女に促され、俺は後ろを向いたまま着替えに手を伸ばそうとする。だが、彼女が脱衣所から出る気配はまるでない。

「えと、君がそこにいると……」

「え? あっ、ごめんなさい」

扉の閉まるのを音で確認してから、俺は着替えを手にとった。しかし、男がいないからって、ここの人はちょっと……なあ。

着替えも終え、俺が廊下に出るとレイセンさんは深々とおじぎをしてくれた。

「あの、さっきはごめんなさい」

いや、そこまでされるとかえってこっちが恥ずかしいんだけど。

「俺のほうこそごめん。レイセンさんもお風呂に？」

「いえ。もうじきお昼だったので師匠に呼びに行くと言われたので」

「そうなんだ。ありがとう」

「いえいえ。そろそろできていますし、行きましようか」

「ああ、着替えを置いていくから先に行っててくださいよ」

レイセンさんと別れ、俺はそのまま自室へと足を進めた。

彼女は永琳さんのことを師匠と呼んでいる。

その理由や経緯は聞かなかったが、永琳さんは天才とも言われるほどの人で、薬からそれこそ変形合体する巨大ロボ（はいくらなんでも無理だと思うけど）まで、なんでも作れるらしい。

しかし、その過程においてレイセンさんやてみちゃんが実験台にされることもしばしばあるとか、ないとか。

（絶対に、永琳さん^{あの人}だけは敵に回さないでおこう……）

そう誓うと、俺は着替えを部屋に置き、広間へと足を返す。

（……………）

輝夜のごとは……まあ、いいか。今はまだ、俺はこの日々を楽しみたいし。

永琳さんやてみちゃん。レイセンさんや妹紅や慧音さんと。そしてもちろん、輝夜とも。

だから今、この関係を変えるようなことは考えないでおこう。

（……………これからも、そのほうがいいよな）

俺は襖を開け、みんなの待つ広間へと入った。

十二話「保ちたい関係」（後書き）

初めての方、初めまして。そうでない方一週間ぶりです。氷雪うさぎです・x・

なんだかんだで第12話です。

評価がどんどん増えているのを見てるとなんだか嬉しいと同時に、新作を書く時間のとれない自分が少し悲しく、申し訳なく思えてしまいます；

残すところ卒論くらいなので、年内にはまたSSをいくつか書きたいなとは思ってます；

毎週末に一話ずつupしていることと思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

SSは基本upしないと思いますので、よければ下記のサイトでご覧になってください。

Website：<http://hyousetuusagi.yukigesho.com/>

最近は諸事のため更新ができてませんが、また片付きましたら色々書いていきたいと思えます；

十三話「いつか来るその日まで」(前書き)

知る人ぞ知る、東方 project の二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

十三話「いつか来るその日まで」

昼食を終え、俺は風呂掃除の疲れからか部屋で眠っていた。眠りこそ深くはないが、それでも何かをしようとは思えない。そのまま身体を畳に預け、静かに眠りの世界へと落ちていく。

……。

あれからどれほど経っただろうか。

「輝君」

誰かが俺の体を揺らしていた。

人がせつかく寝てるのに……。いったい誰だ？

起きるのが嫌だったこともあり、俺はそのまま眠ろうと決め込んだのだが、体が覚醒へとスイッチが入ってしまった、なかなか寝付けない。

「輝君、起きて」

声と体の揺れは依然として続き、寝ることができなかった俺は誰だかわからない相手に対して、結局寝入りをする事になった。しかし、寝たフリをするのも意外に暇なものである。なにせ、ただじっとしているだけなのだから。実際、体を揺らす誰かに対して俺は動けずにいる。

「ちよつと晴輝君？ 起きなさい」

ようやく意識のはっきりしてきた。どうやら、声の主は永琳さんのようだ。

彼女がここまでするなんて何か特別な事でもあるのだろうかけど、体は俺の意思を聞き入れてはくれず、起きようとする素振りさえ見せない。

「起きなさい、晴輝君っ！ 姫様がっ！」

「なんだって！？ 輝夜が！？」

……我ながら不思議なものだ。さつきまで指一本さえ動こうとしなかった俺の体は弾かれたように飛び起き、身体に残っていた疲労感はどこかにいつていた。

そんなことより輝夜だ。いったいどうしたんだ。

「え？ ええ……。そうなの」

さつきまで寝ていた俺がいきなり飛び起きたんだ。そりゃ永琳さんでも驚くだろうな。珍しいことに顔をキョトンとしていた。

しかしそれもわずかなことで、永琳さんはすぐに元の、智者ともいえる涼しげな顔に戻る。

「姫様がお昼に出かけてからまだ帰ってこないのよ」

「……え？」

思わず聞き返してしまった。真面目な顔して何を言うんだこの人は。

「だから、姫様がまだ戻ってこないのよ」

「まだつて……。そんな大げさな。まだ日も沈んでないですけど」
なんか寝る前より疲れたな……。心配してなんか損した気分だ。

「いい？ 家にいないことが珍しいあの姫様が、昼前に出かけてからまだ帰ってこないのよ？ それもお一人で出かけて。これは一大事よ」

いや、ちょっと。それはいくらなんでも過保護だろ。

とは言っても、このまま放っておけば永琳さんはもっと暴走しそ
うだし……。

「わかりましたよ……。輝夜は俺が探してきますから」

「そ、そう？ ありがとう」

普段から静かな永琳さんの表情が安堵のものへと変わる。輝夜のことになると、彼女も結構……。いや、人のことは言えないか。さつき
きのこともあるし。

「それで、輝夜はどこに行くって？」

「それは……」

さつきまでの彼女が一変、急に言葉に詰まってしまふ。

なにか、言えない事情があるのか……。？ それとも、俺だから言

えないのか……？

いずれにせよ、このままでは埒があかないので、質問の内容を変えてみる。

「……とにかく、俺は何をしたらいいですか？」

「そ、そうね……。とりあえず、ここから妹紅の家までの間を探してもらっていいかしら？」

「わかりました。道はなんとかかわかると思いますし、ちょっと行つてきます」

上着を手に取ると、俺は部屋を出る。

永琳さんが答えなかつた輝夜の居場所。きっと、俺が踏み入つてはいけないこと……。なんだろうな。

永遠亭を出て、夕焼け色に染まる竹林の中を走っていく。

最初は永琳さんの言うことに呆れていたけど、今では俺も彼女とそう違わない考えだった。

あの輝夜がこんな時間まで帰つてこないなんて、なにかあったんじゃないか？

うる覚えに近い記憶を頼りに、妹紅の家まで一直線に走っていく。

「輝夜、どこにいるんだよ……」

「わたしがどうかした？」

「!？」

今の声って、まさか……。

足を止め、声のした竹林のほうを見てみる。

「そんなに急いで何してるの？」

「……」

……やっぱり輝夜だった。

「いや、永琳さんに言われて君を探してたんだけど……」

「え、そうなの？ えーりんにはちゃんと出かけるって言ったのに」

「まだ帰つてこない、って心配してたよ」

見たところ、怪我もしてない。彼女の無事を確認すると、思わずため息がもれた。

「まったく。えーりんも人騒がせなのよ」

「だいたい、こんな時間まで何してたの？」

「え？ うん……。ちよっとね」

彼女も永琳さんと同じく、口を閉ざして黙ってしまった。それも、輝夜は今にも泣きそうな顔で。

やっぱり、話してはくれないか……。

「そっ、か」

「うん……」

……………。

俺も、輝夜も黙ってしまい、重苦しい空気が流れていく。

彼女がどこに行つて、何をしていたのか。気にならないといえは嘘になる。いや、むしろ知りたい。話してほしかった。

「みんな心配してるし、帰ろうか」

「……………」

彼女は小さく頷くと、俺の少し前をいつも以上にゆっくりとした調子で歩いていく。

やっぱり、聞いちゃ……まずかったか。

満たされない思いを胸に、俺は彼女の後に続いた。

……………。

……………。

歩き続けて半時ほど。

俺たちは永遠亭まであと少しというところまでやってきていた。

なんだかんだ言つて、俺も結構走つてたんだな。

「……ねえ、はるき」

少し前を歩く輝夜が静かに振り返つて、透き通った黒の瞳で俺を射抜く。

曇りのない、見るものを吸い込んでしまいそうなほど深い黒。

平穏とは別の意味での穏やかさを持つ目に、俺は言葉を飲み込んでしまった。

「やっぱり、どこにいったか知りたい……？」

わずかな間を置いて、彼女は小さな笑みを見せる。

いつもと変わらない輝夜の笑顔。でも、その笑みはどこか悲しい感じがした。

「それは……」

彼女の質問に、俺は即答できなかった。

もちろん聞きたい。もつと輝夜のことを知りたい。でも……。

「……今はいいよ。話したくないんでしょ？ だったら、話してくれるまで俺は待つさ」

彼女の頭に手を置き、泣く子をなだめるような手つきで撫でてやる。

(そうだよな。別に焦らなくてもいいよな……)

時間はまだある。そう、あるんだから。

「……………」

輝夜は何も言わずうつむいていた。俺の手を嫌がることもなく、ただされるままに撫でられている。そういえば、こうしてよく妹の頭も撫でてやったっけ。

「……ありがとう、晴輝」

顔を上げた彼女の顔にはわずかな笑みがあった。

さっきまでの悲しい笑顔ではなく、あたたかな、穏やかな笑顔。

その笑顔に俺は顔が熱くなるのを感じてしまった。

「べ、別にお礼なんかいいよ。ほら、もうじき着くんだし、行こうか」

「……………」

それから、俺たちは他愛もない話を交わしながら永遠亭に向けて歩を進めていく。

俺と輝夜。今日は、その距離がいつもより近かった……ような気がした。

まだ時間はあるんだ。だから、焦ることはない。だから、いつか来るその日まで……。

十三話「いつか来るその日まで」（後書き）

初めての方、初めまして。そうでない方一週間ぶりです。氷雪うさぎです・x・

一日早いですが、今回は第13話。まだまだいくよーっ。

評価がどんどん増えているのを見ているとなんだか嬉しいと同時に、新作を書く時間のとれない自分が少し悲しく、申し訳なく思えてしまいます；

稀にサイトのほうにSSを上げてたりします。あとは絵師sの絵ができましたら二本up予定です・x・

毎週末に一話ずつupしていこうと思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

SSは基本upしないと思いますので、よければ下記のサイトでご覧になってください。

Website：<http://hyouseituu.sagi.yukigesho.com/>

最近は諸事のため更新ができてませんが、また片付きましたら色々書いていきたいと思えます；

十四話「悲しみの涙」(前書き)

知る人ぞ知る、東方 project の二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

十四話「悲しみの涙」

その夜、俺たちの夕食はいつもの広間ではなく、永遠亭の縁側沿いにある庭で食べることになった。

空に浮かぶ二つの月は変わらず、夜空にその姿を見せつつある。常に満月の月と、俺が幻想郷へ来たときには三日月だった月。今日はその月も満月になるという事で、お月見をしようということになったのだ。

「……つしよ。これで全部出しましたよ」

「あら、早かったわね。やっぱり男の人がいると助かるわ」

運ばれたテーブルやら椅子やらを見て、永琳さんは感心の笑みを見せていた。

「というかここじゃ、俺よりみんなのほうが力とかはあると思うんですけど」

「あら、そうでもないわよ？」

「そうですか？」

「そうよ」

そう言っただけで彼女は微笑むが、俺にはそれを素直に喜ぶことができない。

この幻想郷での“弹幕”と呼ばれる、ずいぶんぶつ飛んだ戦いを見てから、俺の考えは少しだけこの世界に沿うものになってきていると、自分でも感じていた。

だからこそ、永琳さんの言うことが俺を傷つかせないための嘘ではないのかと思えてしまう。

女の子より非力であるなんて言われたら……、やっぱり複雑だな。

「まだ時間もあるし。晴輝君、先にお風呂にでも入ってきたら？」

「……それじゃ、お言葉に甘えて」

彼女の笑顔に、どうも釈然としないことがあるが、俺は彼女の厚意に甘えることにした。

「さて……」

着替えを手に、脱衣所へと向か　おうとしたところで、頭によぎった一つの予感。

しかし、今回は大丈夫だろうな……？

（まあ、輝夜とレイセンさんは台所。永琳さんは縁側だし、てみちやんは……昼間からいないらしいし、大丈夫だろう）

安全を確認し、改めて足を進める。

脱衣所には予想通り誰もおらず、浴場も無人だった。

「ふう……」

誰もいないことを確認すると、俺はようやく安堵の息をつけた。

しかし、毎回毎回風呂場に来てため息をつくのもどうかと思うのだが。まあ、この永遠亭にいる悪戯うさぎのことを考えると気をつけすぎても、気をつけないよりかは幾分もマシだろうけど。

「みんな待ってるだろうし、汗だけ流すか」

俺は普段より早めに風呂から上がって、みんなのもとへ行くことにした。

しかし、こうして思うと、

（本当に、慣れたよな……）

こんな世界に迷い込んで、一時はどうなるかと思っただが、案外慣れるものだな。

日もすっかり沈み、大小二つの月が空高くに顔を出す頃。

「それじゃ、はじめましょうか」

永琳さんの声を合図に五人だけではあるが、そんなことを思わせないほど賑やかなお月見は始まった。テーブルには和洋中をはじめ、様々な料理が置かれていている。

取り皿に分けた料理を持って、みんなは縁側に腰掛けて、思い思い

の夕食を楽しんでいた。

「今日はたくさん作ったから、どんどん食べてね？」

「うん、そうす」

輝夜に促され、料理をとろうと視線をテーブルに移すが、そこにある皿のほとんどの料理は既になくなっていった。

「ふう、おなかいっぱい」

そして、縁側には夕食を堪能し終え、次にやってきた三大欲に従って寝転がるてみちゃんの姿があった。

「ちよつと、てあつ！」

「このよはじゃくにくきょうしよくなんだよ、れーせん」

「……………」

二人のやりとりに俺と輝夜は、

「ま、まだあるから大丈夫よ。…………多分」

「う、うん…………」

互いに苦笑いを浮かべて二人を見ていた。

楽しかった月の下での食事も終え、みんなは縁側にでも座って月を眺めているのだろう。

「やっぱり綺麗ね…………」

「そうですね」

「こうして、地上から見る月も綺麗ですね…………」

永琳さんたちの感のこもった声が聞こえる。

そんな彼女たちから少し離れたところで、俺は月を見ながら寝転がっていた。

見上げた空には変わることはない、二つの満月が顔を見せている。

俺のいた世界にも月はあったが、こんなに綺麗な月を見るのは初めてだと思う。

さつきまではしゃいでいたてみちゃんも、今では大人しく月を見ているからだ。

それくらい、この空に浮かぶ月輪は美しかった。

(輝夜もやつぱり月を見ているのかな……?)
いつの間にか俺の視線は輝夜を探して、縁側や庭をせわしなく動いている。

ここまで来ればある種の病かもしれないな。

そんな自分の奇行に笑いながらも、月の姫様の姿を探す。

「あれ？ 輝夜は……？」

しかし、彼女はどこにもいなかった。

「他のところで見てるのか……？」

体を起こし、輝夜を探すべく足を進めていく。

歩き出して数秒。

輝夜は縁側の角を曲がって少し行ったところに座っていた。

彼女は一人。

輝夜は空に浮かぶ望の円に感嘆の言葉を漏らすわけでもなく、月を見ている。

その姿は祈りを捧げ、天を仰いでいるようにも思えた。

「かく」

しかし、俺が声をかけようとしたとき、俺の口が、のどが声を出すのをやめてしまう。

輝夜は変わらず夜空を見上げている。

俺の言葉は彼女の頬に一筋、月に照らされた涙線によって止められていた。

「……………」

月を見て涙する輝夜。

普段の彼女が見せる、幼さやあどけなさが感じられない、大人びた、艶美な“女性”の顔をしていた。

その姿はまるで、昔話に出てくるかぐや姫そのものである。

俺はそんな彼女の姿に見とれ、そして言葉とともに心も奪われてしまったのかもしれない。

だが彼女の姿は、見入ってしまう美しさと同時に、見ているものまで引き込む悲しみを含んでいて、俺の心も今すぐに泣き出してし

まいそんな思いで溢れそうになっている。

「戻るか……」

俺は彼女に声をかけることなく、そのまま来た道を引き返した。

……。

俺が庭に戻ってきたときにはお月見は終わってしまったらしい。

テーブルなどはそのままにしてあるが、みんな部屋へ戻ったようだ。

「輝夜……」

彼女のあんな姿を見たのは初めてだった。

今になっても胸を占める悲しみの思いが晴れない。

「晴輝君」

縁側に腰を下ろす俺の後ろから、もう聞き慣れてしまった声がか
けられる。

「永琳さん……」

「見て……、しまったのね」

それが輝夜のだとすぐにわかった。

永琳さんがこんな悲しそうな顔をするのは大体彼女のことだから
だ。

「ええ……。まあ」

俺がそうだったように、ここにいるみんなも心に何かを抱えてこ
の永遠亭にいる。

当然、輝夜も例外ではない。

「なにか、あつたんですよね……?」

「……………」

永琳さんは否定しない。かといって、何かを話す素振りはない。

彼女から話を切り出すのを待とうとしたが、おそらく答えられ
ないのだろう。

誰にだって話したくないことはある。それは俺もそうだからだ。

「……別に言わなくてもいいですよ。ただ、俺は彼女の力になって
あげたいって思ってただけなんです。彼女から言ってくれるまで待つ

てますよ」

「晴輝君……」

「だから、そんな悲しい顔をしないでくださいよ。これだと、輝夜が逆に心配しちゃいますよ？」

「……そうね。私がいっかりしないといけないわね」

俺は説得力のない笑みしか見せることができなかつたけど、彼女はそれで十分だったらしい。

永琳さんも静かな笑顔で答えてくれた。

「でもね、晴輝君」

しかし、わずかな間を置いて、彼女は緩んだ顔を引き締めると、

「あまり、姫様と親しくならないほうがいいわよ」

俺をまっすぐに見つめて言った。

十四話「悲しみの涙」(後書き)

初めての方、初めまして。そうでない方一週間ぶりです。氷雪うさぎです・x・

一日遅れですが14話です。いったいなぜ上げるのを忘れていたのだろうか；

と言いつつも、どのみち肩を痛めててupどころではなかったのですけどねorz

毎週末に一話ずつupしていこうと思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

SSは基本upしないと思いますので、よければ下記のサイトで閲覧になってください。

Website: <http://hyouseituu.sagi.yukigesho.com/>

最近は諸事のため更新ができてませんが、また片付きましたら色々書いていきたいと思えます；

十五話「一夜明けて」(前書き)

知る人ぞ知る、東方 project の二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

十五話「一夜明けて」

昨夜のお月見が終わったのは日が顔を出す頃だった。

日付が変わったあたりをやってきた妹紅が、輝夜とまた弾幕バトルを上空でおっぱじめだし、てみちゃんやレイセンさん、そして永琳さんまで夜空に浮かぶ弾幕の下でお祭り騒ぎをはじめたのだ。今思えば、慧音さんがいなかったのはなぜだろうか。

「ふわあ……………」

俺が起きたときには日は高い位置にあり、着ていた服が体に張り付いていた。

「……………まずは汗を流さないとな」

こうして始まった一日。朝風呂も上がり、空腹の叫びをあげる腹を押さえながら広間へと向かう。そこには永琳さんをはじめ、永遠亭の面々と妹紅までいた。どうやら、家に帰らずここで寝ていたらしいな。

そして、広間の襖を開けた途端、みんなの視線が俺に注がれていた。

「あ、えと……………おはようございます」

その光景に面食らうも、とりあえず空いていた妹紅の隣に座る。

「みんな揃ってどうしたの？」

「どうしたって……………」

隣の妹紅は言葉に詰まり、

「……………」

てみちゃん、レイセンさん、そして輝夜までもうつむき、俺と目を合わせようとしない。

「もしかして、俺なにかマズいことでもした……………のか？」

そう思うのも無理はない。

実は昨日、てみちゃんに勧められてジューズらしき液体を飲んでからの記憶がまったくくないのだ。そこまでいうほど明るいほうではないが、昨日のあれは酒だと思っただが、あの味といい、色といい、思い当たるものがまったくくない。そして記憶がないあたり、いわゆる飲みすぎの典型だろうな。

人は酔っぱらってしまつと、とんでもないことをするときもあるらしい。もちろん、それは俺も例外ではなかった。

「いや、そういう」

「実はそうなのよ」

うつむいていた顔をわずかに上げたレイセンさんを遮って永琳さんが答える。

俺はもちろん、なぜかレイセンさんやてみちゃん、そして輝夜まで驚いた顔をしていた。

「マズいことつてその……俺、どんなことを？」

「それは……その、ね？」

永琳さんは口元を手で隠し、わずかに目を伏せて俺を見ていた。気のせいかな、頬もわずかに赤らんでいる気がする。

「もしかして、そういうことを……？」

考えたくはないが、一つの予感がよぎった。俺だって男だ。彼女のそんな反応を見れば、想像だつてするさ。

「その、晴輝君も忘れたいことだつてあると私は思うから……」

俺の質問に答える代わりに、彼女は恥じらいの中に大人が持つ、独特の艶を混ぜた視線を俺に向けるだけだった。

「そんな……。ごめんなさいっ！」

俺は自分のしてしまったことを悔いるよりも先に正座し両手をついて頭を下げた。

まさか、そんなことをやらかしてしまうなんて……。

「……」

誰一人として、何も言ってくれない。下げた頭を上げることなく、俺は次の言葉を待つ。

誰も破ろうとしなかった沈黙。

しかし、この沈黙をあつさりと破ったのは毎度毎度、俺に悪戯をしかける彼女だった。

「本当にもうしわけないと思っっているならたいどで示さないといけないね」

「態度つていうと？」

「まずはわたしの足を」

「し、師匠の研究の手伝いをするとかっ」

右足を出して、ニヤリと微笑むてるちゃんの隣でレイセンさんが慌ててそれを遮る。

「研究？」

「師匠は色々な薬を作っているんですよ。ね、師匠」

「え？ ええ」

そして発言者はレイセンさんからまたも永琳さんに移る。なんだか俺という厄介者をたらい回しにしている気がするんだが。

「師匠言つてたじゃないですか。薬の実験だ……ほら、研究の手伝いがほしいって」

……なんか今不気味な言葉が聞こえた気がするんだけど。

とはいっても、この状況では反論できるわけもなく、俺は顔を上げて永琳さんの返事を待つ。

「……そうね。せっかくだし晴輝君に手伝ってもらおうかしら。後で私の研究室に来てくれる？」

「あ、はい」

「それと、ウドンゲ。あなたも後で私の研究室に来なさい。必ず、一人で」

「な、なんでですかっ!？」

「い・い・か・ら……来なさい」

予想外のことだったのか、驚き慌てふためくレイセンさんに永琳さんは満面の笑みで答えると、広間を後にした。気のせいか、最後の言葉はかなり重たい感じがしたが。

「れーせん……」

「……イナバ」

「え……？ なに？ いったいなにが……？」

てみちゃんも輝夜も、彼女に同情し、妹紅は俺同様にわけのわからない様子だった。

そんなに恐ろしいのか、彼女の研究室って……。いったいどんなところだよ。

もしかして、ただ薬を作ってるだけじゃなくて何か妖しげな鉄製ベッドの上で宇宙生物とかを解剖してるとか？ いやいや、動物と動物を融合させて合成獣みたいなものを作ってるとか？ それとも、変形合体する超巨大口ボを作ってるとか？

「あ、あのっ！」

そんな馬鹿げた妄想をしている俺を現実の世界へ引き戻してくれたのはレイセンさんだった。

今にも泣きそうな顔で、俺の両手を自分の手で包み込んで頭を下げている。その姿はまるで天にいる神様にでもお祈りを捧げているようでもあった。

「一緒に師匠の研究室に……研究室につ！」

涙こそ見せないものの、上ずった声で俺に救いを求めるように哀願するレイセンさん。

全体的に整った容姿に、今にも泣きそうな潤んだ瞳で俺を見上げ、頭上のうさみみがゆさゆさと揺れている。

こんなに可愛い少女が頼んでいるんだ。断れるはずがない。

「わ、わかったよ」

「本当ですかっ！？ よかった……」

安堵に表情を緩ませ、ほっと胸を撫で下ろす彼女の姿もまた愛らしいものがあった。

「じゃ、じゃあ……行こうか？」

「は、はいっ……」

しかし、レイセンさんの反応を見ていると……。

（永琳さんの研究室にはなにがあるんだ？）

俺はわずかな好奇心と他人に分けてもまだ余ってしまうほどの恐怖を胸に、レイセンさんとともに永琳さんの研究室に向かった。

十五話「一夜明けて」（後書き）

初めての方、初めまして。そうでない方一週間ぶりです。氷雪うさぎです・x・

肩のほうはもう大丈夫だと思いつつ、15話です。

もうすぐ年末ですね。皆様はいかがお過ごしでしょうか？・x・

毎週末に一話ずつupしていると思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

SSは基本upしないと思いますので、よければ下記のサイトでご覧になってください。

Website：<http://hyousetuusagi.yukigesho.com/>

最近は諸事のため更新ができてませんが、また片付きましたら色々書いていきたいと思えます；

十六話「憂虞(ゆうぐ)の研究手伝い」(前書き)

知る人ぞ知る、東方 project の二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

十六話「憂虞（ゆうぐ）の研究手伝い」

レイセンさんに連れられ、俺たちは永琳さんの研究室の前まで来ていた。

「それじゃ、入るよ？」

隣の彼女は口を真一文字に引き締めてコクリと頷く。

俺もそれにつられてしまったのか、襖に伸ばす手に余分な力が入っている気がした。

……。

……………。

みんなの、レイセンさんに対するリアクションから、悪魔の所業とも言える数々の惨業（みじやうぎやう）を行っているだろう、一種のカオス空間だと思っていた永琳さんの研究所。

俺は今、自分の馬鹿げた考えを大笑いしたかった。

整然と本の入っている本棚、その隣には簡素な文机。そして、畳部屋から完全に浮いてしまっている大きな机。その上に置かれている数々のビーカーやプラスチックたち。

襖を開けた先にあつたのはこれだけだった。

「あら、二人とも早かったわね。ウドンゲがもつと駄々をこねると思っていたんだけど」

「し、師匠っ！」

赤面するレイセンさんを永琳さんはわずかな笑みで応えると俺たちに作業の大まかな説明を始めた。

永琳さんが言うには、俺とレイセンさんは彼女の言われたとおり薬品を入れたり、その薬品の変化を書き留めていけばいいらしい。なんだ……。意外に普通じゃないか。

レイセンさんも俺と同じようなことを思っていたらしく、大した差のない反応をしていた。

こうして始まった永琳さんの研究手伝い。

俺もレイセンさんも、始めに抱いていた恐れはすっかりなくなり、むしろ今度は手伝いを失敗しないようにしなければという、別の意味での恐怖に気を引き締めていた。

「えっと、これをこっちに入れて」

「レイセンさん、それはそっちじゃなくてこっち」

「あれ？ そうでした？」

と、俺がレイセンさんのフォローに回ったり、

「えっと、これがこっちで……」

「御巫君、そのビーカーのチェック、そろそろじゃない？」

「え？ あ、ほんとだ。すっかり忘れてた」

「気をつけないとダメですよ？」

と、彼女が笑ったり。

研究手伝いのなかで何気ないやりとりを交わしながら手伝いを続けていると、永琳さんが一つの試験管を手に俺たちのもとへやってきた。

「そっちはどう？」

「一応、言われていた分は終わってますよ」

「私のほうも終わりました」

「そう。ウドンゲに晴輝君もお疲れ様。これが最後よ」

俺は永琳さんから試験管を受け取ると、その中身を覗いてみた。

試験管の中には蛍光色に近い緑色の、ドロドロとした液体（なのだらうか）が入っている。いわゆるゲルやコロイドと呼ばれるものの類だろう。臭いこそないが、決して気味のいいものではなかった。

「今度はこれの経過を見ればいいんですね？」

「それがね」

試験管をそばにある試験管立てに置く俺に永琳さんは信じられないことを言った。

「それを飲んでほしいのよ」

「なっ　！？」

俺は手にしていた試験管立てを思わず落とすところだった。いや、この場合はむしろ落とすべきだったのかもしれない。

さりげなく落とそうと俺の手は動いたが、

「落としたら大変なことになるから気をつけてね？」

永琳さんの笑みにそれは阻まれてしまう。仕方ない、正直に断ろう。

「すみませんがお断りします」

「一回くらいいいじゃない。こんなにおいしそうなんだから」

おいしそう？ ゲームとかで出てくるスライムみたいな形状をしたこの液体が？

「だったら自分で飲んでくださいよ」

「私は嫌よ」

案の定、永琳さんは満面の笑みで応える。まあ、そうですね。

この人、何気に言ってることが酷くないか？ このマッドサイエンティストめ。

なんてことを言おうとしたが、またも彼女の笑みに止められてしまう。

なんだかズルいよ……。一見、優しい笑みをしているが、実はその裏はとんでもない腹黒だよ、この人。

さっきのやりとりと、あの笑顔がいい証拠だ。顔は笑っているけど、目が全然笑っていない。きっと、科学に魂を売った人間ってのはこんな感じなんだろうな。

「とにかく、俺は絶対にごめんですから」

「……わかったわ」

永琳さんはようやく観念してくれたのか、小さなため息を吐くだけで特別なにもしなかった。

無理矢理にでも飲ますのかと思っていたが、助かったな……。あんなものを飲まされたらただじゃすまないのは明白だからな。

「それじゃウドンゲ、あなたが飲みなさい」

「えっ！？ 私ですか!？」

「だって他にいないじゃない。さ、向こうでデータを取るわよ」

「み、御巫君」

すまない、レイセンさん。俺だつてあれを飲むのは無理だ。

俺は合掌し、これから起こる彼女の不幸に対して、せめて無事であるように祈つた。

「永琳さまー。お茶持つて来ましたよー？」

研究室から出た永琳さんたちと入れ違いに、反対側のドアからお茶の入った三人分の湯飲みをのせたおぼんをウェイトレスのように片手で持った、てみちゃんがやってきた。

「あれ、れーせんたちは？」

「レイセンさんは旅立つたよ……」

「そう……。れーせんは逝つたのか……」

レイセンさん、あなたのことは忘れません、絶対に。

おぼんを机の上に置き、俺の言葉の真意を理解したてみちゃんも俺同様に手を合わせて彼女に祈りを捧げてくれた。

「ああ、そうだった。はい、お茶」

手を合わし終えたてみちゃんがなにかを思い出したように、おぼんにのっているお茶を俺に差し出してきた。

「ああ、ありがとう」

彼女からお茶を受け取ると一口。熱くとも冷たくともない、ぬるいお茶をすすつた。

「それじゃ、あとはここに置いておくね？」

「あ、うん」

「それじゃあね」

彼女は湯飲みを机に置くと、またもウェイトレスの真似事だろう、仰々しくお辞儀をして研究室から出て行った。

「さて、俺は」

俺は飲み干して空になった湯飲みを置き、腰を上げる。

そのときだった。

「うっ　！？」

俺は猛烈な吐き気と悪寒に襲われてしまい、膝を折ってその場に

うづくまる。

「な……」

そのまま、俺の意識の糸はプツリと切れてしまった。

十六話「憂虞(ゆうぐ)の研究手伝い」(後書き)

初めての方、初めまして。そうでない方一週間ぶりです。氷雪うさぎです・x・

一日遅れてしまいました。が16話です。

毎度お馴染み、単車に乗ると体中が痛くなります(苦笑)
今度単車ネタでも書いてみましょうかね? ; あはは…… ;

毎週末に一話ずつupしていこうと思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

SSは基本upしないと思いますので、よければ下記のサイトで閲覧になってください。

Website: <http://hyouseituu.sagi.yukigesho.com/>

最近は諸事のため更新ができてませんが、また片付きましたら色々書いていきたいと思えます ;

十七話「初めての……」（前書き）

知る人ぞ知る、東方 project の二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

十七話「初めての……」

俺が目を覚ましたときには、あの嘔吐感や悪寒は消えており、見えている天井が俺の部屋のものだと気づける程度には頭のほうも働いてくれた。

「う……」

俺は身体を起こし、何が起こったのかを記憶を探りながら手早く確認する。

（確か、永琳さんの部屋で手伝いをして……）

レイセンさんが永琳さんに連れて行かれて、入れ違いに入ってきたてみちゃんの運んできたお茶を飲んで

「あ……」

意外にも、一つ目の疑問は早くも氷解した。

またあのうさぎだな。

「まったくあの悪戯うさぎは　うわあっ!？」

それは布団から出ようと腰を上げたときだった。

何かを踏んづけ、そのまま派手に転んでしまった。

「……つてて。いつたいなにか　」

転んだまま、視線を足元へ送る。

俺はその原因を知ったときまだ夢の中にいるのかと思った。

視線の先にあるのは俺のズボンだけ。そう、派手に転ぶ原因を作ったのは他でもない、俺のズボンだったのだ。

しかし不思議なことに、ズボンの丈が異常に長い。

意識を失うまではちょうどいいサイズだったのに、今では裾が余りまくっている。

それだけではない。ズボンの腰周りも、シャツの大きさも、そのすべてが大きかった。

「もしかして……」

まさかという最悪の仮定を打ち消すために、俺は自分の体を一瞥した。

「おい、嘘だろ……」

どう見ても縮んでいる。俺が。

立ち上がってみるとそれは明らかだった。

明らかに目線が低い。

原因は考えるまでもない、あの悪戯兎だ。というか、それ以外に考えられない。

「いったい何を入れたんだあいつは……」

「あら、起きたみたいね」

一人、部屋で自分の体の変化を確認していると背後の襖が開き、永琳さんが驚くこともなく部屋に入ってきた。

「あの、俺、なんか縮んじやっただけですけど……」

「実はそのことなただけだね」

……。

彼女はどこか言いよんどんでいたが、それでも時間をかけて事の詳細を説明してくれた。

「……つまり、俺がこんな目にあっているのは結局、永琳さんの作業なんです」

「ごめんなさいね。薬の実験台になってほしいって言っても、引き受けないと思ったから、つい」

彼女は無邪気な顔で笑っているが、言っていることは相当酷いものがあるぞ。引き受けないってわかってるなら最初からするなよ。

しかし、犯人がてみちゃんではなく、彼女だったのが不幸中の幸いだったのかもしれない。

「でも、元に戻せます……よね？」

「えっ？ それは、ええ、まあ。できるわよ」

「……」

俺はそのまま無言の圧力をかけてみる。

「だ、大丈夫よ」

「……………」
まさか…………マジ？ そんな薬、人に飲ませるなよな。この、科学に魂を売ったマッドサイエンティストめ。

「と、とりあえず作れるはずだから、できるまでは我慢しててね？」

「……………わかりましたよ。とりあえず、お願いします」

諦めの息を吐くと、俺は薬の完成までの時間をどう過ごすのか、その思案に取り掛かった。

薬がない今、そのことに文句を言っても始まらないしな。

「それじゃ、私は研究室に戻るわ」

その後、永琳さんは部屋を去り、俺の部屋に再び静寂が戻ってくる。

「はあ…………、なにしようかな……………」

畳に大の字で広がり、何を思うわけでもなく、天井の一点を見つめてみる。

そうしている間にも、俺の瞼はその意思に関係なく静かに閉じていった。

…………。

…………。

「結構可愛い寝顔してるのね」

聞き覚えのある、輝夜の声が耳の近くで聞こえる。

顔にかかるわずかな吐息が俺と彼女との距離を物語っていた。

しばらくの間、彼女は口を閉じて俺のことをしげしげと見ていたのだろう、顔にかかる息がその距離を保っている。

「こんなに無防備に寝てたら悪戯したくなっちゃうわね」

しかし、それもすぐに飽きてしまったのか、彼女は俺の頬を指で突つつきはじめた。

痛くはない。しかし、どういいうわけか恥ずかしい。

しかし、突つついている本人は、

「意外に柔らかいわね」
思い切り楽しんでいた。

「」
「」
それも鼻歌まで歌いながら。

起きようとも思ったのだが、

(もう少しだけ、こうしてみるか)

こんな彼女を見たことがなかったこともあり、俺はもうしばらく寝たふりを続けることにした。

輝夜の新たな一面をもう少し見ていたい、そんな思いもあったのだろう。

それから数分後、

「なかなか起きないわね……。これじゃあ退屈じゃない」

ようやく飽きたのか、彼女の呼気は俺から遠ざかった。

さて、そろそろ起きて反撃にでもうつりますか。

「あの……ずっと起きてるんだけど」

「は、晴輝っ!?! あ、っわっ!?!」

「なっ!?! 輝夜っ」
「」
ドタン。

それは一秒程度のことだった。

改めて俺の寝顔を見ようとしていたのだろう。前のめりになっていた輝夜が急に離れようとして、体制を崩し後ろに倒れそうになり、咄嗟とつぱに彼女の体を俺は引き寄せていた。だが、力が強すぎたみたいで輝夜の体はそのまま俺へと倒れこんできたのだ。

重力にしたがって落ちる輝夜の体を俺は受け止め、俺は自分の体を緩衝材代わりにする。

軽い音とともに彼女の体重を乗せた衝撃が伝わるが、それは予想以上に軽いものだった。

「……てて。大丈夫?」

とはいえ、小さくなったこの身体に不意にかかった衝撃。案の定、

俺の肺は対処できなかったみたいで、わずかに咳き込んだ後、胸の上にいる輝夜の無事を確認する。

「あ、うん……」

輝夜は顔を上げ、どうも受け止めたときに顔をうつてしまったらしく、わずかに赤くなっている鼻の頭を押さえていた。

「鼻、大丈夫？」

彼女は笑顔で答えると俺から離れることもなく、匍匐ほふくの姿勢を維持したまま俺を見ていた。

「あ、あの……」

俺は思わず息を呑んだ。

いつも子供に思えた輝夜の顔が妙に大人びて見える。

それは俺が小さくなったためなのか、それとも他に理由があるのかはわからない。

だが目の前にいる、俺の身体を挟み込むように四つんばいの姿勢を保っている輝夜は以前垣間見たこわく蟲惑的な笑みを浮かべていた。

「か、輝夜？」

「……………」

輝夜は何も答えずその手を、足を、少しずつ前に動かし、俺に迫る。

俺はそんな彼女から逃げることも、抵抗することもできなかった。否。そんなことを考え付きもしなかったのだ。

彼女の見せるあの笑顔に、俺は魅入られてしまっ

「……………」

支えとして俺の顔の両脇に置かれた両手。

「か……………」

やがて俺と輝夜の距離は縮まり、俺は言葉を発すことさえできなくなっていた。

非の打ち所のないほどの美しいものを見たとき、人はそのときの心境を『言葉にはできないほど』と例えるが、本当に言葉にすることができない。

風の声も、鳥のさえずりも。庭にある鹿威ししおどしさえもその音を消している。

日が雲に隠れたのか、部屋の明度が落ち、輝夜の顔に影を生み、その表情を隠した。

この永遠に続くとも思えた時間、俺と輝夜は互いに視線を交わらせ、

「晴輝……」

一言。俺の名を呟いた彼女は目を閉じ、そのまま。
俺の思考はもう、完全に考えることを放棄してしまい、彼女のすることをただ受け入れようとしていた。

十七話「初めての……」（後書き）

初めての方、初めまして。そうでない方一週間ぶりです。氷雪うさぎです・x・

なんだかんだでもう17話です。

こうして上げ続けるのも皆様のおかげなんですよね。しみじみ。

できれば今日中にSSをひとつ書いてサイトのほうに上げようと思います・x・キリッ

毎週末に一話ずつupしていこうと思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

SSは基本upしないと思いますので、よければ下記のサイトで「[閲覧](#)」になってください。

Website：<http://hyousetuusaagi.yukiagesho.com/>

最近は諸事のため更新ができてませんが、また片付きましたら色々書いていきたいと思えます；

十八話「決意」(前書き)

知る人ぞ知る、東方 project の二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

十八話「決意」

「姫様？　ここですか？」

輝夜と俺との顔影がんえいが重なる寸前、この部屋へ向かってくる永琳さんの声により“それ”は中断された。

止まっていたかのように思えた時間が動き出し、輝夜の顔が遠ざかる。

そして永琳さんが襖を開けてこの部屋に入ってきたときには、輝夜は何事もなかったかのように座っていた。

「やはりここでしたか……」

「ど、どうしたんですか？」

仰向けになっっている俺については何も言わず、永琳さんはわずかに眉をひそめている。

まるで、さっきのことを問い詰められているような気がして、俺は慌てて身体を起こした。

「……どうしたの、えーりん？」

輝夜はあれだけのことをしておきながら、いつもののんきな声で首をかしげている。

しかし、彼女に対している永琳さんはいつも以上に静かな面持ちをしていた。

「……先ほどのお話ですが、結論が出ました」

そしてわずかな沈思を経て、彼女は言葉を切り出す。先ほどの話？　永琳さんの言に輝夜の顔に翳りが見えたと思えば、そのまま彼女はうつむいてしまい、やがて言葉を失ってしまった。

永琳さんの言ったことの意味はわからないが、輝夜の姿を見る限りいい知らせではないのは確かだ。

「彼に、話すことになりました」

下を向いて反応を見せない輝夜に永琳さんは簡潔に結論だけを言

つて、視線を俺のほうへと向けた。

「晴輝君」

月見の縁側で彼女が言った言葉を思い返されるような、冗談が入る隙間なんて微塵もない声で、

「あなたの世界へ帰る手段が見つかったわ」

彼女ははつきりと言い放った。

「それ、本当ですか？」

俺の言葉に彼女は否定の言葉を返さず、ただ頷く。

「そうですか……」

安堵や落胆、他にも言い表すにはたくさん言葉の要してしまいそうなほどの感情が入り混じったため息がこぼれた。

この幻想郷を離れ、元いた世界へと帰る。

帰りたいたいという気持ちは確かにあったし、決して揺らぐこともないと、その覚悟もあつた。

だが、目の前でうつむいている輝夜を見ると、そんな覚悟はあっさりと折れてしまい、俺の気持ちはあっけなく揺るごとくとしている。

「……詳しい話はいつもの広間でするわ。あなたに紹介したい人たちもいるし」

俺のそんな気持ちを押し量ったのか、永琳さんはそれだけを告げて部屋を出ていった。

「輝夜……」

「……」

彼女は変わらず、何も答えてはくれない。

永琳さんの話し方から考えれば、彼女はこのことを知っていた。

だが、そのことを知っておきながら彼女は何も話してくれなかった。

「……………行こうか」

言いたいこと、伝えたいことはたくさんあつたが、俺は彼女に手をさし伸ばすことしかできない。

「……………」
彼女は小さく頷くと、伸ばした俺の手をとることなく一人、先に部屋を出てしまった。

輝夜の後を追って俺が広間に入ったとき、八人の人がそこには座っていた。

既に知っている輝夜、永琳さん、レイセンさん、てみちゃん、妹紅、慧音さんの六人に加え、一人は腋の部分が露出されている、文字通り一風変わった巫女装束を着た少女と、もう一人は白をベースとした八卦模様のワンピースに近いものを着た女性である。

「紹介するわね。彼女が博麗^{はくれい}霊夢^{れいむ}で、その隣にいるのが八雲^{やくも}紫^{むらさき}さんよ」

「ふーん、この子が御巫晴輝ね」

「彼が、ねえ……。まあ、よろしくね」

「御巫……晴輝です」

永琳さんに紹介されて霊夢さん、紫さんの順に挨拶を交わす。

二人は挨拶を終えると、俺を新種の動物のようにしげしげと見ていた。

だがそれもすぐに終わり、頃合を見ていた永琳さんが話を次の段階に進める。

「晴輝君。先に聞いておくけど、本当に元の世界に帰りたいのね？」

「……はい」

広間にいる一同の視線を受け、俺は迷うことなく答える。

一方は、思い出などまったくと言っていいほどの世界。

もう一方は、充実した日々を送ってこれた異世界。

どちらかの世界を選ぶとしても、俺はこの異世界を選ぶはずだ。

だが、俺はそれを選ばなかった。

「俺は元々この世界の住人じゃないですし。それに、決めたくんです……もう逃げないって。それが例え、どれだけ辛く、逃げたくなくなるようなものであろうと」

人の一生は、その中身がどんなものであれ 限りがあるからこそ、いつかは宝石のように輝く。

それを教えてくれたのは他の誰でもない。彼女、蓬莱山輝夜が教えてくれたんだ。

永遠に続く命だから、死を失ったからこそ。連綿と続く“今”を大切にする。

だからこそ、俺は元の世界に戻る。いや、帰らないといけないんだ。

本来俺がいるべき“今”という、元いた世界へと。

例え、居場所がなくても……いや、ないなら作ればいい。ただそれだけだ。

「……………」

そこにいた誰もが俺の発言に驚き、戸惑いを隠しきれていなかった。

輝夜に出会わなければ、俺の選択はやはり他の人たちと同じ、この世界に居続けるというものに至っていただろう。

けど、彼女に出会ったから、彼女が教えてくれたから、俺はこの答えを出すことが出来た。

しかし、その答えを与えてくれた輝夜だけは終始口を閉ざし、表情も変化させることはなかった。

「……………」わたし、部屋に戻るわ。昨日から徹夜で狩りしてたから眠くなっちゃって」

波一つ立っていない、水面のような静かまりかえった広間に、輝夜は波紋を立てる一言を残して腰を上げる。

誰一人として彼女を止めることなく、その静寂は輝夜がいなくなってもなお、この部屋を漂い続けていた。そこにいる誰もが声を出さなかったのは、彼女のそれが嘘だとわかっていたからだろう。

「……………」

俺も部屋を出る彼女に言葉をかけなかった。

いや、かける言葉が見つからなかった。

「輝夜……」

「あなたが気にする必要はないわよ。……姫様は来ないわ」

永琳さんの言葉の最後は小さく、注意しないと聞き取れないほどだった。

「……………」

部屋を出るとき彼女が見せた表情。

俺はあの顔を知っている。

一人、縁側に座って月を見上げていたときに見た輝夜。

彼女が何を想い、空に浮かぶ月に涙していたのか、俺は今、少しだけわかった気がした。

その後わずかな間を置いてから、俺が元の世界へ帰るための話は再開された。

「……………」

「それじゃ、話を進めるわ」

俺をはじめ、広間にいる（霊夢さんや紫さんもこのおかしな空気を感知取ったためか）誰もが、話を再開することにわずかな抵抗を抱いていた。

俺は首を縦に振り、話を進めるよう促す。

永琳さんは全員の顔を一瞥してから話の続きを始めた。

「……実はここ少しの間、私はこの世界について色々調べていたの。前に一度、晴輝君にも話したけど、あなたがこの世界にどうやって来たか。覚えてる？」

「確か、世界の波長……でしたっけ？ それと、俺の波長が合ったから俺がここに飛ばされた……ですよな？」

「その通りよ。そして、二つの波長の距離が近くなったのはここ最近だわ。これは私の考えだけど、あなたの感情が直接この波長に影響を与えているかもしれない」

彼女は目を伏せて、わずかな間を作ると、

「そして、あなたの持つその波長が今、元の世界と合わさろうとしているのよ」

「簡潔に答えだけを述べた。」

「恐らく、波長がちょうど合わさるのは明日の夜ね」

「明日……」

それは突然の別れの宣告だった。

短かったが、俺にとってかけがえのない時間を過ごしたこの永遠亭との離別。

それが明日に控えていた。

「ちなみに、これを逃すと次はいつに……？」

「わからないわ。でも、次はないと思っただほうがいいでしょうね。」

あなたがこのことを知った以上、もうあなたの持つ波長がもう二度と元の世界の波長に合わさることはないかもしれないし」

俺の考えていることを見透かしたように、彼女は質問に淡と答え、その補足を加える。

「……………」

明日を逃せばもう二度と俺は元の世界に帰ることができない。とどのつまり、彼女の言っていることはそういうことだった。

「でも、それだけじゃないんでしょ？ 紫はともかく、それだけなら私がここに呼ばれる理由がないじゃない」

沈黙へと向かおうとする空気のなか、霊夢さんだけがわずかな微笑を浮かべ、永琳さんに視線を送る。

それを受けて永琳さんも同じ笑みを見せ、

「さすがに戦い好きで有名な博霊の巫女ね。あなたたちを呼んだのはここから先のことに問題があるからよ」

俺のほうに視線を戻した。

「問題は二つよ」

彼女は言葉を切り、指を二つたてると早速その一つを折る。

「一つは場所よ。こっちに来たときとは違って、人為的に元の世界に戻るためには、どうやら魔法陣や、それに準じる設備が必要なの。」

そしてそれがあるのが、黄泉の穴よ。それも……最深部の」

「黄泉の、穴？」

その言葉を発端に、その場にいた全員の顔にわずかな黒いものが見え隠れしていた。

「私たち、幻想郷に住んでいるものなら知らない人がいないほど危険なところよ」

「それで私が呼ばれたのね」

事の理解できずにいる俺に永琳さんはまたも補足を入れ、紫さんが納得の笑みを見せる。

「あそこは次元そのものが不安定な場所で、断絶された空間穴くわかんけつがかなりの頻度で発生するの」

「空間穴？」

「私のスキマ空間とほとんど同じものよ」

そう言つて、紫さんが笑うと、俺の目の前に一筋の黒い線が入り、それが開かれる。

まるで人間の瞼のように開かれた、横に細長い猫の瞳のような形をしたそれの中には上下左右どこまでも続いていそうな、大量のじんもく人目が描かれた空間だった。

「な……」

「これが私の能力よ。万が一、あなたたちが空間穴に落ちてても、私がいれば助けられるということよ」

彼女はスキマ空間と呼ばれたその空間を閉じると、もう一度笑みを見せる。

その隣で霊夢さんも何かに納得をし、薄い笑みを見せていた。

「ということは、私を呼んだのはもう一つの理由らしいわね」

「そうよ。ある意味こっちのほうが厄介な問題なのよ」

そう言つて、永琳さんは立てた指の一本を折る。

「実は、この黄泉の穴には何か特別なものがあると思っっている人たちがいるということよ」

「どづいう、ことですか……？」

「つまり、私たちのしようとしていることを邪魔してくるやつがいるかもしれないっていうことよ」

話をいまいち掴み損ねていた俺に霊夢さんが何かを期待している、そんな思いのこもった笑みを抑えることなく見せた。

「ということは……つまり」

「私たちは黄泉の穴に入る前に、その人たちと戦うということよ」
そこにいる誰もが彼女の言うことに異論を述べようとはしなかった。

「晴輝君。あなたの気持ちはそれでも変わらない？」

「俺は……」

元の世界に戻る。

たったそれだけのことで、彼女たちに余計な面倒事しよいこませ
てしまう。

この場にいるみんなにも。そして、輝夜にも。
でも……。

「それでも俺の気持ちは変わりません」

そう。俺は決めたんだ。もう逃げないって。

誰からも、何からも。

十八話「決意」(後書き)

初めての方、初めまして。そうでない方一週間ぶりです。氷雪うさぎです・x・

あと何話あるか……ふふふっ　　今回で18話です。

あれから東方のSSはいくつか書いたのですが、こちらには：、よければサイトのほうで見ていただけると幸いです；

ただ、オリジナルのSSを書くことがあればこちらにも上げます・x・

毎週末に一話ずつupしていることと思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

SSは基本upしないと思いますので、よければ下記のサイトでご覧になってください。

Website：<http://hyousetuusagi.yukiresho.com/>

ようやく更新が；

十九話「伝えなければならないこと」(前書き)

知る人ぞ知る、東方 project の二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

十九話「伝えなければならぬこと」

その後、永琳さんの挙げた問題点に対していくつかの対策を決めてからあの話し合いは終わりを迎えた。レイセンさんと、てぬちゃんはそれぞれ自室へ戻り、妹紅と慧音さんは亭内の庭で月を見上げながら立ち話をしている。

永琳さんや霊夢さん、そして紫さんは広間に残ってさっきの話を具体的に、そしてより確たるものによようと、知恵を出し合っていた。

そんな部屋の隅で自室に戻ることもなく、壁にもたれかかっている俺はというと、一人の少女のことばかり考えている。

(輝夜……)

明日のこと考えないといけないと頭を働かすが、さっきから頭に浮かぶものは輝夜のことばかりだった。

蓬萊山輝夜。

思えば、俺がこの幻想郷に来て初めて会話らしい会話をしたのが彼女だった。

女性としてはまだ未成熟な、少女としての愛らしさを残した彼女の笑顔。そして、時折見せる妖艶な“女”としての彼女の笑み。

俺はそんな“輝夜の笑顔”に胸を突かれ、励まされ、そして

「……ていたのか？ いや、まさかな……」

気がつけば、俺は自分自身に笑っていた。考えてもみればありえることのないことだからな。

まあ、置かれている状況が状況だ。無茶苦茶な妄想だって、こんなときくらいは、いや、こんなときだからこそ出てくるんだろうな。

そもそも、俺にはそういう趣味はないし、タイプだってもっとこう……ボンッ、キュッ、ボンッ、みたいな

「って、何考えてるんだよ俺……」

頭を軽く小突き、話を本題に戻す。

「今は明日のことだけを考えればいいんだ」

俺は明日、この幻想郷を出る。この世界を離れて、元いた俺のいるべき場所へと帰る。

例え、そこが俺の望む世界でなくてもだ。違うのなら俺が作り変えてやればいい。

もう逃げたりしない。今度こそ俺は向かい合わないといけないんだ。

世界に、あいつに、そして俺自身に。

「……………」

右手で握りこぶしを作ると、俺はすっかり重たくなってしまった腰を上げた。何を考えるわけでもなく、俺は部屋へと足を進めていく途中、広間に残った三人が目に入る。

そのまま素通りしてもよかったが、俺は三人のところに少し顔を出すことにした。

「それじゃ、俺はもう寝ますんで」

「ええ、おやすみなさい」

永琳さんは笑顔で表情を隠し、あとの二人は小さな戸惑いをその顔で表わしていた。

「しかし、驚いたわ。まさか即答するなんて」

と、紫さん。

「ほんと。私はここに残ると思っていたのに」

と霊夢さん。

「約束、しましたから」

「……………」

俺の言葉に永琳さんは目をそらし、口を閉ざしている。

このとき、俺は彼女が何を考えていたのか知るはずもなかった。

彼女たちと別れた俺は輝夜の部屋に行くことはなく、自室でいつもと変わらない就寝の時を迎えようとしていた。

「……………」
頭では一刻も早く身体を休めて明日に備えろと言っているのに、心のどこかではそれを拒んでいる自分がいる。

今、すべきことがあるだろ？ 行くべきところがあるだろ？

どこからともなく、何度も俺に語りかけてくるのだ。

しかし、それがなんなのか、どこへ行かないといけないのか？

その答えを何度自分に問いかけても答えは返ってこなかった。

もしかすると、俺はその答えに気づいているのかもしれない。ただ、目を背け続けているだけなのだろう。

(……………輝夜……………)

ふと、俺の脳裏にまた彼女の姿がよぎる。

何度も、何度も。

俺が元の世界に帰ると心に決めたときからずっと。

だが、その理由がわからない。

俺にもう一度、光を見せてくれたから？

果たしてそう断言していいのだろうか。わからない。

「でも、俺は決めたんだ。もう逃げないって……………」

自分に言い聞かせるように、もう一度決意を声に出す。

「それに、輝夜と約束しただろ……………？ “今を生きる” って。だから……………」

そこで俺の声は止まってしまった。そうやって、俺は輝夜の言葉を言い訳に、彼女のことから目を背けていたのだろうか……………？

「……………」

俺が黙ると、辺りは再びしんと静まり返った。

「やっぱり。そんなことだろうと思ったわ」

そんな静寂のなか、開け放たれた障子から控えめな量で聞きなれた少女の声が聞こえる。

「妹紅……………」

声のするほうに寝返り、そこに立つ少女を見る。

このとき、俺はどんな顔で見っていたのだろうか。

「こんなことになるんじゃないかって思ってたけど、ほんと……あんたたちは本当に世話が焼けるんだから」

彼女の見せてくれた笑顔は普段の彼女なら見せてくれないだろう、穏やかなものだった。

清涼の風が部屋を抜けていくなか、妹紅は何も言わずに俺の隣に腰を下ろす。

俺もそれにつられるように半身を起こし、居ずまいを少しだけ正した。

「どうして？ さっき……」

「あんたがいつまでも悩んでるから来てあげたのよ。感謝しなさいよ」

彼女の視線が鋭く俺を睨みつける。明らかに俺への怒りが見て取れるほど、彼女の赤々とした瞳が俺を射抜いていた。

その目は、以前見たことのある、俺が恐れたことのある目だった。「……………」

恐怖こそもう感じはしないが、俺は彼女に返す言葉が見当たらない。

「……なんであんなこと言ったのよ」

「あんな、こと？」

「元の世界に帰るってこと」

「……………」

「別にあんたを責めてるわけじゃないのよ。ただ、あたしは本当にそれでいいのかって、言いに来ただけだから」

彼女はため息を一つつき、穏やかな口調で俺に返答を求める。

正直、俺はまだ迷っていたのかもしれない。

しかし、帰るチャンスは明日しかないのだ。

「でも、俺は……」

「これはあんたの問題だから、あたしは何も言わないわ。でも」
彼女は立ち上がり、背を向けた。月の逆光が彼女をより大きな存在に見せる。

俺はそんな彼女に息を呑み、

「あんたが帰ることで悲しむ人間がいることだけは忘れないで」
彼女の言葉を聞いた。

「俺がいなくなつて、悲しむ人……」

そんなこと、今まで考えもしなかった。

誰からも疎まれ、蔑まれてきた俺。

そんな俺にはまつたくとっていいほど、縁のない言葉だった。
俺という存在がなくなつても世界はなんら変わりなく動き続ける。

俺なんかがいなくなつても……いや、俺がいなくなればみんな喜ぶと思つたことはあつても、悲しむとは思つたこともなかった。

「あんただつて、誰かがいなくなれば悲しいと思ふことだつてあるでしょ？ だつたら、その逆だつてあるに決まつてるじゃない」

顔をわずかに向けた妹紅と視線が合わさる。

彼女の顔は逆光で見えることはできなかつたが、きつと穏やかな、優しさに溢れた顔をしていたのだらうと思う。

「だから、帰るのはあんたの自由だから好きにすればいいけど、伝えないといけないことだけはちゃんと伝えなさい。このまま何も言わないで帰つたら絶対に後悔するわよ。あんたも……あいつもね」

妹紅はそれだけ言つと、縁側から炎の翼を背に作つて飛び去つてしまつた。

「伝えたいこと、か」

俺は、彼女に何を伝えればいいかわからなかった。

それでも……。

十九話「伝えなければならぬこと」(後書き)

初めての方、初めまして。そうでない方一週間ぶりです。氷雪うさぎです・x・

なんともう19話目なんですよ。驚きだ；

お気に入り・評価などありがとうございます。多くの人にこうして読まれて感無量です・x・

オリジナルのSSですが、今絵師の方に挿絵を描いてもらっていたりします。また詳しくは上げたときにも。

毎週末に一話ずつupしていこうと思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

SSは基本upしないと思いますので、よければ下記のサイトでご覧になってください。

Website：<http://hyousetuusagi.yukigesho.com/>

二十話「愛しき姫の想いを知ってもなお、足を止めず」（前書き）

知る人ぞ知る、東方 project の二次創作ジャンル、幻想入り。
また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦く
ださい。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許し
を。

二十話「愛しき姫の想いを知ってもなお、足を止めず」

翌朝、輝夜は朝食のときにも現れず、この幻想郷で俺に残された時間は一秒、一秒、確実に減っていき、気づけば、俺は輝夜の部屋の前にいた。

襖を軽く叩くが反応はない。

「……………」

もう一度叩くも、やはり同じ答えが返ってくるだけだった。

「……………輝夜」

……………。

やはり返事はない。

「……………入るぞ」

一巡の思考を巡らせて、俺は襖を開けた。

部屋に置かれたゲームやパソコンなどの機器。部屋の襖や、障子はすべて閉められ、光の届かない空間がそこにはある。

そして、その中央には畳の上で横になっている輝夜の姿があった。

「はる……………き？」

襖が開けられたことにより一筋の光が部屋に差し込む。

その来客の報せに輝夜は身体を起こし、目を擦りながら俺の存在を確認していた。

「あの、さ。俺」

部屋の中に足を入れ、輝夜との距離を縮めていく。

はつきり見えなかった彼女の顔を見たとき、俺は言葉を失った。

彼女は……………泣いていた。

どれだけの時間をそうしていたのか、知ることはできない。

だが、赤くなった目と頬に残る涙の跡がその時間の長さを物語っていた。

お前は……………俺がいなくなることを、元の世界に帰ることを望んで

いなかったのか？

俺に元の世界で生きるように、あんなに言っていたのに。そう思うと、喜びに似たあたたかな思いが俺を包んでくれるような、言葉にするならふわふわとした感じがして嬉しかった。

だけど、俺はこの思いを変えるつもりはない。

輝夜に言われたからどうこうじゃない。あくまで自分の意思で決めたことだ。

彼女はそのきっかけを与えてくれただけだ。

「……俺、帰ることにしたよ」

「……………」

俺の言葉に彼女は顔を伏せ、何も答えてくれない。

「それで、今日が最後……になると思う」

それでも俺は続ける。

この、言葉にしようにも見つからなかった想いを伝えるために。

「だから、俺」

「晴輝」

不意に言葉を遮って、輝夜が俺の手を掴んでいた。

顔こそ上げてはくれないが、手の震えが物語っている。

彼女もまた、俺と同じように悩んで、心を痛めて、それでも前を向こうとしていると。

そんなひたむきで、起こることと真摯に向き合おうとしていた輝夜がとても愛しく思えた。

「ちよつとだけ、いい？」

「なに？」

「……ついてきてほしいところがあるの。永遠亭の外で待ってて」

それだけ言い、彼女は部屋の奥へと入ってしまった。

それは彼女なりの答えが出たということでもあった。

「輝夜……………」

俺は言われたとおりに、永遠亭の外で輝夜を待つことにした。

五分もしないうちに彼女はやってきたが、やはりその顔は明るい

ものではない。

「それじゃあ、いこっか」

「ああ……」

輝夜に続き、俺も竹林の中を進んでいく。

俺たちの最後になる散歩。

そう、これで最後。

不思議なことに、そのことには寂しさや悲しみはなかった。

むきだしの土道の感触にも慣れ、歩き始めたときの楽しみはもうあまり感じられなくなっていた。

「……………」

「……………」

俺も輝夜も、言葉を交わすことも、互いに視線を合わせることもせず、ただ道を歩いていく。

延々と続くと思っていた竹林を抜けると、そこには緑の平原が広がっていた。

「こんなところが……」

俺は思わずため息が出てしまうほど、この景色に心奪われていた。

一本の大木がある以外、何も無い平原。

雲もまばらの青空。時折吹く風が俺に草の匂いを運んでくれる。

前を歩いていた輝夜は振り返ることなく、両手を後ろに組んで言葉乗せていく。

「ここから見る月はとても綺麗だね、昔はよく見に来たの」

「……………」

「本当はね。晴輝にも見せ……たくて……」

振り返った彼女の目元には涙が溜まり、今にも溢れそうだった。声も上ずり、途切れ途切れになっている。

泣くまいとしていたのだろうが、その堰はすぐに崩れてしまい、今までこらえ続けていた何かを吐き出すように、輝夜は涙を流していた。

「……………」そういうことだったんだな」

そんな彼女の涙を見て、ようやく俺は気がついた。
自分の気持ちに。いや、目を背け続けていた気持ちに。

「輝夜」

俺はそれ以上考えることをやめて、彼女を抱きしめた。
大切な壊れ物を扱うように優しく、だがしつかりと。

最初で最後になるだろう、このひとときが確かに存在したと感じるために。

そして、今まで俺が思ってきたことのすべてを彼女に伝えるために。
「……………」

輝夜は嫌がることも、抵抗する様子もなく、俺の胸に顔を埋めていた。

俺の腕の中に彼女はいる。

まるで一羽のうさぎのように、心を痛めて肩を震わせ、そこにいた。

思った以上に華奢な肩。身長も俺の胸ほどしかなく、力を込めれば壊れてしまいそうなほどの細い体をしている。

抱きしめて、初めて感じることでできる彼女の存在に俺は胸の奥が熱くなるのを感じた。

（そうか……やっぱり、そうだったんだ）

俺が昨日から感じ続けていた違和感。

今やっと俺は確信した。

俺は彼女が　蓬萊山輝夜が好きだ。

幼さの残るその姿も、そこから見せる無邪気な笑顔も。

時折見せる大人びた笑みも、あの夜見せた悲しみの顔も。

すべてを含めて、俺は彼女のが好きなんだ。

「輝夜」

俺は彼女の震えが収まるのを待ってから、答えないことを承知で言葉を続ける。

「俺、お前のことが好きだ」

「!?!」

輝夜の身体がピクリと動く。

「妹紅と戦ってたときのお前も、部屋でひたすらゲームをしてたお前も、その……お風呂にいたお前も、全部ひっくるめてお前が好きだ」

「……………」

彼女は何も答えない。

だが、彼女の両手はその気持ちを表していた。

俺の背中に輝夜の両手がある。それだけでも俺は十分だった。

「その、それだけ言いたくてさ」

「……………」

彼女の沈思にも似た、わずかな静寂が俺を包む。

それからわずかな間を置いてから、輝夜は口を開いた。

「ねえ、晴輝……？」

顔こそは上げてくれなかったが、輝夜の落ち着きのある澄み切った声が、俺の胸元から聞こえる。

「どうして、帰るの？ 向こうの世界が嫌で幻想郷に来たんでしょ？ だったらこのまま……………」

「もちろんそれも考えた。でも、それじゃ駄目なんだよ」

俺は一度言葉を切り、続ける。

「…………俺は、人には人の“帰るべき場所”があると思うんだ。輝夜には、永琳さんやみんなのいる永遠亭がある。そして俺の帰るべき場所は向こうの世界に…………いや、なくても作らないといけないんだ」

「なんで？ 晴輝も居場所をこの幻想郷に、永遠亭に作ればいいじゃない！ 私たちはいつでも歓迎するって言ったじゃない！」

「…………それじゃ駄目なんだよ」

そう。この世界は俺たち“人間”の安住の地には決してなりえない。

来るものを拒まず受け入れるこの世界はきつと、世界に疲れた人が見る、わずかな幻想でできた世界なんだ。だから

「ここに来る人はみんな、少しの間休憩したくてくるんだよ。だから

ら、ずっとここにはいれない。そして俺の休憩は終わった。だから、帰らないといけないんだ」

感情に任せ、思いを言い放つ輝夜を俺は自分でも驚くほど冷静になだめていた。

「確かに永遠亭で過ごした日々は本当に楽しかったよ。でも、俺の居場所はここにはないんだ。俺にはまだ帰るべき世界があるから」
「でも……」

「それを教えてくれたのは輝夜。お前なんだよ。一度しかこない“今”という時を精一杯生きないといけないから。だから俺は行くんだ」

「……………」
彼女は口を閉ざし、わずかに上げていた顔をもう一度伏せた。

「だから俺は、残された時間を輝夜と一緒に過ごしたい」

これは俺の心からの願いだった。

残り半日程度しかないだろう時を彼女と過ごしたい。

それがただの自己満足からくる欲求だということはわかっている。でも、俺は彼女と一緒にいたかった。

これでやっと、俺は……俺たちは前を向いて帰ることができる。別れ方には良い別れ方と、そうでない別れ方とがあるが、これはきつと後者だろう。

「……………」
輝夜の両手がゆっくりと下ろされる。

「やっぱり……………」
彼女の呟いた言葉は風にかき消され、俺の耳に届くことはなかった。

青々とした空の下、俺と輝夜は身体を寄せ合ったまま立っていた。

「輝夜？ 今、何か言っ」

「それえ」

「なっ!？ うわあっ!？」

彼女の言葉を聞きなおそうとした俺に輝夜は倒れこむように体重

を預けてくる。

この不意打ちに俺は太刀打ちできず、あっけなく倒れてしまった。「……ってて。いきなり何するんだよ」

ひっくり返ったまま、俺の上に乗る輝夜に視線をやると、「せつかく天気もいいんだし、日向ぼっこよ?」

さっきまでの沈んだ顔が嘘みたいな、空に浮かぶ太陽のようなあたたかな、悪戯っぽい笑みを見せて、俺の隣に寝転んだ。

「だって、昨日から寝てないんだもん。ねえ、ちよっとくらいいいでしょ?」

寝転んだまま顔を横に向け、彼女は笑った。

輝夜はずるい。

そんな顔をされたら、俺が反論できないのを知っているくせに。

「わかったよ。それじゃあちよっとだけ……って、もう眠ったのか」

大の字で仰向けになった俺の腕を枕代わりにして、輝夜は早くも寝息を立て始めていた。

一晩もの起きていたんだろっし、仕方ないか。

「まったたく……」

誰よりも、何よりも大切な輝夜。

俺は腕の中で眠る彼女を見つめながら、静かに瞼を閉じた。

その夜。

俺は永遠亭の広間には永琳さん、てるちゃん、レイセンさん、妹紅、慧音さん、霊夢さん、紫さん、そして

「いいのですか姫様?」

「ええ。わたしも行くわ。晴輝をちゃんと送り届けたいの」

輝夜を加えた八人が揃っていた。

「いいよね? 晴輝」

彼女の瞳が俺の姿を映す。

俺は何も言わずに頷いて答え、永琳さんに目を向けた。

「晴輝君」

「はい」

俺ははつきりと頷き返す。

昨日とは違い、もう迷いの欠片はない。

「……それじゃあ行きましよう」

そうして俺たちは永遠亭を出て、黄泉の穴へと向かった。

二十話「愛しき姫の想いを知ってもなお、足を止めず」（後書き）

初めての方、初めまして。そうでない方一週間ぶりです。氷雪うさぎです・x・

私的なことでupが遅れてしまいました。申し訳ないです。今もちよつとごたごたとしてます；

毎週末に一話ずつupしていると思いますので、よろしければお楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

SSは基本upしないと思いますので、よければ下記のサイトで閲覧になってください。

Website：<http://hyousetuusagi.yukigesho.com/>

二十一話「八人の舞姫」(前書き)

知る人ぞ知る、東方 project の二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

二十一話「八人の舞姫」

竹林を抜け、そのまま歩を進めると、神話に出てくる大蛇の口のような、大きな洞穴どうけつが俺たちを出迎えてくれた。

どこまでも続く闇。

それは周囲の夜陰とは決してまじりあうことのない、不気味なまでの黒い闇だった。

「ここが、黄泉の穴……」

「ふふ……そうよ。まあもともと、あなたたちには関係のないことだけだ」

ここにいる誰のものでもない声。

その途端、洞穴の奥から紅色の弾幕が俺たちめがけて突進してくる。球形のものや、蝙蝠形の弾幕。

それらは最短距離で俺たちに向かってくるものもあれば、左上空や右に展開し、俺たちの動く先を補足しつつ向かってくるものもある。「！？」

先制攻撃ともとれるこの弾幕に、前に立つ霊夢さんはお札や陰陽玉の形をした弾幕で迎え撃ち、輝夜は手にしている木の枝、『蓬萊の玉の枝』を一振り。

赤、黄、青、緑。球状の、霊夢さんの迎撃に使ったその倍近い数の弾幕が現れ、向かってくる紅を相殺し、さらに残りの弾は洞穴の闇に向かって放たれていた。

洞穴の暗闇の中で弾幕が弾け、闇が煌く。

「悪いけど、私たちの邪魔をしないでくれる？」

彼女が発したその声は俺も聞いたことがないものだった。

輝夜……本気、なのか。

普段では見ることでできない、ゆるみのないきりつとした表情の輝夜。

その様子はハリのある声にも出ている。

しかし、爆音に次ぐ爆音が続き、彼女の声は洞窟の奥にいるだろう、その人には届かなかった。

「噂は色々聞いていたけど、会うのはこれが初めてかしら。永遠亭の主、蓬萊山輝夜」

土煙の舞う、夜陰に混じった闇の中から一人。輝夜よりも短身の少女がそこからこちらへ向けて歩み寄ってくる。

スカートや袖にフリルのあしらわれた、全体的やわらかい感じのするピンクのワンピースに身を包んだ少女だった。

少女は洞窟を背にしたところで足を止め、その低身に似合わない、ふてぶてしさ満載の、傲慢な態度で口を開いた。

「そうね。わたしも初めてだと思うわ。紅魔館の主、レミリア・スカーレット」

輝夜がさらに一步。前に出ると、表情一つ動かすことなくそれに答えた。

妹紅と戦うときに見せていた、相手を見下すような嘲りを見せることもない。

ただ、眼前にいる“敵”を、自分たちのしようとしていることを阻むものをまっすぐに見ていた。

対して、レミリアは相手を見下ろす笑みで応える。

「てつきり引きこもっていると思うんだけど、外に出ることもあるのね。咲夜」

「なんででしょうか、お嬢様」

彼女が声をかけると、何もなかったはずの隣にその人は突然現れた。

文字通り、突然あらわれた。

瞬きをする前まではなにもなかったそこに、人が立っている。

(いったいどうしたことだ?)

「今日は存分に暴れなさい」

「はい」

咲夜と呼ばれた、ヘッドドレスを頭につけ、フリルのあしらわれた服、いわゆるメイド服を着た少女はどこからともなく取り出したナイフを構えて俺たちを見ている。

「今日は犬の十六夜咲夜まで一緒なのか」

彼女の登場に、妹紅が前に歩み出て対峙した。

戦闘意欲の塊ともいえる炎翼を表出させ、戦いの待ち遠しさを思わせるかのごとく、炎を滾らせている。

「私は犬じゃないわ。お嬢様のメイドよ」

そんな彼女を前に、十六夜咲夜はいたって冷静に言葉を返した。

「ちゃんとパッドはしてきたのかなー？」

パッド……？ なんのことだ。

「なっ！？ これはパッドじゃない、生乳だっ！」

だが、止水のように乱れなく澄ましていた咲夜だったが、てみちゃんの発したこの言葉で心という水に波紋を走らせていた。

「別にパッドでもいいじゃないか」

レミリアと咲夜。

二人の後ろからさらに、肩にかかるほどの金髪的一方を三つ編みにして、いかにも魔法使いな黒帽子をかぶった少女が箒を片手に洞窟から快活な笑みとともに現れた。

「まったく。そんなどうでもいいことで言い争ってる場合じゃないでしょ？」

また、彼女の言葉に応えるように、肩ほどまである金髪をなびかせた少女が姿を見せる。

こちらは周りに数体の人形を漂わせていた。

「よくないですっ！！ あなたたちにとってはどうでもいいことですけど、私にとっては大問題なんです！」

咲夜は頬を赤にし、二人に怒声を浴びせている。

ナイフを手にしている手が胸の辺りで止まっているあたり、そういうことなのだろう。

「魔理沙！？ それにアリスまで！？ いったい何やってるのよ？」

顔を赤くして反論する咲夜の後ろから現れた二人の少女に、霊夢さんは驚きを隠せず、その声もわずかに揺れを持っていた。

「いやあ、アリスがどうしてもって言うから……」

「なっ!?! アタシは彼女に言われてよ。戦力があるからって言うから、魔理沙を連れてきただけで、別にあんたじゃなくてもよかったのよ」

「そうなのか？ それじゃあ、あたしは紅魔館に本をとり……あ、いや。借りに行くけど」

「ちよつと、今あんたがいなくなったら困るじゃない」

「誰が？」

「アタシに決まっ なんでもないわよっ!」

いつしか、それぞれ魔理沙、アリスと呼ばれた少女の口論が始まり、緊迫していたはずのこの場の空気が弛緩の方向に流れつつあった。

「霧雨魔理沙か。そっちの人形使いは聞いたことがないが……」

「アリス・マーガトロイドさんですよ。以前、永遠亭に来たこともあります。姫様の言う“つんでれ”の人らしいですけど」

言い合いをしても、ちゃっかり臨戦態勢をとっている二人を慧音さん、レイセンさんがそれぞれ対する。

「1、アタシはツンデレじゃないわよっ」

なんていうアリスの反論を無視して、レイセンさんは俺たちのほうを向くことなく言葉を発した。

「御巫君、姫様。ここは私たちがなんとかしますので、早く奥へ」

「あら、あなたなんかでアタシを止めれるのかしら？」

「!?!?」

飛んできたのは七色の弾幕。

その主はレイセンさんを睨む鋭い視線の主でもある、アリスのものだった。

「この前の一件で懲りたと思っていたけどね」

「月のうさぎの力を過小評価していると、痛い目を見ますよ」

後姿だけでもわかる。レイセンさんの持っている、いつもの空気が変わっていた。

「だーいじょーぶ　れーせんがやられたらわたしが二人とも相手するから」

その隣にはあの特有の、悪だくみを考えついた笑みを見せているてるちやんの姿もある。

「おいおい、そのセリフは私に勝ってから言ってくれよ?」

そんな悪名高い、永遠亭に住む因幡の素兎に対して、魔理沙は好戦的な笑みで応じる。

「……あの二人は彼女たちに任せるとして、妹紅」

「ああ。あたしたちはこの二人だね」

一方、妹紅の隣には慧音さんが立ち、レミリアと、その隣にいる咲夜の動きに睨みをきかせていた。

「一人で私を止められるかしら?」

余裕を持って俺たちを見ているレミリアと、

「お嬢様のお手を煩わせるわけにはいきません。ここは私が」

例え一人でも、二人まとめて相手しようとする咲夜が立ちほだかっただ。

「御巫」

「なんですか?」

突然名を呼ばれた俺。

その声主たる慧音さんの言葉に、俺は前にいる四人への警戒を怠らずに耳を傾ける。

「ここは私たちに任せろ。お前たちはそのまま奥へ行け」

「でも、それじゃあ慧音さんたちが……」

弾幕なんていう戦いについて、まったくの素人である俺でもわかる。

あのレミリアとかいうやつは他の三人とは明らかに実力の桁、次元が違う。

おそらく、彼女たちに対峙している四人が総がかりで戦っても勝

てないかもしれない。

それほどまでに彼女は強い、と俺は思った。

「任せろと言っただろ。それに、時間にあまり余裕がないんだ。お前たちだけでも先に行け。なに、勝てなくても時間稼ぎくらいはできるさ」

そんな俺の考えを見透かしていた慧音さんは振り向き、わずかな笑みをこぼした。

「……わかりました」

俺が頷くのを合図に、慧音さんを筆頭に、妹紅、レイセンさん、そしててみちゃんと、続きざまに四人はそれぞれの弾幕を一斉に放ち、その身を空に上げる。

特有の美しさを内在するそれらが入り混じり、弾幕のサラダボウルと言ってもいいくらいにごちゃごちゃになったそれらが洞窟側の四人に襲い掛かった。

しかし、対する四人はさらにその上を行く。

四人のうち二人。魔理沙とアリスが空を舞って、これをなんなくかわす。

レミリアは向かってくる弾幕のすべてを両手で薙ぎ払うという力技で圧倒し、

咲夜はいつの間にか弾幕の外にその姿を見せていた。

明らかに常人離れた行動。

さらに、応戦の弾幕をそれぞれ張りながらレミリア、咲夜も空に飛び上がった。

そうして空に浮かぶ八人。

その姿はまるで、夜空の舞台上で踊る舞人^{ぶじん}。いや、舞姫のようだった。

一瞬、その姿に見とれてしまいそうになったが、自分のすべきことを思い出した俺は輝夜の手をとる。

「輝夜！」

「ええ、行きましょうー！」

彼女も俺の手を握り返してくれた。

カウントダウンはもう始まっている。

それでも

俺は今、幸せだ。

最後の最後で、彼女と心が繋がったから。

彼女もそう思ってくれているだろう。

別れまでの時は近い。

それでもいい。もう、迷うことはない。

俺たちは空で戦う彼女たちの下を一気に駆け抜けた。

今日までの休憩を終え、明日を見るために。

二十一話「八人の舞姫」(後書き)

初めての方、初めまして。そうでない方一週間ぶりです。
氷雪うさぎです・x・

なんだかんだで年末ですね。皆様一年ありがとうございました・x・
毎週末に一話ずつupしていることと思いますので、よろしければお
楽しみください。

文面が小説というより、AVGチックなのはご容赦を。

SSは基本upしないと思いますので、よければ下記のサイトでご
覧になってください。

Website: <http://hyouseituu.sagei.yukiagesho.com/>

二十二話「終わり始まり」(前書き)

知る人ぞ知る、東方 project の二次創作ジャンル、幻想入り。また、原作設定と一部違う部分があると思うので、そこはご容赦ください。

文頭のスペースの有無は原本コピーで出てきちゃってるのでお許しを。

二十二話「終わり始まり」

漆黒の闇だけが支配する世界。

永琳さん、紫さん、霊夢さんが先行して飛んでいく後を、俺と輝夜が続いていく。繋いだ手だけが命綱の状態でもうどれくらい経つのだろうか。

手のぬくもりも、彼女のものなのか、俺のもののかもわからない。

視界は真っ暗だが、外で戦っている彼女たちの声が聞こえない距離まではきているようで、聞こえる音が空を切る音と、時折目の前で弾ける弾幕の音だけになっていた。

何も見えないのは彼女たちも同じようで、時折放たれる弾幕の光とそれがぶつかったことを考慮して飛行ルートを選んでいるようだ。俺も輝夜も、わずかに前を飛ぶ三人だけが安全に進む頼りだった。

「……………」

「……………」

「……………」

誰一人として、言葉を出そうとはしない。

わずかにうかがえる輝夜の横顔も険しく、さすがに今は余裕がないようだ。

俺は何も見えないという恐怖に押しつぶされそうになりながら、この飛行の先にある別れのことと忘れて、早く終わりが来ることから祈った。

暗闇の中を飛ぶこと数分。ようやく俺の足は地につくことができた。

「そこで待ってなさい。今、明かりをつけるわ」

先着していた永琳さんらによって、燭台に火が灯される。媒体を

介さずに燃える火によって、俺たちのいる空間を認識できる程度の明るさが広がっていく。

「……何も、ないじゃないですか」

俺が見たのはただのただっ広い部屋だった。

部屋の中央になにやら魔法陣らしきものが描かれている以外、この部屋に変わったものは何もなかった。

「この陣があなたの帰る道よ」

火を灯し終えた三人が陣を囲むように立つと、俺に向かって永琳さんが小さく頷く。

「……はい」

あそこに立てば、俺はこの世界と別れて元の世界に帰る。

そう。あそこに行けば輝夜とも……。

「晴輝……」

輝夜が俺の手を放さない。いや、俺が放そうとしなかったのだ。

決心したというのに、いざその時が来たら躊躇ためらってしまうなんて我ながら情けない。

「わたしはいいから。早く行って」

「でも……」

輝夜の顔が見れなかった。

俺の顔を見ているのか、それとも下を向いているのかもわからない。

「決めたんでしょ？ 元の世界に帰るって」

今にも消えてしまいそうな、か細い声で輝夜は俺の背を押してくれている。

繋いでいる彼女の手にはもう力がない。

輝夜なりの別れの合図。

「……………」

俺はそんな彼女に何も言うことができなかった。

そして

輝夜の手が俺の手をすり抜け、繋いでいた俺の左手が寂しそうに宙をさまよっていた。

「さすがにあの子たちじゃ心配だから、私も戻るわ。永琳、後はお願いね」

次に俺が聞いたのは、冷たく研ぎ澄まされた輝夜の声だった。

「……はい」

俺たちに見送られながら輝夜の姿が、暗闇に、消えていく。

ついに来てしまった、別れの時。

それからどれだけの時間、俺はそこに立っていたのだろうか。

過ぎ行く一秒が十秒ほどの時間に感じられてしまう。

まるで周囲の暗さが時の流れをも狂わせているようだった。

「……晴輝君」

俺を気遣ってくれているのか、永琳さんの声もどこか小さく、霊夢さんや紫さんはなにも言葉を出そうとはしない。

「もう、時間がないんですよね。お願いします……」

石のように重くなった足を一步、前へ出す。

行かなくちゃ。

いつまでも迷ってちゃ、俺をここに連れてきてくれたみんなの気持ちが無駄になってしまう。

そうして俺は魔法陣の上に立ち、その周りには永琳さんたちが囲むように立っている。

「さ、後はあなたが戻りたいところを強く念じなさい」

「……はい」

「それじゃ、行くわよ」

それが、俺の聞いた最後の言葉だった。

俺の視界を足元から溢れ出てくる光が覆い尽くす。

(ありがとう……)

霊夢さん、紫さん。

数日前に出会ったばかりの俺のために、ここまで来てくれて。

もし、また会うようなことがあれば、今度はもっと話をしたいな。

てみちゃん。

ことあるごとに悪戯ばかりして、本当に迷惑なだったんだぞ。でも、てみちゃんのおかげで永遠亭こゝろにいる間、退屈こゝろしなくてすんだよ。

レイセンさん。

思えば、永遠亭で一番まともだったのはあなただったのかな。いじられるのがピッタリだと思ってしまったのは謝るよ。ゴメン。

慧音さん。

このわけのわからない世界に飛ばされて、ある意味一番人間らしい人と話せたと思うよ。一緒にお月見ができなかったのが心残りです。

妹紅。

最初はかなり怖かったよ。いや、ほんとに。

でも、君がいなかったら俺はいつまでも後ろ向きだったんだろうな。これからも、後ろ向くのもほどほどにしておくよ。

永琳さん。

誰よりも輝夜のことを思っていましたね。ただ、ちょっと過保護すぎるとは思いますけど。今でもあのときの矢の恐怖が鮮明に残っていますよ。

そして、

(輝夜……)

君のおかげで俺はもう一度、“生きて”いけるよ。

……ありがとう。

俺は静かに目を閉じ、届かぬ想いを呟いた。

輝夜、今までも、そしてこれからもずっと

瞼越しに、集まった光が拡散していき、明るさが落ちていくのが確認できる。

そうして、俺は目を開けた。

「え……？」

そこは見覚えのある部屋だった。

平安調の内装が印象的な部屋に、無造作に置かれたゲームやパソコンなどの機器。

「か、輝夜っ!？」

そして、中央に敷かれた布団の中には寝着姿しんぞうの輝夜がいた。

「は……るき？」

いったい何が起こった？ 俺は元の世界に帰ろうとあの光に包まれて

「晴輝っ」

などと、俺の頭が冷静に動く前に、布団から出てきた輝夜が俺に飛びついていた。

「うわっ!？」

そのまま俺は畳の上に倒れ、その上にはあの日と同じ

「なんで……」

輝夜の姿があった。

ただ、

「なんで、かえって……」

彼女は泣いていた。

「なんでだろうな、俺もわからないや。でも」

俺が身体を起こすと、輝夜が何も言わずに体を預けてくる。

昼間にもこうしていたのに、なぜか懐かしい感じがした。

「俺は輝夜のそばにいたかった。ってことなんだよ、きっと」

空に浮かぶ月の光が部屋を照らし、俺たちを照らす。

遠くで弾幕の弾ける音を聞きながら、俺たちは体を寄せ合い、空

に浮かぶ月を見ていた。

「もう、どこにも行かないんだよね？」

「帰るにしても、帰れなくなっちゃったんだから、ずっとここに
いるわ」

「くすっ」

小さく彼女が笑う。

「どうしたの？」

「ううん。なんでもない」

その微笑みは月のように静かで、心が落ち着くものだった。

元の世界に帰ることはできなくなっただけど、

「改めて、よろしくね。輝夜」

「こちらこそ、よろしくね。晴輝」

これもまた一つの物語の終わりなんだろうな。

いや、もしかしたらこれが始まりなのかもしれない。

俺と、輝夜^{彼女}。二人で作っていく物語の……。

「二十二話」終わり始まり」（後書き）

初めての方、初めまして。そうでない方一週間ぶりです。
氷雪つさぎです・x・

ついに一年明けましたね、これからもよろしくお願いいたします。
x・

さて、今話で永月物語の一章は終了でございます。

二章はサイトにupされているのですが、中身的にupしているのか若干悩んでおります；

よければ一章の感想などとともにご意見を下さると幸いです。

上げるときはまた別作品扱いであげようと思います。

SSは基本upしないと思いますので、よければ下記のサイトで閲覧になってください。

Website：<http://hyouseitussagi.yukiage.com/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0268n/>

永月物語

2011年1月2日18時40分発行